女性改造

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年十月一日發行　大正十二年九月十三日印刷納本



第二卷第十號

大震災記念號

女性改造　大震災記念號

表紙　首の落ちた上野大佛

口繪　◇日比谷附近の火元◇燃燒しつゝある丸ノ内の慘狀◇日比谷交叉點の光景◇馬場先門附近の外濠より眺めたる東京會館◇數百の死傷者を出した內外ビルディング◇破壞せる神田橋◇二科會陳列品の破壞◇京橋河岸附近の大龜裂◇日本橋附近燒跡の慘狀◇銀座通りの慘狀（其の一、其の二）◇上野より見たる淺草、下谷の慘狀◇倒潰せる鎌倉八幡宮◇橫濱の正金銀行◇永代橋◇洲崎全景◇避難民の雜閙せる淺草仲見世◇二つに折れた淺草十二階◇東久邇宮師正王殿下御遺骸到着◇芝浦に到着せる救助米◇芝浦から船で歸鄕する罹災民◇上野松坂屋附近の電車の燒殘り◇大震災後の神田方面バラック◇宮城前廣場の避難民の天幕◇深川西平野署長より御說明を受けさせらるゝ攝政宮殿下◇芝公園に避難した罹災者に給飯◇水をせがむ深川遭難者◇中央郵便局に雜沓せる罹災民◇阿鼻叫喚の品川驛避難者◇罹災者を滿載せる汽車品川を離る◇避難者の行衞を貼付せる西鄕銅像◇吉原死の池の納骨堂

再建に對する女性の分け前……北昤吉……一

經濟社會はどうなるか……堀江歸一……一三

震災と諸家の感想……一九

島崎藤村　上司小劍　水守龜之助　桑木嚴翼　近松秋江
吉江喬松　久保田萬太郎　平塚らいてふ　與謝野晶子　南部修太郎
室伏高信　廣野つぎ　千葉龜雄　岡本綺堂　吉屋信子
山田邦子　室生犀星　藤森成吉　村松正俊　高須芳次郎
正宗白鳥　廉田實　帆足理一郎　白鳥省吾　豐島與志雄
本間久雄　木村莊八　新居格　中村吉藏　大島正德
加能作次郎　井上秀子

地震に對する對話……理學博士　石原純……二八

今後大地震が來るか……理學博士　今村明恒……三四

今後の地震に對する心得……理學博士　中村左衞門太郎……三五



遭難哀話

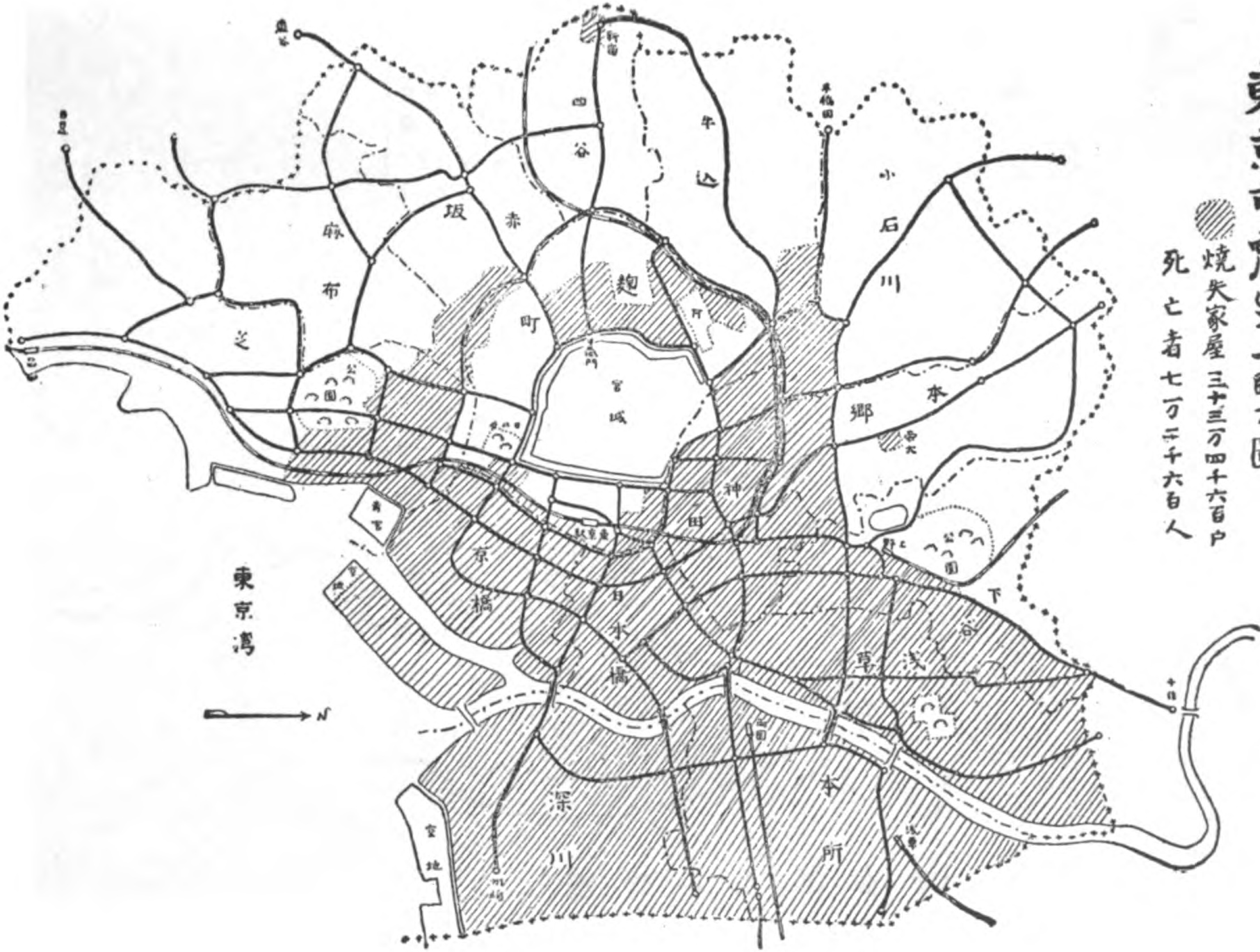
焼跡に肉親の遺骨を探す……岩村義延…三七
臨月の妻を助けて九死に一生を得た話……森まさ子…四〇
母を見殺しにした小田原の一夜……葉山一郎…四二
職責を全ふした七十の爺さん……野村ちあき…四五
血涙記……原田仙…四六

焦熱地獄を巡る……藤澤清造…五一
罹災者の状況と婦人團體の活動など……澁谷のぶ…六九
湘南震災地踏破記……柴山武矩…七六
吾妻橋の火を逃れて上野へ……宮城久輝…八四
被服廠跡遭難記……濱本浩…八八
荒都記……竹久夢二…九二
震災日誌……九七

時評

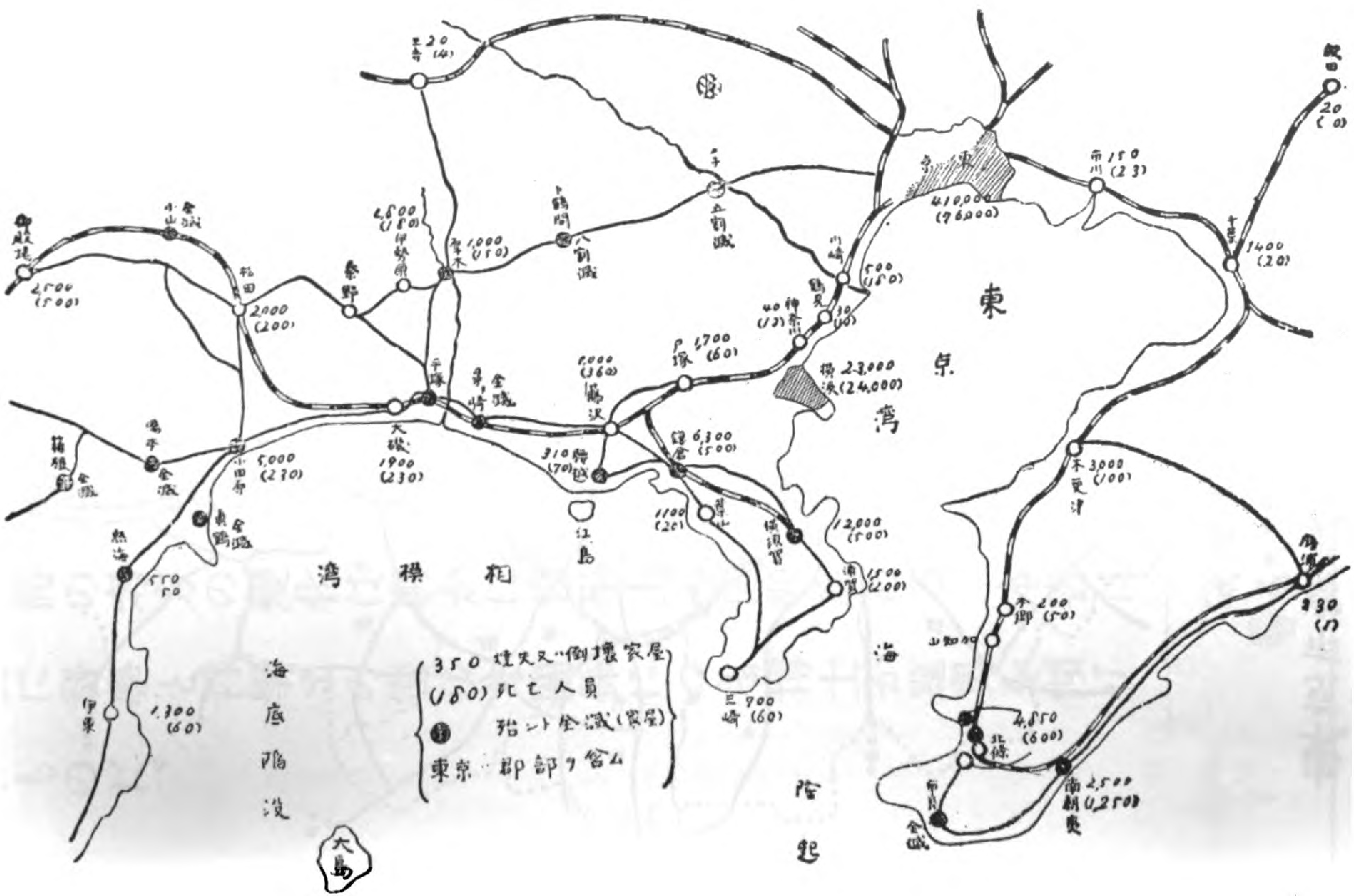
この際の希望……室伏高信…一〇一
震災雜記……武者小路實篤…一〇五
天災の價値……平塚明子…一一〇
博士のゆくへ……鷹野つぎ…一一四
火嵐に追はれて……深尾須磨子…一一八
災後……坂本眞琴…一二〇
震災雜感……與謝野晶子…一二三
……吉田絃二郎…一二四

東京市震災一覧圖



燒失家屋　三十三万四千六百戶
死亡者　七万二千六百人
芝
麻布
赤坂
四谷
牛込
小石川
本郷
麹町
宮城
神田
日本橋
京橋
下谷
淺草
本所
深川
東京灣

關東震災一般圖





日比谷活版所附近の火元



燃焼しつゝある丸の内の凄状



日比谷交叉點の光景



馬場先門附近の外濠より眺めた東京會館(向つて右)



數百の死傷者を出した内外ビルディング



破壊せる神田橋



二科會陳列品の破壞



京橋河岸附近の大龜裂



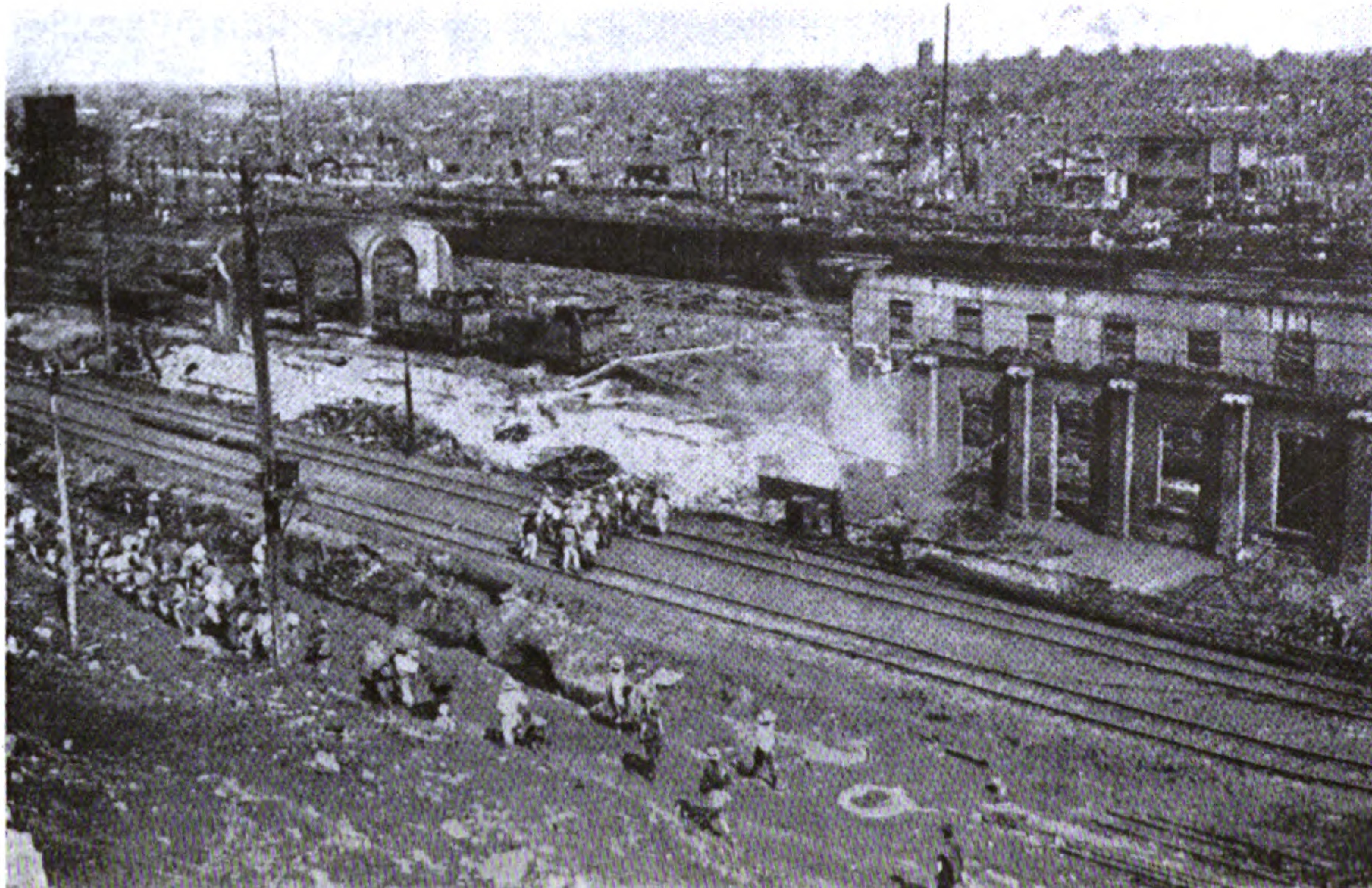
日本橋附近燒跡の慘狀



銀座通りの惨状（その一）



銀座通りの慘狀（その二）



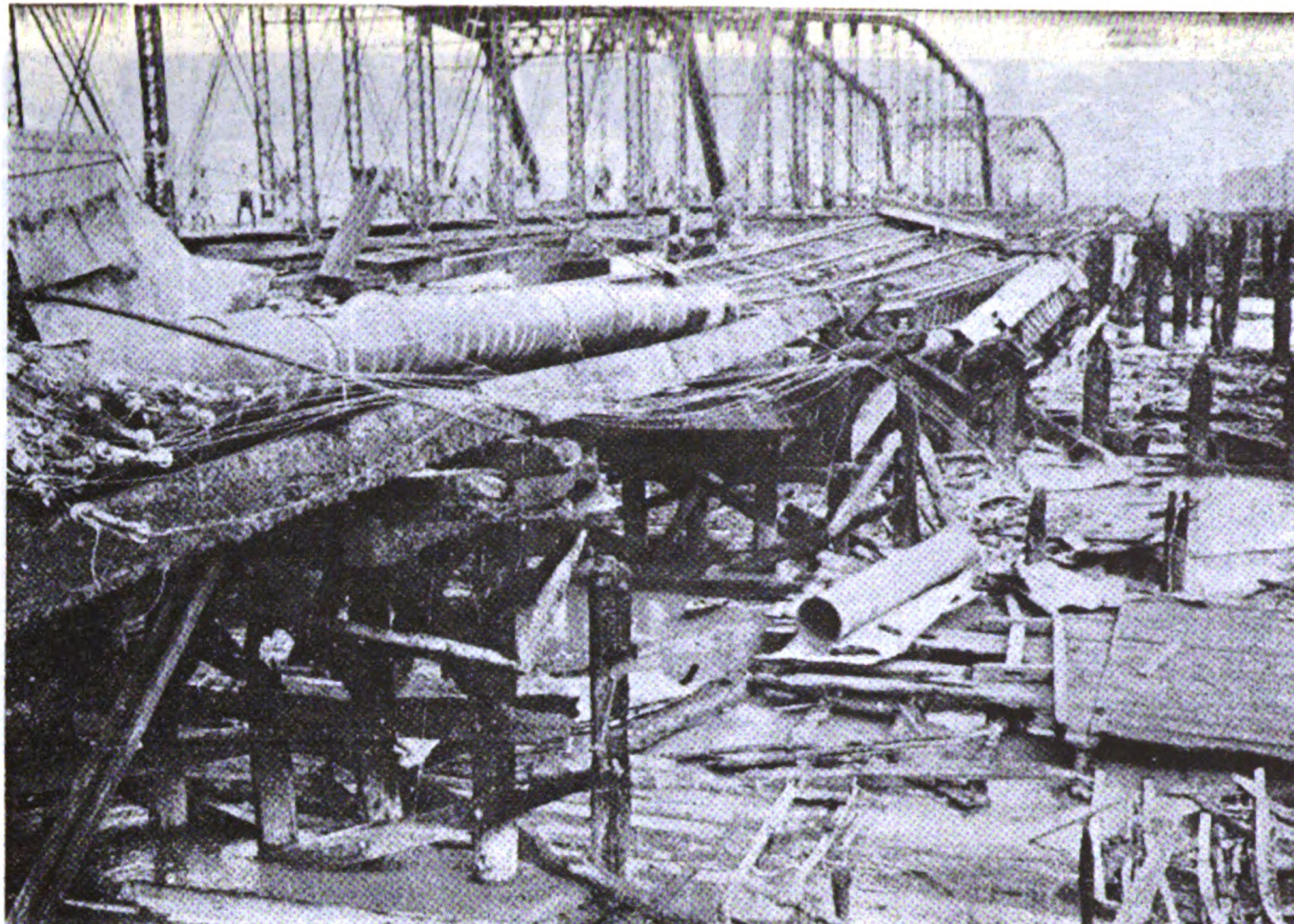
上野より見たる淺草下谷の慘狀



倒壊せる鎌倉八幡宮



横濱の市民を蒸燒にした正金銀行



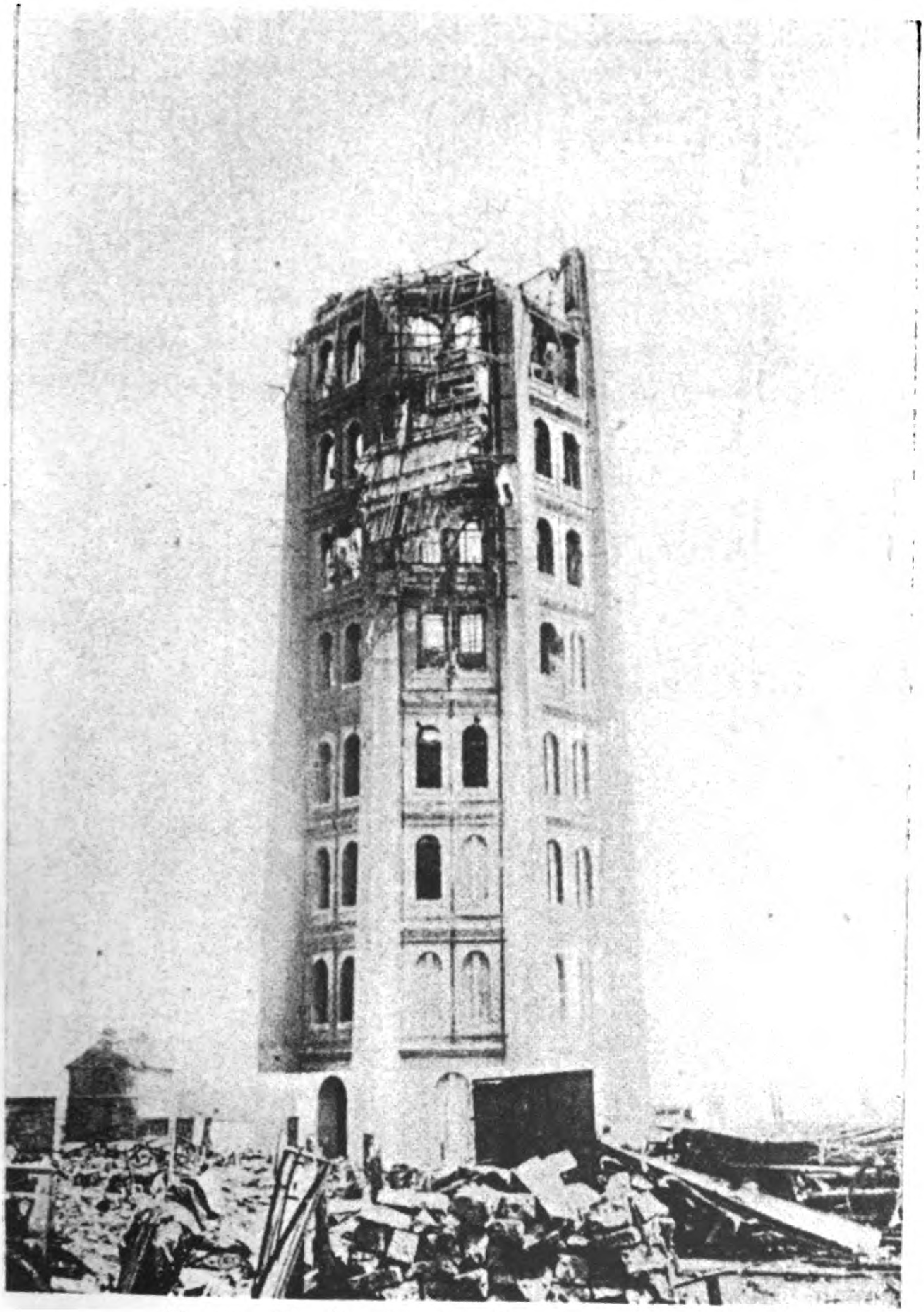
永 代 橋



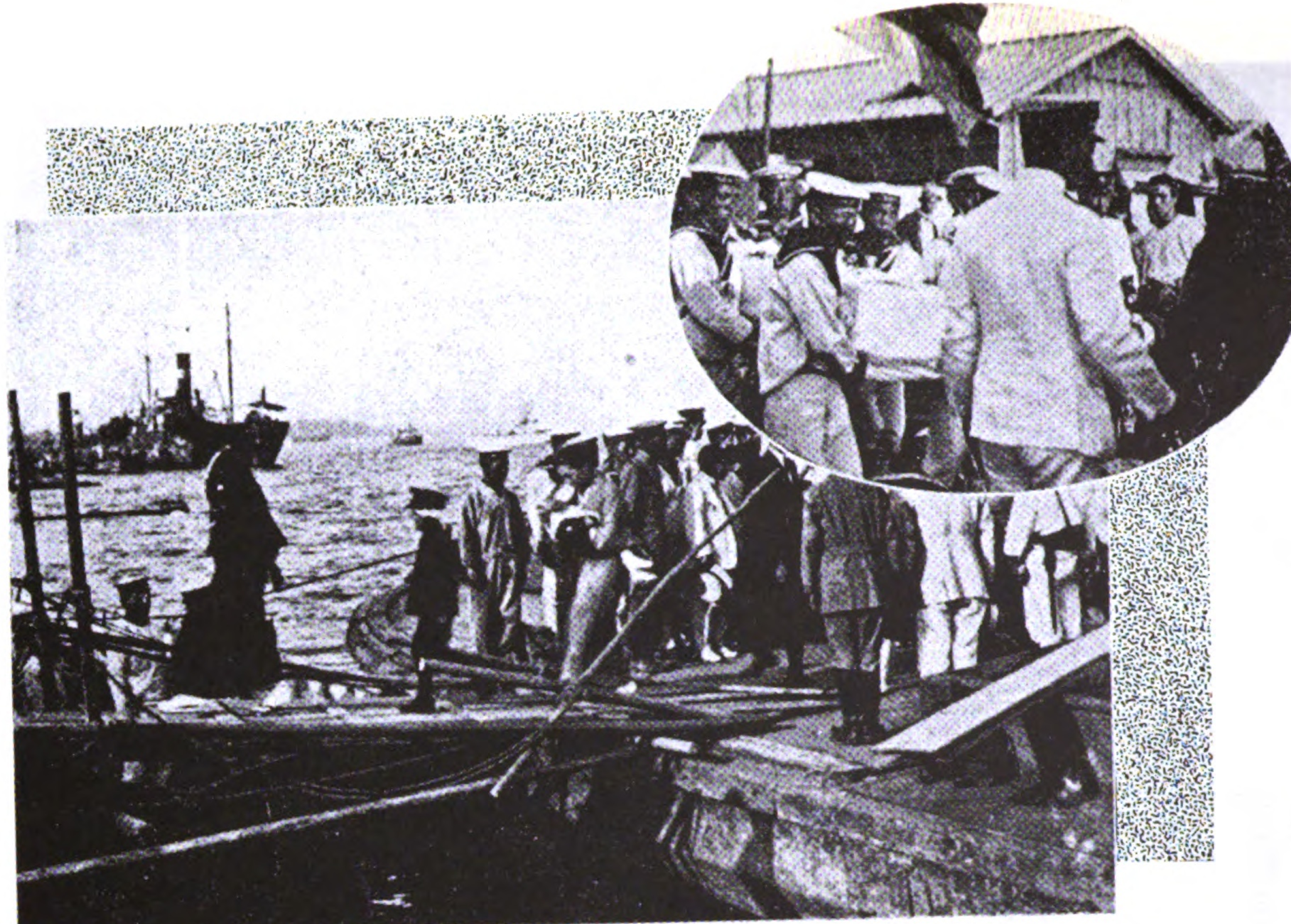
荒涼たる洲崎全景



避難民の雑閙する淺草仲店



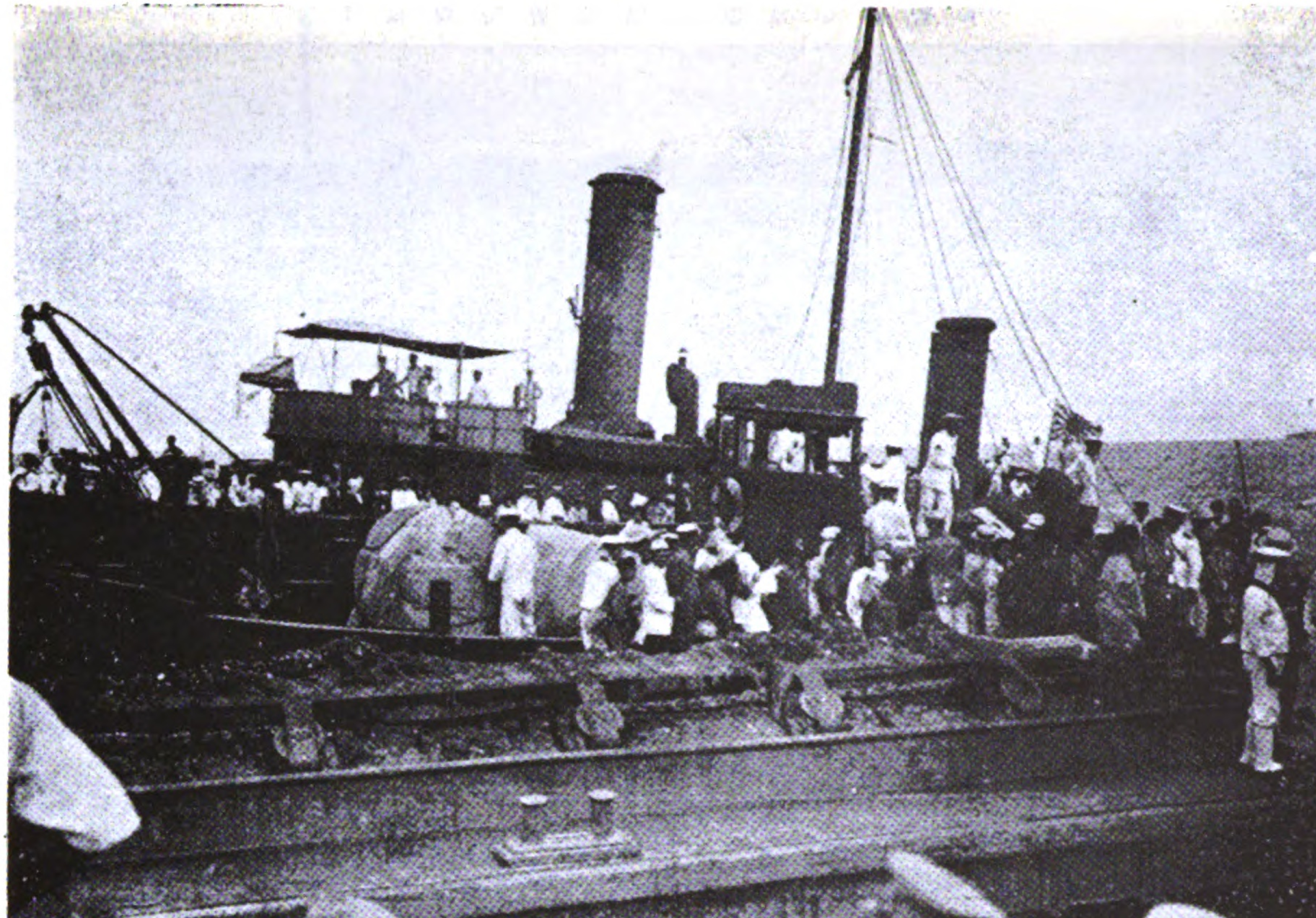
二つに折れた浅草十二階



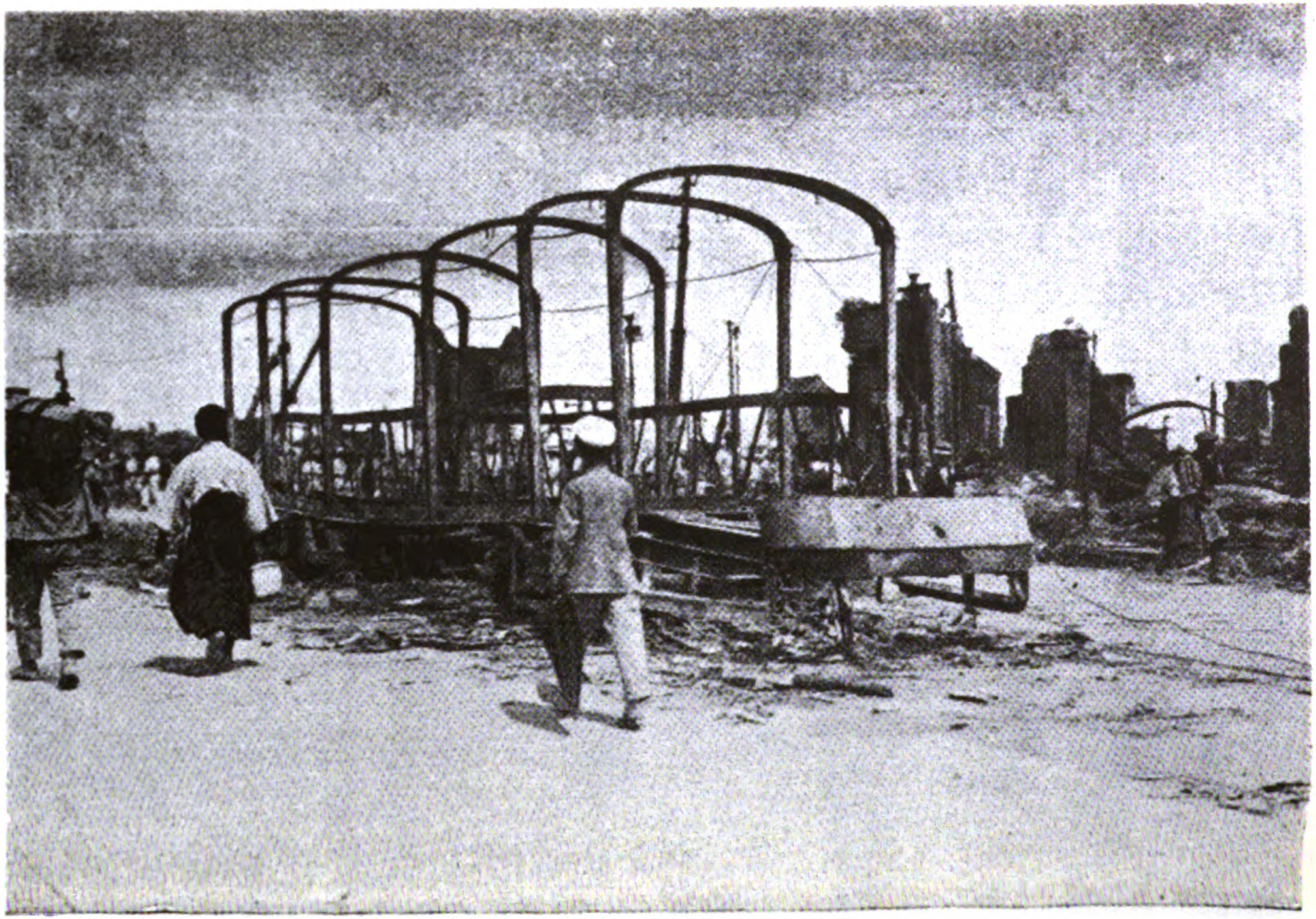
(上)東久邇宮第二王子師正王殿下御遺骸到着
(下)假橋を渡らせられるは東久邇宮妃聰子内親王殿下、その御後は第一王子殿下



芝浦に到着した救護米



芝浦から船で歸郷する罹災民



上野松坂屋附近の電車の焼残り



大震災後の神田方面バラック



テント生活をする宮城前廣場の罹災民



深川西平野署長より御說明を受けさせらるゝ攝政宮殿下



芝公園に避難した罹災者への給飯



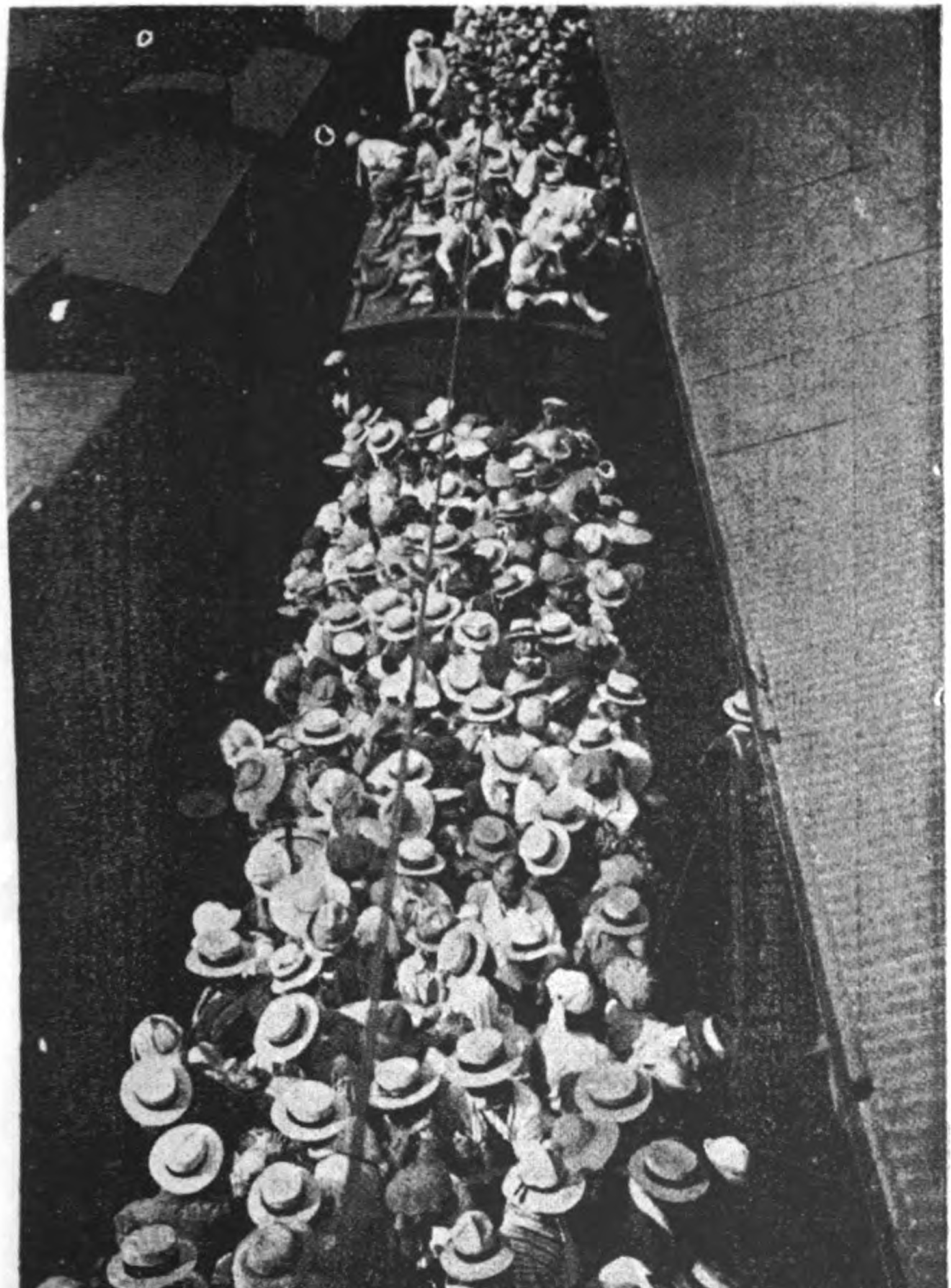
水をせがむ深川遭難者



中央郵便局に殺到する罹災民



阿鼻叫喚の品川驛避難者



罹災者を滿載の汽車品川を離れる



避難者の行方を貼付せる西郷銅像



吉原死池の納骨堂



再建に於ける女性の分け前

北昤吉

一

古人は萬物生育し、四時行はれるのを聖人の德に歸し、自然の作用に道德的意義を認めてゐたから、疾風迅雷の如き僅かばかりの天變地異にも、聖人といはるゝほどのものは肅然として自から警しめてゐた。自然の法則と人爲の法則、自然の作用と人間の運命とは不離の關係を以て結び附いてゐるとは、生氣説及び活物説の原始的世界觀の支配する時代に於ける凡ての人々の信仰であつた。近代人は人間をも自然化して、二つのものゝ距離を短縮することに努めるが、古人は反對に自然をそのまゝ超自然として擬人化し神化してゐた。この古代的世界觀は近代の文化人の心理にも植ゑ附けられ

て、機に臨んで力強く作用するものである。天祈に加護せられたといひ、天災に呪咀せられたといふ時、我々は知らず識らず原始的信仰を告白してゐるのである。我々の偽りなき心事からいへば、自然は人間以下に考へられると共に、人間と同等の資格あるものにも、更にまた人間以上の存在、超人間的靈性とさへも思惟される。科學者が自然の法則を認識し、之を生活の方便に利用する場合、自然は正しく人間以下のものに取り扱はれる。然るに我々が胡蝶といふ小さき舞踊家が舞ふ初夏の花園に立ち、鈴蟲松蟲の如き音樂家が哀調を奏づる秋の枯野に立つ時、我々は自然と融合して、此等の小さきものと共に謙遜なる存在を維持するが如く感ずる。若し夫れ今次の如き豫期せざる大災厄が襲ひ來つた時は人間と自然とはその威嚴を顚倒して、自然は超自然として我々を畏怖させ、我々をその前にひれ伏さしめる。分時の振動と四寸の振幅とが三百年來の文化を破壞し盡して、一度歩を廢墟に運べば、普土の下焦土に非ざるはなく、率土の濱窮民ならざるなき、悽慘の狀を見ては、我々は今更ながら自然の威力に慄然たるざるを得ない。

科學者にいはせれば、今度の大事變も花落ち水流るゝ如き無心なる一自然現象に外ならぬであらう。凡ては自然界の理法に依つて生起しまた消滅する丈けのものであらう。また科學者の如き冷靜を有しつゝ、而も自然の理法についての明瞭な認識を有たないものは、凡てを運命と諦め宿命と觀ずるでもあらう。更に虛無主義的傾向のものは、凡ての人間的のものを蔑すんで、かの冷酷無信のシンボルともいふべきメフイストフエレースと共に「自分は太陽だの世界だのに就いては何事もいふことは知らぬ、自分はたゞ人間が惱んでゐることを見るのみだ。人間といふこの世の小さい神はいつも同じ樣子をしてゐて、開闢の日の如く珍妙なものだ」と嘲けるかも知れぬ。三百年來の文化が一朝にして虛無に歸した目前の事實は我々をして一種虛無的な氣分にひたしめて、泣くにも泣かれぬ悲しさを、一種皮肉な嘲笑に依つて輕減することが、この場合唯一の通路らしくも見える。實際過去の全努力の結晶が倏忽にして虛無に歸した場合には我が身

の不幸をかこつだけではなく、進んで人間其物の運命までも疑ひ、希望といふ麗はしい幻像に導かれる人々位無自覺なものはないと觀ぜられるに相違ない。殊に多年の惡戰苦鬪の結果、吝嗇な自然が與へる僅か許りの殘生を苦勞なしに樂しみたいとの罪なき望が裏切られ、最愛の妻子と幽明處を異にしなければならぬやうな場合、聖賢の教も權威を有しない。この場合こそ本能的な生存慾のみが唯一の支へであり、唯一の導きであらう。若し夫れ一朝にして父兄を奪ひ去られた幼きものが覺束なき世間の同情にのみその運命を任せなければならぬ場合の如きは、地獄に於てのみ見らるべき悲慘な光景であつて、ヴオルテールの如き多感多情の人ならずとも天道是か否かと嘆ぜざるを得まい。

併し當面の災厄に對して、我々は之を單なる天災として、過去を回想して悲觀したり、現狀を凝視めて虛無的な諦めに落ち着くことのみが能事であらうか。勿論我々は悲むべきことは悲しみ、諦むべきことは諦めなければならぬ。唯我我は單に本能的な生存慾に驅られるだけではなく、進んで意識的に強く生き、無一物中より新たなる創造を試みようとするならば懷古的悲觀や虛無的諦めやに留まることは出來ぬ。破鏡重ねて照さず、落花枝に上り難しとは古人もいつてゐる。我々は凡てを失つて了つたが、而も我々は希望する特權丈けは永久に奪はぬ、過去の所產が夫れ自體如何に價値あるものでも、之のみに執着すれば我々は既に半ば死滅してゐるのである　唯希望し得るもののみが、眞に活きてゐ、眞に幸福なのである。我が子に先立たれた老親、保護者たる父兄を奪はれた幼兒の賴りなさみぢめさは、否定すべからざる現實である。併し社會がもう少し共存共榮の原理に立ち、もう少し相互扶助の主義に進んだならば、斯樣な賴りなさ、みぢめさは大に輕減せられるであらう。之に反して若し我々が此等の原理や主義の全然無視されてゐる社會に棲むとしたならば、ホッブスの想像した「一人が凡ての敵」とする不安な狀態が生じて、如何に力強きものも生存の威嚇を感ぜざるを得なくなる。世には實際健康であり富裕であつて、而も尙ほ孤立と煩悶とに惱まされる賴りなきみぢめな生存を續

けてゐるものがある。孤獨な老人や幼兒が、頼りなくみぢめであるといはるゝのは、此等を社會から切り放すからである。此等の人々に取つては、自分等の不幸を不幸と感ずる同胞を有することの意識丈けでも、頼りなさ、みぢめさを可なりに輕減するに足るのである。故に我々は懐古して悲觀し落膽することの代はりに、相互扶助の眞理の實現に努力しなければならぬ。若し悲觀を和げんが爲めに、瘡痍を癒さんが爲めに、メフイトテレース的に人間の運命に就いて皮肉な諦めを手段とするならば、その人は生の意義を否定するものであつて、彼は單に死に就いて語る以外の資格を有せざるものである。

我々に殘された唯一の途は、要するに、この災厄の機會を利用して、生の充實、生の創造を工夫することにある。之が爲めにはこの度の災厄をば、人間の行爲に沒交渉な外的な偶發な天災と見ず、寧ろ我々が責任を廻避することの出來ない人災だと見做すことが第一の必要事である。實に性格が運命である。古人が疾風迅雷豪雨にも肅然と自警することろがあつた如く、天災をば我々の道徳的社會的自覺の不十分から結果した人災と思惟し、進んでは我々の不仕鱈な廢頽な浮薄な生活態度に對する天譴であるとして深くい省し警戒し卓勵しなければならぬ。絶望的な疑心と懷疑的な無活動と懐古的な悲觀と虚無的な諦めとを當面の敵と心得、深刻な反省と勇健な策戯とに依つて復興と創造との難事業を我々は遂行しなければならぬ。

二

この要求せられた大事業の遂行には、女性もまた責任を分擔する覺悟がなくてはならぬ。過ぐる歐洲大戰に於て交戰諸國の婦人、殊に英國の婦人が如何に多くの役割を演じたかは餘りに著しい事例である。日露戰爭に數倍せる人命の喪

失と財貨の消滅とを結果した此の度の災厄の對策を成功に導くには、日本の女性もまた當然に、その分け前を有しなくてはならぬ。手を袖にしての傍觀は許されぬ。この場合男女の優劣は閑人の閑問題である。唯望ましきは相互の補足である。女性には女性に相應する事業と、女性に獨特な能力がある。男性はその爲すところに依つて、女性はその爲人其物に依つて、價値があることは否み難い眞理である。併し男性は將來財を希求してその實現に努力するに反して、女性はこの點に劣るところはあつても、取るに取らぬ僅か許りの現在財をも閑却せずにその價値を發揮しようとする忍耐を持つてゐることも事實である。斯くて價値の實現と價値の保存との分業が滑かに果されて行く。

我々は艱難な創造の必要の前に立つてゐる。さうして此の度の創造には、批評の深刻と着想の新味と遂行の熱意と、更に個人の努力を集成して一目的に導く統一とが要せられる。併し忌憚なくいへば從來の我が國民は創造に必要な諸德を持つてゐない。ヨーロッパ的の凡てのいゝものを取らない内に、日本的の凡てのいゝものを棄てゝゐた。否極端にいへば、日本的な凡ての惡いものを保存しつゝ、ヨーロッパ的な凡ての惡いものを蒐集しつゝあつた。價値の閑却と拋棄、反價値の尊重と獲得とが餘りに著しい現象であつた。更に具體的にいふと、徳川時代の凡ての頽廢的なものと近代文化の凡ての病的のものとの畸型的結合が日本の社會相であつた。さうしてこの社會相は社會を測るバロメーターたる日本の婦人に最も露骨に最も破廉恥的に具現され、また具現されんとしてゐた。我々はこゝに前進の爲めには後退が必要であるといふ平凡の眞理に忠實ならんが爲めにも、日本の社會の病弊について回想しよう。

日本のみならず、歐米をくるめこの近代の社會は頽廢的傾向を著しく露はしてゐた。所謂世紀末的傾向は新らしい世紀の始めの四分の一に於ても助長しはこそすれ、毫も減退し樣子が見えぬ。動もすれば惡化する力と見做されてゐた戰爭すらが、この傾向の促進に助勢した　短期の戰爭は國民的精神の緊張、諸階級の協調、統一的訓練、犧牲的精神を促

進する利益があるが、過ぐる大戰の如く四年餘にも亘る場合には精神の倦怠、道德的無關心、殘忍性の發揮、性慾の變態化、優良種の淘汰、疾病の流行等有ゆる弊害を誘致しなければ止まない。之れ今日に於て「西洋の沒落」が高調せられる所以である。敗殘の國獨逸、墺太利等を旅行したものには、直ちに蕭然たる頽廢の風が眼につく。而してこの戰爭の頽廢的影響は戰敗國のみにとゞまらずに、その他の諸國にまで及んだ。歐洲に於て戰時成金國の隨一と稱せらるゝ西班牙の頽廢はラテン文明の末路を更に早めなければ止まないほどである。米國や日本の如き交戰國中最も有利な地位にあつた國々でさへも、戰爭の頽廢的影響に立つことを餘儀なくされた。米國の一識者は現在の米國の文化をば古代羅馬の頽廢的文化と比較して國民に警告してゐる。家庭生活の頽廢、青年間の訓練の不足、宗教心の減退、優良種の衰退、貧富の懸隔の增大、階級的憎惡の昂進、人種的不寛容、法律無視の傾向、暴力使用の流行、租税額の膨脹、公共的精神の缺乏、奢侈の弊風、性慾に對する非常の興味、人口の都會集中、一として羅馬を聯想せしめざるものはない。領土が擴大し、莫大の租稅が各領土より流れ込み、奴隷が今日の器械力の如く羅馬市民の勞力に取り代り、傭兵が充實して羅馬市民が枕を高うし得たる時こそ、遊惰の風が盛となり、性的道德は全く崩解し、賄賂は公行し、識者は哲學的懷疑に陷り、羅馬は急速に滅亡の深淵に走りつゝあつたのである。果して左樣であるならば、今日の米國もまた同樣の危險に迫られてゐると、彼は警戒してゐる。この警戒は決して米國に對するだけではない。却つて日本こそ最も警戒さるべきものではないか。

三

我々はこの未曾有の大慘禍に際して我が女性の自覺を促がさんが爲めに、我が日本の社會が近來如何なる途を辿り來

つたかを回顧する必要がある。殊に我々は日本の社會をして今日に至らしめたことに就いて、日本の女性、殊に教養があり覺醒してゐる人も許し自からも許してゐる女性が如何なる役割を演じたかを簡單に指摘して見たい。我が國に於ても保守的傾向の人々は、日本の社會が益々輕佻となり虚僞となりつゝあることを嘆いてゐたが、この嘆聲は決して反動家の時代錯誤的杞憂であると嘲けらるべきものではなかつた。勿論權力者が口に忠君愛國を說き、我が國の精華を口にしつゝ不義不德を重ねてゐたことが暴露されて、之が爲めに彼等の代表する敎說其物が權威を失つたことは事實でもある。又何等權力の地位に在らず、切りつめた生活に甘んじつゝ誠心誠意日本主義を鼓吹し、東洋文化の復興を策してゐたものもあるが、此等の人々は歐米を崇とする新人連に比して幾分聰明に、寧ろ實際は器用さに缺けるところがあつた爲めに、言論に權威がなく、我が日本が滔々として歐米の皮肉のみを模倣する風潮を遏ぎることが出來なかつた。我々は權力者の失態、反動思想家の不聰明は之を認めるに吝かではないが、日本の現在の社會狀態には大なる不滿なきを得ない。

我が社會の缺陷は實に此の度の大禍災に依つて遺憾なく暴露せられた。僅か許りの天災が斯かる悲慘を醸らし來つたのは、日本人に創意と着想の足らぬ爲めであることは事實であるが、實に夫れよりも公共的精神の缺乏、責任感の稀薄が大に與つてゐる。若し日本人に公共的精神が旺盛であつたならば、帝都が下水工事もなく、道路らしき道路もなく、生活の便利と平安とに必要なる幾多の公共的設備なくして今日に及び得た筈はない。日本人は私邸の奧にあつて書畫骨董を愛玩し、床柱の木目に念を入れ、猫額大の庭園の盆栽や置燈籠等に浮身をやつし、商店の建築に於ても徒らに看板や化粧煉瓦の外觀の美等にのみ注目して、道路や街樹や公園や美術館や博物館の完備には殆んど無頓着である。盆栽いぢりに巧みな日本人が公園らしき公園を有せず、書畫骨董を愛玩する美術國の日本人が、この東京市に唯一個の美術館

を有しないとは、皮肉な矛盾ではないか。而も之れ一に公共心の缺乏の爲めである。我々の道德的缺陷は單に之に止まらない。責任感の稀薄、誠意の不足もまた甚だしい。こは從來の道德教育の方針の誤謬から來てゐる。日本の道德教育は例外なく日本人のセンチメンタリズムと結び附いてゐる。日本の子女は、非常時に於ける英雄的道德のみに就いて教へられ、日常生活に於ける平凡道德に就いては何事も傳へられなかつた。國亂れたる場合の忠臣の義烈なる行動、家貧しき場合の孝子の感動すべき心根等は終身書の題目であつて、斯かる浪漫的の事例とかけ離れた日常生活の道德はセンチメンタリズムに關係なき散文的のものとして閑却せられてゐた。梁上の君子が折角忍び入りたる家の神棚を禮拜したり、獄中に繋がれたる囚人等が戰勝の報を得て萬歲を三呼するが如きは珍らしき例ではない。所有權の無視は神棚に對する冒瀆に比し、國法の侵犯は萬歲三呼の義務の怠慢に比し、一層平凡であり散文的であり、センチメンタリズムに關係がないからである。獨逸のカイゼルリンク伯はその「哲學者の旅日記」中に日本の宗教、殊に日本の婦人の歸依する眞宗がセンチメンダリズムの所產だと評してゐるが、宗教のみならず、道德もまた、殊に女性に取つては涙と相離れることが出來ぬ。冷靜な考慮、嚴肅な熱意から發する義務的行動に就いては日本では十分に語られてゐない。日本の修身書の題目となる人物はセンチメンタリズムに彩られた英雄——忠臣、孝子、義人、烈婦等の殉教者でなくてはならぬ。釣合の取れた、日常の平凡な出來事を正直に公平に處置することは問題にされない。啻に道德のみではない。文藝もまた、殊に女性に好愛される文藝は、センチメンタリズムの色彩が強くなくてはならぬ。蘆花、倉田百三、賀川豐彦、有島武郎、吉田絃二郎諸氏の作物も日本の女性に愛讀せられるのは之が爲めである。判官贔負、親鸞流行、根柢はセンチメンタリズムである。併し泣くことは、感激することは非凡的であり英雄的であつて、決して日常茶飯事的ではない。我々は、殊に女性は、泣くことを學ぶよりも冷靜に質實に日常の義務を果すことを教へられねばならぬ。責任感の稀薄、義

務心の缺乏は請負人等の不正事業にも現はれ、此度の地震には殊に醜態を暴露した。さうして人をして大正時代の建築の價値を疑はしめた。責任感の稀薄、義務心の缺乏は、政黨員の墮落、官公吏の腐敗を結果した。日糖事件製鐵所事件、シーメンス事件、阿片事件等の醜事件は東京を襲ふ地震よりも遙かに短き週期を以て廻歸して來る。我々は亡國に際しての忠臣、不正義の社會に現はれる義人、破産せる家庭に出る孝子と同樣に、否夫れ以上に、國家を滅亡に導かず、社會を不正義ならしめず、家庭を破らざる方法に就いて攻究しなければならぬ。之はセンチメンタリズムに關係のなき極めて平凡なる責任感の充實である。我が社會には實にこの一事が缺けてゐる。其の他法律無視の思想、暴力の使用、人種的偏見、宗教心の消失、人口の都會集中、奢侈の流行、性的興味の病的昂進、家庭生活の破壞、浮華輕佻の風俗、一として日本社會の不健全を語らざるものはないが、我々はこの重大の時期に於て我が國の女性の自覺と奮起とを促さんが爲めに、女性が男性と共有するか、或は女性が之を有することに依つて男性の場合よりも一層社會を毒する弊風、及び女性が男性より多くを有する弊風に就いて語らなければならぬ。

四

日本の女性は確かに覺醒しつゝある。又一は自力に依り、一は他力に依つて解放されつゝある。女性は正に喪はれたる女性を恢復しつゝある。女性は、肉體に於て、より健かに、より美しくなりつゝある。若し顏貌が精神の地圖であるならば、女性の精神もまた向上しつゝあるであらう。併し自由解放をモットーとしつゝある女性が眞に自由の意義を領解するやは、我々の疑問とするところである。肉の解放、獲得を叫んで姿態を美にし、戀愛の自由を求めるのは、從來餘りに壓迫されてゐた女性としては蓋し當然の要求かも知れぬ、一口に之を攻擊するのは男性の功利主義に基づくこと

でもあらう。併し女性の大部分が熱烈に求めつゝある自由の本義は決して理解し易きものではない。或る無價値なる傳統よりの解放、離脱を意味し得るか、之は自由の消極的本義であつて、我々は眞の積極的の自由は目的の自覺に依つて價値を選擇し實現する聰明と能力との培養であることを忘れてはならぬ。所謂啓蒙期又は過渡期の運動は、常に或物よりの自由より求めて、或物への自由の一面を閑却してゐる。我が新しき女性の頻出する悲慘なる末路は常に之に依るのである。今日の都會の女性は必要以上に外觀を美ならしめようと力める。我々は女性より凡ての脂粉を奪へとの暴論は敢てしない。否、女性として多少の裝飾は止むを得ざることでもあり、また望ましきことでもあるが、女性の虛榮に基づく外觀の修飾は餘りに甚だしい。我が國の婦人の衣服の贅澤なることは紐育の婦人にのみ比すべきものであつて、英佛獨伊の大都の婦人の遠く及ばざるところである。外國の婦人は寶石等を以て外觀を飾るも、寶石は耐久力あり實際に於ては甚だしく贅澤ではない。これは一種の備品の如き性質を有し二代にも三代にも傳へ得るが、我が婦人の衣服は純然たる消耗品であつて、不經濟此の上ないものである。ミユンスターベルヒ教授は、米國の男子は婦人を坐食せしめんが爲めに終日立ち働らかなければならぬといつたが、日本婦人の贅澤さ加減は教授の評以上に出づるものがある。實際日本に於て婦人の虛榮の爲めに良人をして罪を犯さしめ、婦人も結局坐食することが出來ないで、破滅に陷るものがある。運命は品性の反響なりとは眞理である。

次に我が女性に於て最も忌むべき傾向は、性的生活に對する異常の興味を懷き、結婚も家庭生活も第二義的に考へんとすることである。滔々たる婦人雜誌は一にこの點を中心として編輯せられ、莫大な賣行を示してゐる。婦人を讀者とする多くの作家も好んで題材をこの方面に選んで婦人の不健全なる傾向を助長しつゝある。一文學者の顧みるに足らざる、一私事を都下の大新聞が内閣の交替以上の大事件の如く取り扱ひ現代人の興味の變態をして更に變態ならしめた。

勿論性的生活は人生の一大事である。之を描寫することは藝術家の任務であらねばならぬ。併しながら眞の健全なる性的生活は存在の神秘なる秘密であつて、之を赤裸々に暴露すべきものではない。殊に性的生活を以て全人生なるが如く取り扱ひ、甚しきは病的なる性的生活を以て全實在の秘密なるが如くに描き出し、若き女性の柔軟なる頭腦を惑亂するに至つては、我々は藝術の存在價値を疑はざるを得ない。勿論人性は決して等質的ではない。異質的なる各要素の組織體である。從つて人性を解剖すれば人間的な性質も獸的な要素を含むことが知れよう。併し之と共に人間性は人間性以上の要素をも示す。ジンメルは生活は生活以上のものを指示すといつた。實際、自然が、如實の自然が、自然科學者の自然ではなく、或る意味で超自然的なる如く、人間もまた或る意味では超人間的である。人間味とは嚴密な意味での人間性と獸性と神性との混淆であらう。現實暴露に特種の興味を有する作者は多く、人性の或る一面を誇張することに依つて人性の現實を隱蔽してゐる。全面的に統一的に人性を觀察せざる所に、斯かる作者の人間知らずが現れてゐる。部分を全體と錯覺する所に、彼等の人性盲が實證されてゐる。

日本の女性は性に對するが常　興味に誤られるのみならず、結婚又は家庭に關しても誤れる考へを有つてゐる。戀愛はロマンスの世界であるが、結婚は現實の世界である。古きロマンスの想出は繼續しても、結婚と共に我々は新しき別個の世界を作る。殊に子女を有する家庭に於ては異性間の性的生活を中心として容易に家庭を破壞することは許されない。家庭に於ては我々は社會人であつて、孤立した一個人ではない。離別に依つて被る子女の運命に對しては、之を產める兩親は無關心なることは許されぬ。米國の或る州に於ける少年犯罪者の八割が、兩親の離婚せる家庭から出てゐるといふではないか。有島氏の如き事例は我々に戒心の機會を與ふべきものであつて、讚美や憧憬の對象とすべきものではない。殊に之に依つて戀愛至上主義を主張する如きは誤れるの甚だしいものである。戀愛の價値が至上なりとは何

學的根據なきことであり、又之を主張する人々も、戀愛の價値の爲めには心身を犧牲にするを要すこ自分の弟妹に向つて鼓吹する勇氣を有しないであらう。有島氏の如きは戀愛こ世間的道德この衝突の犧牲こなつたもので、猶一度見度しこ慕つた秋がこの災害を齎し來つたのを知らず逝きしここゝ、同じ戀愛至上論者にして戀愛論の作者たる某博士が變死して折も折こて全然看過されたのに對比して、兎も角世間に大きな波紋を畫いたことが氏に取つて此の上なき幸福こいふべきであらう。

要するに此の度の災害は尋常一樣の覺悟を以ては對策を講じ得らるゝものではない。我々は天災を天譴こ心得、質實なる氣風を恢復して嚴肅なる努力を盡さなくてはならぬ。罹災地一圓に禁酒令を布くが如きも精神の緊張に一助こなるであらう。我が國の女性も從來の浮華こ輕佻こ虛榮こ嬌飾こ病的なる性的興味こ隱れる戀愛觀の如きを棄て、數年間親の喪に服するが如き脈肅な氣分で新帝都、新日本の建設に努力しなければならぬ。打破すべき現狀は凡て打破された。將來創造さるべきものは本質的に價値あるもののみでなくてはならぬ。重ねていふ、運命は性格である、日本の將來は我我の性格に所依するこ。

經濟社會はどうなるか

堀江歸一

一

此問題は私共に取つて、最も興味あるものであるが、今日の處では、何としても正確なる斷定を下すことを難しとする幾多の事情がある。彼の如き大なる震災火難に依つて、都會の生活が根柢から破壊され、經濟上の組織の全然斷絶するに至つたのは勿論、市民の財產なり、生命なりの上に及ぼした危害損失も亦少なからざるものであつて、徹頭徹尾東京市に向つて、破壞のあらん限りを傾け盡した以上は、經濟社會の沈衰し、萎微することゝ爲るのは、當然の勢であつて、震災前まで不景氣に苦しめられて居つた經濟社會は以前に倍する不景氣に襲はれるものと見なければならない。

然し以前に倍する不景氣に襲はれると云つた所で、一方に彼の如き大變災に伴ふ動搖が經濟社會に起つて居る以上は、同じ不景氣にしても、經濟社會の局面に幾多の波瀾のあることは、之を免かれるを得ないであらう。先づ第一に考ふ可き事は政府が東京市復興に對して、如何なる態度に出るかと云ふ一點であつて、始めは色々の風聞も傳はり、疑惑も起り、遷都論すら云云されたやうであつたが、今日に於ては兎に角政府は此事業に全力を傾倒し、急速に目的を達成する意嚮であることは、疑を容れない。復興事業を急施するに要する財源は如何にして調達す可きものであるかと云ふ問題は後段に讓り、假に政府が右に要する財源を調達し得たとすると、政府は復興事業を達成する爲めに物資と勤勞とを需要し、物資に對する代金として、勤勞に對する報酬として、國庫の收入を民間に撒布する譯であるから、其撒布する所の大なるに隨つて、民間の經濟社會には好景氣と云ふ現象を生ずるであらう。

二

然し右の好景氣は要するに社會の一局部に起るに過ぎない。

即ち復興事業に必要なる物資の生產者、其物資の仲買人、其物資を政府に納入する御用商人、復興事業に必要なる勤務を爲す人殊に勞働者等は代價なり、賃銀なりの騰貴に依つて、利益を受ける階級であり、是等階級に屬する人々が意外の收入を獲得した所から、之を濫費したならば、彼等の消費の對象と爲るもの、例へば料理店、劇場其他の娛樂場の如きは、必ず繁昌するに至るであらう。

然しながら右の如き繁昌は社會の一部に起る事相に過ぎない。復興事業に關係ある故を以つて、其利益なり、所得なりに增加を告げた人々は東京の全體から之を見れば固より少數者であるに止まる。一方に多數の市民は復興事業に關係せず、彼等の從事して居つた仕事にして震災火難の爲めに受けた打擊から、充分に恢復するに至らない間は、彼等の所得なり、利益なりが以前に比較して、減少することは已むを得ない所であつて、斯る所得や、利益の減少は社會に及ぼす不景氣の影響を深刻のものたらしめるであらう。震災以來市民の一部分は續々地方に脫出して、安住の地を求めようとした。固より當時の脫出者中には一時の恐怖心から、望鄕の念を起した者もあり、必ずしも地方に歸還した後に、一定の生業として、賴る可きものを持つて居る譯でもないのであるから、或は今後一部の歸京者はあるかも知れず、一時激減した東京市の人口も軈て或る程度まで恢復することゝ思はれるが、斯る市民に對して震災前に於けると同樣相當の職業を授け、彼等をして各自の能率を發揮せしめると共に、生活上に安んぜしめることは、震災後の東京市に取つては甚だ困難なる問題であると考へられる。唯復興事業の進行と共に、勤勞に對する需要が增進したならば、自ら都市に集合する失業者に職業を與へ、彼等の生活を安定するに資するものあるであらう。

三

然しながら復興事業に於て需要する勤勞は槪して云へば、筋肉勞働に多くして、精神勞働に少ない。一方に今日震災火難に依る商工業の衰微は精神勞働者をして失業の苦痛を嘗らしめつゝある。市中諸銀行の如きは、比較的早く營業を開始したやうであるが、彼等は其營業の性質として、物資其ものを商品とせない、彼等の取扱ふ取引の目的物は金錢であり、更に適切に云へば、債權債務であつて、地震で潰れず火事で燒けないものであればこそ、斯く早く營業開始の運びに爲つた次第であるが、店舖商品倉庫の總てを燒盡した普通の商人に至つては、到底斯る短日月の間に、營業の復興を期するを得ない。三越吳服店の

如き大商店であつて、尙ほ店員に向つて、解散式を行ひ、彼等をして路頭に迷はしめると云ふやうな事に出でたのも、一面から見れば、資本主義的精神の發露であると云へるが、他の一面から考へれば、到底急速の間に以前と同樣の程度に於て、營業を復興する見込みを付け得ない結果である。卽ち斯る事實は今日並に今後の東京に於て、商工業從業者の如き、所謂精神勞働者の內に、失業者の續出することを語るものであつて、此點に於て、計畫し、工風する所を缺いたならば、假令ひ東京市の復興事業は多少緒に就くを得た曉に於ても、精神勞働者に多數の失業者を見ること、依然として今日の如くであり、或は彼等の一部をして心ならずも筋肉勞働に從はしめることゝ爲るかも知れない。都市復興事業は何處までも之を廣義に解釋して、東京市の經濟社會をして一日も早く常態に復せしめる、其商工業取引をして平生の軌道を步ましめることを眼目とす可きである。此點から觀察して、震災以來政府に依つて行はれた經濟政策が當を得たものであるかどうかと云ふことに就て、自 問題に接するが、此事は別に論ずることゝしよう。

四

政府が東京市復興に要する資金を調達するに如何なる方法を以つてするかと云ふことも、今後の經濟的趨勢に重大なる關係を及ぼすであらう。復興に要する資金の幾何に上るかは之を推測するを得ないが、何れ理想的大都市を作り上げると云ふ點から考へれば、十億とか、十數億とか、莫大の金額を數へることであらう。果して是れだけの金額が外債で募集し得られるものかどうか。一方に民間の事業家も如何に震災火難の後であるからと云つて事業其ものを棄ることは出來ない、或る程度の復興なり、擴張なりに要する資金は事業其ものを保全する上から云つて必ず調達しなければならず、一方に內國の金融が今日の如く切迫し、何時に爲つて緩和するか、殆ど見込みを付けることの不可能である場合には、彼等も亦資金を外國市場に求めることゝ爲るであらう。斯くて倫敦なり、紐育なりに於ては、我國官民双方の側から、募債の計畫が落合ひ、彼等の間に於て互に競爭して、募債の條件を我國に不利ならしめるやうな奇觀を生ずるかも知れず、左ればと云つて、從來我國政府が屢々爲した如く、政府の外債計畫を有利ならしめる爲めに、民間事業家の外國市場に於ける募債を制限する方針も民間事業の復興を急とする今日に於ては、行ふ可き所でなからう。詰り我國に於て東京市復興の爲めに、必要とする物資は少なからざるものであつて其內には外國產の物資を購入しなければならず、如何に國產獎

動を必要とすと議論があつても、外國に就て購入する物資の分量は餘程の數量に上るであらうから、其代金決濟に必要なる金額位までは外國債の發行を見ることゝ爲るのではなからうか。隨つて外國債と相並んで內國債發行の必要を生ずるは勿論である。或は東京市の重なる部分が廢墟と爲つた今日の狀況から考へて、內國債の發行に絕望して居る向きもあるやうであるが、私は必ずしもさうは思はない。前記の如く復興事業に關聯して、勞働者階級に多額の資金の撒布される以上は、(一)公債の額面を小にし、(二)公債に對する拂込の回數を多くし、(三)相當の利子を付したならば、斯る資金を吸收し、一方に國家財政の急を充すと共に、勞働者階級の濫費を制するに至り、此點に於て、國債應募の新原動力が見出されるのみならず、東京市に於て全然震災火災の直接損害を免かれた市民や、大阪名古屋其他大小都會の應募力を考へたならば、內國債の發行必ずしも絕望す可きものではなからうと思はれる。

五

然しながら國家が多額の國債を限られた期間に發行するに當つて、當時の國民の貯蓄金のみに依つて、之に應募せしめることは、假令ひ一方に高率の利子を付けて、國民の貯蓄を獎勵することした所で、甚だ困難である。隨つて國債の發行は一方に必ず通貨の膨脹を促さゞるを得ない。卽ち國債應募者は國債を擔保として、銀行に就て資金を借入れ、斯くて國債の拂込に充てる、一方に銀行は國債を擔保とする貸出を行ふに隨つて、日本銀行に就て、資金を借入れるし、日本銀行は銀行券を發行して此融通を行ふ爲め、國債の發行されることの多きと共に、通貨の膨脹を甚だしくする。斯くて物價の騰貴することは必然の勢であつて、殊に東京市並に附近諸縣の生産力の衰へた爲めに、物資供給高の寡小なる場合に於ては、此影響の大なる可きことが想像される。

右に述べる如く、十億又は十數億の國債の發行された曉には之に對する利拂の金額も容易ならざる高に上る譯であつて、之に對する財源は從來の經費を節約するなり、又は增稅に依るなり、確乎たる收入を以つて、之に充てなければならない。斯くて國債を財源に充てゝ復興事業の行はれる場合には、國民は第一に物價の騰貴に依り、第二に國債利拂の負擔に當ることに依り、相當の苦痛を忍ばなければならない。玆に於てか必ず一の問題が起る。東京市は之を日本帝國の廣きから云へば、國內の一部に過ぎない。如何にも帝國の首府として、他の諸都市と或る所まで違つた地位を占めて居ることに就ては、何人も異論を

挾まないであらうが、其れも一個の程度問題に止まる。其東京市が復興するに就て、全國の國民が同等に負擔を荷ふと云ふことは、負擔を分配する上に於て、公正を保つものとするを得ない、其公正を保たしめるには、東京市復興に必要とする經費の多くの部分は之を東京市民に負擔せしめなければならない。即ち國債を財源とする場合に、市債を以つてし、國税を財源とする場合に、市税を以つてするの必要は此點から生ずるのであつて、復興事業の一部分は震災火難に依つて、敗殘の狀態に居る東京市の市民自ら之を負擔せざる可からざることゝ爲り、東京市民としては、一方には活動して、日常の生活を營まなければならない其上に、復興事業に伴ふ負擔に當る次第であつて、生活上の苦痛の大なる可きことは、之を免かれない。斯くて東京に居住した市民の内でも、東京に見限りを付けて、他の大都會に於て生活の道を開かうとする者もあらうし、又は故郷に隱退する者もあらう。復興事業の進行しつゝある間は、一時東京に定住する者の減少を見るであらう。現に事業家が其本據を大阪に移さうと計畫しつゝある一事に徴しても、富源の乏しい所に事業が起らず、随つて人を給養するを得ない事情の生ずるのは當然であつて、今後幾年間に亘つて、東京市は復興事業の進行に伴ひ、政府が經費を支辨する爲めに、人々に職業を與へ、商業取引を營ませ得るだけの話であつて、之に相對して行はれる民間の經濟は餘程窮迫した狀態に居らざるを得ないであらう。

六

兎に角東京市復興の爲に莫大なる經費が支辨される以上は、政府が歳計を處理するに當つて、經費全般に亘つて、大節約を行ひ、大緊縮を施す必要のあるは勿論であつて、從來積極政策の下に行はれた鐵道電信電話の擴張、改良の計畫とか、治水港灣の改良とか云ふやうなものは總て一時之を打切り、其れ等の爲めに募集する必要のあつた公債の如きは、他日に延期し、以つて復興事業に要する公債の爲めに、募集の便を開かなければならない、此點に於ても或は東京の利益の爲めに、地方の利益を擧げて、犧牲に供すると云ふ非難はあらう、又東京市だけに變災の起つた爲めに、其影響を全國に擴充すると云ふ攻撃もあらうが積極政策や、公債政策の如きは、今回の變災如何に拘はらず、夙に廢棄せらる可きものであつたのであるから、今日之を廢棄して、復興計畫の進行を助成することは、當然であり、其他國費全般に亘つて、節約緊縮の行はれたる必要のあるのは論を俟たないのである。

國家が斯の如き節約を行ふ一面に於て、私人經濟に於て、節

約の行はれなければならないのは、是れ亦當然の事である。今囘の震災に依つて、東京市中の目星しい建物は何れも損傷した其內に於て、實質の堅牢を謀らず、單に外形の美麗のみを競つた建物が、揃ひも揃つて倒壞して居るが、一面から見れば、此事は東京市民全體の生活狀態を語つて居るものではあるまいか實力不相當に生活を華美にしようと云ふことが近年東京市民全體の陷つた傾向であつた、斯くて東京市の如き外形の美は求め得られたやうであつたが、實質の堅は遂に之を收め得られなかつた。斯くて不燃質であり、耐火質であると信じられた建物が續々燒拂はれて、一塊の焦土と化したことの如き、如何に市民の生活が奈盛のものであつたかを語る資料とするに足る。市民全體に浮華輕佻の念を去り、堅實に生活の基礎を築くには、即ち今日を以つて、好機とす可きである。震災火難の起つてから數日間、市民の襲はれた衣食住に關する恐怖、此恐怖に伴つた生活上の變革は文明國民として、再びすることを好まない所であるが、同時に變災前まで行はれて居つた生活に幾多厭ふ可き缺點のあつたことは、私共の指摘するに苦しまざる所であつて國民の反省を値するもの多々ありとされる。

東京市復興に要する諸材料は多く外國の供給に俟たなければならず、一方に外國債の成立は斯る物資の輸入される勢を助長する。而して內國產業の秩序の恢復しない間は、重要物產の輸出の如きも、自ら停滯する次第であるから、貿易は常に輸入超過に傾き易く、外債の收入に依つて、其決濟の付　間は兎に角一方に輸入超過が的確に現はれて、他の一方に外債の成否の判然としないやうな場合には、國內經濟に取つて、大なる脅威を感ずる所以と爲るであらう。殊に官民兩者を通じて、節約勤儉の行はれることは、不景氣の勢を助長し、復興事業に關係ある物資や、勤務を除いて、社會を擧げて、不景氣風の襲ふ所たらしめざるを得ない。或は此邊の關係から、人心の安定を缺き、如何なる所に如何なる變を見るやうなことはないであらうか、將來の爲めに懸念に堪へざる次第である。今日の政治家たるもの果して思を此所に運らして、復興事業の根本方針を樹立するに勉めて居るであらうかどうか、私の敢て問はんとする所である。

震災と諸家の印象

1 最初の地震の時どこにゐて如何なさいましたか。
2 今度の震災で最も深い印象をお受けになつたこと。

○　島崎藤村

一、私共の住居は狭く窪い坂の下の位置にあつて、激震と同時に崩れ落ちた土は坂へ出口の石段を埋め全く通路を絶たれました。餘儀なく私共は隣家の裏口にある桐の下に集まり、それから屋外へ遁れ出ました。

二、今度の震災と火災とでは見るもの聞くもの胸のつぶれるやうなことばかりで何が最も深い印象かといふことを私には考へられません。

○　上司小劍

一、日光にゐて、長編小説「東京」の第三部を書いてゐました。丁度、空想で東京の大破壞に筆を進めてゐるところでした。新東京の建設に移らうとして。

二、まだ上野の松坂屋が燒けてゐる時、東京へ歸つて、縱横に燒跡を視察して歩きながら、煙の中にもう復興の氣が溢れてゐるのを感じました。「立派な東京が生れるぞ。」それが第一感想でした。

○　水守龜之助

一、その日、僕は二階の書齋にゐて、寢ころんでうたゝねをしてゐた。地震と知つて立つたが、動くことが出來なかつた。鴨居につかまつて、隣家の屋根が波のやうにゆれるのを見てゐた。第二震が來た時、もう駄目だと思つたが、大丈夫家は倒れなかつた。かくて、すつかりすんでから外へ出た。

二、今回の如き異常の事變に際して人間性が善惡共遺憾なく暴露されるのを見て、大なる教訓を得た。そして、一時、すべてが本質に返つたやうな印銘をうけた。ふだんの机上の空論の如何に權威なき事よ！　と云ひたい。

○　桑木嚴翼

一、丁度宅で食事を終つた時でした。二回の强震のやむまでは

家に居ましたが幸ひ倒壊しなかつたので助かりました。

二、震災後の流言蜚語、其の傳播の速さ、諸人の之に迷はされたことによつて從來の社會教育の不十分なることを痛切に感じました。

○　近松秋江

一、最初の大地震の時（九月一日正午二分前）は自宅附近の道路を歩行してゐましたが、大地が揺れるので地震と氣付いた刹那に一層大きな揺れが來て、まるで地上が波打つ如く高低したのが今だに印象に殘つてゐます。私は丁度荒波に舟の漂蕩する時の如き船暈を感じました。そして暫時地上に蹲踞してゐました。やがて最初の大地震が靜まると同時に、下町の方は、さぞ大騒ぎだらうと想像してゐましたが今日明白に知られた如き大慘事にならうとは空想だも致しませんでした。

二、近來大分浮れ氣分になつてゐた日本人に天が大きな拳固を喰はして性根を入れたこと。

○　吉江喬松

一、家にゐました。家の者と一緒に戸外へ逃げ出したのです。

二、一日、二日、三日、ことに二日の夜は上野が危く下谷、淺草、神田邊の罹災者がぞく／＼逃げ込んで來る中に、常時は見られない相互扶助、涙ぐましいまでの純良さが何人の間にも見られました。所有の復活と共に直ぐこれは消えてしまひまた他の方面には恐ろしい惡い事がこの場合に行はれたといふ事も事實でしよう。併し私には身一つになつた人々が示した人間本質の純良さは決して忘れることが出來ません。

○　久保田萬太郎

一、二科會をみに行く途中で上野の山にゐました。

二、女房もなく子供もない人の仕合せをかぎりなくうらやましいと思ひました。

○　平塚らいてふ

一、自宅で炊事をしてゐました。

二、人と人との間の障壁がとり去られて人間がより人間的になつたことを到る處で見たことです。

○　與謝野晶子

一、自宅にゐましたが、子供と共に牛込見附内の土手へ避難し二晩だけ露宿を致しました。

二、大火が半町の近くまで迫つてきた時の怖ろしさです。

○　南部修太郎

一、茶の間で四角な食卓に向ひながら、母と妻と十二になる妹と四つになる甥と五人で食事中でした。二杯目の御飯をお茶づけにしてかきこまうと箸を取つた途端揺れ出しました。忽ち

一杯はつてあつた庭の池の水が半分以上こぼれ出し、襖障子がはづれ、茶棚の茶碗が落ちこはれ、少し離れた妹の部屋の柱がぐら〱揺れ始めました。母は甥を背負ひ、妻は恐怖の聲を上げる妹をかばひ、それに茶の間へ駈け込んで來てうろうろして居る女中、私は家は潰れないと云ふ自信が持てたので、戸外に駈け出ようとするその五人を聲と手で抑へてゐました。

二、自然の力の偉大さと慘酷さと。

○　室伏高信

一、大森の自宅でたつた一人きりで讀書してゐました。

二、私自身は別に感じたことはありません。たゞ他の人たちがいくらか何ごとかを感じたのかと思つてゐます。しかしそれも一時のことかと思ひ折角の地震も無駄になりはせんかと心配してゐます。

○　鷹野つぎ

一、私は丁度末の兒を晝寢させやうとして、書齋にうと〱として居た。初めひと揺れ來た時、私はそれが地震だとは思はなかつた。たしか次ぎの大揺れがあつた時、私は初めてそれと知つて子供を抱へて庭先へ飛び出した。瞬間書齋の東側に立てゝあつた、重たい書架の、バタリと倒れる音がした。一方逃れた方の地面も盛んに揺れるし、私はもうどこに居ても危ないといふ氣はしなかつた。長い間、私は子供を抱へたまま、ぼんやりと立つて居た。

二、私はあの激震の襲來してきた當初の、世間に人聲一つきこえなかつた靜謐な一瞬間が心に殘つて居る。私の子供はぴたりとして石のやうに靜かだつた。今何よりもそのひと時が私の心に殘つてゐる。

○　千葉龜雄

一、九月一日は新潟縣の瀬波温泉にをりました、瀬波は鼓のやうな佐渡の島影を四十五里の荒海のあなたに望み、翠綠の色、類のない古松林をもつて圍まれた二十四五戸ばかりの靜かな温泉巷です。私は三十日に東京を出て新發田や水原で講演をし、歸りにこゝで遊んでました。九月一日は朝から驟雨で、夕方ちかく晴れました、正午に旅館の三島館で晝飯をたべてゐる頃に微震があつたのだと翌日女中に聞きましたが、私には少しも氣がつきませんでした。夕方に時間をまつて海に出で日本海のとうだうたる波濤の聲に耳をすまして居た時は、東京では阿鼻叫喚の聲が巷をうづめて居た刹那であつた事が今想ひ出されます。

二、いかに大災害で民衆の心がてんだうして居るとはいへ、×

×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××に對する理解がこれほど皆無であるかといふ事が第一。第二は地方人が東京といふ首府に對する愛情と熱意がこんなに深いものであるかといふ事。これは新東京が、多く地方人であることを除外したにしても。

○　岡本綺堂

一、第一回の大震當時は麹町元園町の自宅に居りました。午飯をくつてしまつて、二階の書齋へ行かうとして、階子を半分以上もあがりかけた時——

二、甚だ月並のやうですが、私の所感は慘絶の二字に盡きてゐます。眼にみゆるほどのもの、すべてが強い印象を刻み込んでゐるので、どれが最も深いか鳥渡わかりません。

○　吉屋信子

一、二階の書齋にて書見中ゆらりとゆれ出すとすぐに階下に降りてはだしにて廊下から家族と共に庭に出で大きな樫の古木の陰に据りました。日頃の臆病者は機敏でした。

二、地は震え都市は灰と化するも、汝永劫に滅びざる者よ。それは人間の意志の中なる「愛」の力のみと！

○　山田邦子

一、拜復、彼の日は丁度新宿の多納病院に居りました〃長女が病氣で入院中でしたから〃第一回の大震が來るとすぐ私は千駄ヶ谷の家に留守の人にあづけて來た六つになる男の子の事を思ひました、そして長女と二人手をとり合つて殘して來た子の無事ならん事を神に祈りました、それからすぐ俥をよんでもらつてゆれる道を家にとび歸りました。

二、此度の大震から起るさま〴〵の事件に遇つて、先般歐洲大戰當時のそれらの國々の人の心がはじめてはつきりと、思ひやられました、私たちはこんな目に逢つてもまだ國内の一部の事だ、食量の不足も不自由もわづかの時耐えればどうにか道はつく、……戰國ではさうはゆかない、國をあげ國民をあげて不安の狀態に、いつ限りなく居つたのである！と。そしてそれらの事に處する心持がまだ〳〵私たちは練れてゐない事を痛切に感じ恥ぢ且つこれではならぬと思ひました。それからも一つは電話、電燈、水道、ガスなど現代の文明を誇つてゐたものが、時計の振子の止まつたやうに役にたゝぬものとなつた時實に妙な氣がしました。皮肉なやうなあはれなやうな……これから押していろ〳〵な事を考へさせられましたがそれはとてもハガキに書ききれませんからこれで失禮します。

○　室生犀星

○最も深い印象は昔を今にかへらした事。

○　藤森成吉

一、自宅二階で揺ぶられてゐました。第一震後、家族達と一緒に前の學生寄宿舍の庭へ出ました。

二、…………及び大杉氏殺害。

○　村松正俊

一、當時は丁度家にゐました、食事を濟ませて二階の書斎に入り、お茶を飲まうとしたその一瞬間に地震が起りました、最初ゆつくり動いてゐたのでいつもの地震だと思つて呑氣に構へてゐましたがその次に大きくなつた時はもう下に降りることも出來ませんでした、そのうちに壁は落ちるし、本棚は倒れるし、大にあはてて、やつと逃げ降りました。

二、一つはあの大火事の烟です、あの物凄い雲は忘れることが出來ません、もう一つは神田で學生がやつと罐詰一つを燒けた紙でつゝんで逃げてゐるこの光景でした。

○　高須芳次郎

一、恰度ある原稿を纏めてやつと安心して横臥してゐたところへあの地震に逢ひ逃げ出す間もなく大テエブルの下へもぐり込みました、其時壁がくづれ落ちて土烟が立つ、大きな書棚が落ちる、電燈の笠が壊れる四方に男女の悲鳴が起る、慘憺たるものでしたがテエブルの下に居て一命は助かりました。

二、頽廢した人心風紀を戒めるための大試練であります、日蓮聖人の「立正安國論」を讀むと殊に感動する所が多いのであります。

○　正宗白鳥

一、大磯にゐました。家は破損して、二日間外で過しました。

二、人間の脆いことを感じましたが、それは平生でも感じてゐることです。特別に取立てゝ云ふほどの印象は受けません。

○　原田實

一、九月一日朝九時半發下關行特急車で京都行の途中御殿場驛を一寸超えたところで車上最初の地震にあひました。汽車が空中を泳ぎ飛ぶかのやうでした。こいつ脱線だなと思ふとやがて不自然な停り方で汽車は停りました。停つてから後に次ぎの震動があり始めて先刻のも地震の爲めだつたかとわかりました。右手の畑中にあつた大きな石の塔の倒壊してゐるのが眼に入り、そこゝに地割れの夥しいことが段々とわかりました。山中の村にもの／＼しく警鐘が響き消防夫や青年團員が右往左往するのでした。四五時間停車したかと思はれた頃、不安な進行ぶりで發車しました。私は強震で停車したの

だと知ると同時に、先づ腹をこしらへるのが第一と思つて食堂車に入つて食事をとつたのでした。出だした汽車は沼津で再び長停車、乘客は全部下ろされ急行券の拂戻しを受けました。沼津でも引切りなしに震動がありました。小一時間して汽車が出るといふことになつたので多少冒險とおもつたが乘車しました。そして京都まで行きました。

○　　帆足理一郎

一、自宅にゐました。三階の高屋根から瓦が雨の如く降り煉瓦の烟突が目前に落ちたのを見てゐました。家族一同一室にあつて外出出來ず、妻は嬰兒を抱き私は長女を抱いて倒れさうな足を踏みしめ〱家が倒れるのを待つてゐました。幸ひに地震は稍平穩になりましたから屋外に飛出しました。家族一同無事です。

二、一日の夜三階の窓から東方を眺めた處帝都は一面に火の海となつてゐた。此大火は何物をも燒き盡さずには置かないか知らん。罹災者には氣の毒であるが、此の禍は轉じて國民的覺醒の警告たるであらうと思つた。戰後の好景氣に醉つて享樂的頽廢の氣分を增長し、兩性關係は紊亂して殆んど救ふべからざる有樣であつた折柄國民の罪を燒き盡す大火が此帝都然り。日本文化の中心を襲ふたのか。醒めよ國民。歡樂の夢より醒めて靈的に復活せよ。犧牲となつた幾十萬の生靈をして無意味に糞土に歸せしむる勿れ。新文明の建設は是れからだ。立てよ國民！

○　　白鳥省吾

一、自宅の書齋に居ました。永らく氣になつてゐた仕事を終へたあとで、自由なのんびりした氣持で外國の童謠集を讀んでゐました。地震が搖れ出すとひどく强いので、傍に遊んでゐた三歲の男の子を抱へて跣足で庭にとび出して、櫻の樹かげに居ました、自家は平家で隣りは遠く庭もいくらかあるのでこれで大丈夫と、搖れるのを眺めてゐました。

二、人間の生活には全體としての建設が缺けて居り、ごまかしの生活からまねく災害のいかに大きいかを感じた（それは自然の暴力ばかりでない）。そして無數の橫死せる屍の印象は忘られぬ。

○　　豐島與志雄

一、北海道函館市に滯在中。二日出發四日歸京。

二、大杉榮夫妻等の致死事件。

○　　本間久松

一、拜復、八月半ばから支那へ行つて居りまして、九月は丁度青島から船でかへる途中で御座いました。二日の正午頃に關

東大地震といふことを船中で無線電信によつて知りましたが東京橫濱がこんなにひどいとは三日正午に下の關につくまでは知りませんでした。

二、自然の惡戯に對しては人間のいかに脆いかといふこと、その自然の惡戯から免れた人間は天福を授けられた人間であること、その天福を無駄にしてはならないこと――こんなことを雜然と考へました。

○　木村莊八

私は地震の時二階にゐましたが例に依つて震動が來るとすぐ階段を馳けおりて下の室へ行き、大ていの地震だとその頃にはあらかた動搖が靜まります。然し此度の場合は變に益々烈しくゆれる氣がするので、妻と家の者を呼んで三人で一番丈夫と思ふ黑簞笥の側にかたまり、すると、玄關の壁がなだれおちたと思ひます。いつもよりはずつと大きな地震だと感じましたが、頭の上からばら〳〵簞笥の上の京人形や何かゞ落ちて來る。見るゝ柱の何所かゞ云ひ難く外から捩ぢられでもする樣にギクギクと音を立てゝ、自づと襖が外れて來ました。

妻が大きな眼をしてそれを見てゐるから「見るな々々々」と云つて私の手でその眼を蔽ひました。腦貧血を起し想な感じがしたからですが或ひは私自身にさう云ふ恐れがあつたのでせう三人でかたまつて逼息してゐました。たしかそのまゝ二度目の强震もさうして過したものでせう。一體何分間ぢつとしてゐたか、何分間地震があつたか。どう云ふ風にそれがゆれたか、――辨別出來ません、然し多分非常に長時間に思ふが實は一分か二分の間のことでしたらう。ちよつと靜まるとその間を見て急いで外へ出ました。

○

第二問に對してはいろ〳〵の思ひを感じますが――その最も近しい、私を刺戟し且私を決定的な氣にさせる思ひは「東京」が一先づ亡くなつて了つたと考へることです。さう思つた方が間違ひは少ないと思へる點である。

私は日頃東京の近頃の――建築なり、風俗なり、凡て生活――その趨勢の色合を嘆かはしく思つてゐた一人ですが、それでも災害の前にはまだ心賴みのこころはありました。然し早晩いつかはその賴みのこころも無くなつて、このアレキサンドリアの樣なつまり「いなかものゝ」都會は大半にべもない殖民地の樣なものになつて了ひはしまいか。それを心ならず思つてゐたわけだが、如何に乾坤一擲と云ふ樣な此度の災厄の場合は、より早くその實用主義へ此の地を建て直す好個の機會になり想だ。東京は大連の樣なものになつて了つて、即ち本當の意味の文明

とは執着が遠ざかり、我々その歴史の中に土着のものは、故郷を失ふに至る前提ではないかと思ふ。

――然し成る樣に成らせる他、法と云つてありません。大勢なら止むを得ない、私は目をつぶるつもりです。只幸私は職工ですから、美術の方では目をつぶらずに故郷の爲めに働らきたいと思ひます。働いても通じなければ、多分その頃には僕は死ぬ時分だらう。それでもいゝ。

私は東京を愛してゐるが散々の焦土を見るのは辛いことです愛情が私の内部へ生きてさへくれゝばそれでいゝと思ふ一法です。以上。（八月二十三日答）

○　新居格

大地震の時には社（東京朝日）の三階に居ました。

一、久し振りに歸京して留守中の書信や原稿を整理し初めた時でした。「なあに、東京の地震だ」と高を括つてゐたのですがすぐどうも不斷のとは違ふと感付きました。窓越しに向ふ側の家を見ると、屋根瓦は落ちてゐるし棟の眞ん中から折れてV字形になつてゐたからです。で、書信や原稿を鞄に入れ、上着を着て日比谷公園に避難した譯です。

二、全體的に云ふと「超人力」の感じです。富も知識もその前にはくだらなく微々たるものだと思つた。私は新聞でよんだ以外、震災の事實を見に行かうとは思ひませんでした。あまりに悽慘だつたからです。震災の副生として發生したいろんな事件も何れも悲しむべくいたましい事だつた。人間の感情が此極度に表現されたのを見たのも強い印象でした。地震後、人々が差別なく見られ、人々の心にもたしかに何が人間に必需であるかを知らせたのが最も印象的でした。

○　中村吉藏

一、私は當日、澤田正次郎一座が冤罪を被て警視廳へ移送される筈だつたので、その善後策協議のため、公園劇場へ出かけるべく、省線を上野へ出て、市街自動車に乘り込んで稻荷町邊りを走つてゐる最中、ガラ／＼と兩側の家屋の瓦が落ち、壁がくづれ出して、黄黒い土烟があがるので、これは大地震だなと氣附きました。しかし自動車が全速力で走るので却つて「安全」だと思ひました。

二、「自然」の破壞力が盲目的で徹底的で、慈悲も容赦もないといふ事と、それに比べては「人爲」の破壞力が計畫的で妥協的で情けも涙もあるといふ事です。

○　大島正德

一、最初の大地震の時は家族一同食事をしてゐました。ドシンドシンガタ／＼にびつくりしながら一同を制止しつゝ遂に室

内にゐました。而して私達は食事をつゞけてすませました。近所の人が皆道に出てゐるので、其の後我々も庭に出ました。あまりに呑氣でしたが、其の頃郷里が家も人も全滅の厄に會つてゐた譯です。

二、自然力の前には人力の小さいこと。幾十幾百年もかゝつて遂げた文化も人諸共に一瞬に破壊されました。例の社會改造も自然改造にしてやられました。おかげで私達は初めて東京に青い大空をみました。武藏野の嵐も久振りに思ふ存分吹いてをるでせう。幾百年も綠の下に眞暗にゐた土も久振りで日の光に會つたでせう。古今一時に往來。

○　加能作次郎

一、自宅に居て、丁度晝飯を食べようとしかけたところでしたが、それどころでなく、子供を二人兩腋に引抱へて簞笥の蔭に避け、第一震が終つてから外へ飛び出し、近くにかなり廣い原つぱがあるので、取敢えずそこへ避難し、近所の人達と共にそこで三晩野宿しました。

二、いろ〱感じたことがありますが、吾々の生活といふものが、何等の據り所のない、極めてたよりないものだといふことを痛感しました。幸に生命財産(?)共に無事安全でしたがそれは單に山の手に住んで居たが爲に助かつたといふだけで全く偶然だつたに過ぎません。住む所の相違が幸不幸の岐れ目だつたことを思ふと、非常に心元ない氣がしてなりません。

○　井上秀子

一、私は母校の用務を帶びて北海道へいつてゐましたので、あの時は恰度、青森から秋田までの汽車の中でした。第一の號外を手にしたのは九月二日でしたが、それには唯東京は大地震で、汽車が不通だといふ位のことで、其時は震源地も利根川だらうと思ひましたから、レールの修繕がつくまで秋田に止り、旁々用務を果すつもりでゐました處、第二報、第三報で樣子を知つて直ぐ引返したのですが、豫想以上の帝都の有樣に呆然としました。

二、(イ)　いくら人間が最高の知識と美的情趣を働かせて造つた建築もたつた五分間の自然の惡戯の前には一たまりもないのを見て、大宇宙には人類の不抵抗な實在のあることを深く考へずにはをられませんでした。

(ロ)　燒跡を巡つてから、今更のやうに東都の大きさを色々なことから感じました。廣漠たる燒野の有樣を見ては今でも夢ではないかと思ひ、どうしてこれだけ燒けつくされたものかと見ても〱驚愕の念に堪へません。

(ハ)　鎌倉にゐた子供の經驗で、その一刻々々が實に危機に瀕してゐたのを聞いてよくも救はれたものだと感謝すると共に、罹災者に對する同情を禁ずることが出來ません。



地震に關する對話

石原純

A　さう〳〵大地震がやつて來ましたね。百年に一度ぐらゐづゝは關東地方にこんな地震が起ると云ふことは歴史的に私達の經驗した處でした。けれども個人的に經驗のない現代の人達は殆んどそれを忘れて、一日の無事を徒らに永遠に續かせようと望んでゐます。私達は平生においてもつと多く天災に對して警戒の準備をしなくてはなりません。さうでなくて、たゞ慘害を悲しんだり、人生を呪ふたりするのは、まだ〳〵自然に於ける人生の意味を解しないものです。

B　ですが、今度の慘狀はとても言葉では云ひ盡せない程のものでせう。人間の死と云ふことが一個の獨立生命の消失としてそれぞれに體驗せられるには、餘りに〳〵匆卒に見なされなければなりますまい。焦熱のなかに逃げ迷うて人人はたゞめい〳〵の生をのみ欲求します。その外に何の餘裕もない最原始的の狀態に私達はおかれたのでした。自然に對する極大の恐怖は私達の心を淨めるものでなくて何でせう。

A　ほんとうに然うです。けれども愚な人間たちはぢきにその苦しい體驗を忘れて、もとの勝手な心に立ち戻ります。

幸に災害を免れたものが、自分だけの利益をはかつて困つてゐる人たちを顧りみなかつたり、若くは更に之を苦めるやうなのは、何といふ苦々しいことでせう。謂はゆる社會主義者たちが現社會制度の改革を企てるのはいゝとしても、それが現制度を排しようとして、かやうな非常の際に一般者をより困苦に陷らしめることを敢てするとしたなら、とんでもない間ちがひです。彼等はなぜ暴を捨てゝ德によつて導く方法を取らないのでせう。暴に慣れたものは遂に新らしい社會の主動者であることは出來ますまい。

B　地震で慌てゝとび出してその儘家財を燒いてしまつた人たちは、ほんとうの裸身です。少くともさう云ふ人達の間には平等があらはれたのでした。そして彼等の先づ求めるものは食です。寶石を手に握つて出たとしても食がなければ餓ゑ死んでしまひます。田舍の青年たちは今叫んでゐます。都會の榮華に浸つてゐた人たちは今こそ我々百姓の有難味を知つたであらうと。

A　暫時の間はそれは本當でせう。けれども社會中のすべての人々が同樣に災厄に遇うて平等にならない限り、直きに怨嗟が起らないとは云へるでせうか。爭鬪が再び始められないと思はれるでせうか。決してさうではありません。生命を全うしたことに對する一つの感謝によつてすべてをあきらめ得られる人は幸です。しかもこのあきらめは矢張り社會に對する正當の要求ではないのです。私達は現代の物質的施設によつて天災を免がれることは出來ないことをいつも考へなくてはなりません。そして災厄を蒙つたものと然うでないものとに現はれる不均衡を豫期しなくてはなりません。若し然うであるならば、天災に關する十全の保險はともかくもかやうな社會に必須な事がらでなくてはなりますまい。之れなしに私たちの勵精努力は必ずしも正當な效果を期し得ないことになり、そこに社會へのあらゆる危險が胚胎するでもありませう。

B　實際、この災變の慘狀が少し落ちついて顧みられるやうになると、呆然として自分の裸身をながめながら、世のなかのことは何が何やら判らなくなつてしまつたと嘆く人があります。この聲は現在無理もないことでせうか、人間的努力で社會を進めてゆかうとする處にはあつてはならない筈のものであると思ひます。

A　本當に今はさう云ふ哀れな人たちを個人の自由意志で救ふより外に道がありません。けれども恩惠的救濟は決してこの場合に社會の最善の方法と思つてはなりません。なぜなら恩惠を受けるものと之を與へるものとは、決して本質的の差別によつて生じたのではなくて、只不慮の災厄が之を齎らしたに過ぎないのですから、それが被救濟者の精神的向上をどれ程かそこなはずにはゐないからです。斯樣な不均衡を償ふことは、道德的恩惠によつてではなく、寧ろ公正な要求として社會に於てゆるされなければなりますまい。

B　さう仰しやれば、なる程そのやうに思はれますね。社會はすべての災厄に對する保險を準備しなければならないわけですね。

A　その通りです。さうした上で私達は始めて安心してはたらくことが出來るでせう。私達はあきらめを以て原始的自然に復つてはなりません。どこまでも人間的努力をかさねて、どれ程な理想的社會がつくられるかを究め盡さなければならないのです。之れが自然に於ける人間、もつと廣い意味では生物の使命であると思ひます。

B　ですが、一體今度のやうな天災に出遇ふと、私たち人間の建設する物質的文化が何程の價値をもつてゐるかと疑はれます。そして生命の免がれ難い危險に際しては、只何とはなしに絶對の神を念ずるより外はなくなるでせう。私達の心の淨さは寧ろこの原始的な究竟に於て蘇つて來るやうに思はれます。

A　現在の事情はあなたの言葉を肯かせるかも知れません。けれども私達は既に原始的な神の樂園を實現することが

出來ないで、人間の歩みを踏み來つたものです。眞暗い隧道のなかに振り返つて昔の光明を捉へようとしても及ばないことです。私たちは前面の理想の光明を追ふより外に足を轉ずる餘地は恐らくはないのです。たとへ現時の物質的文化がすべての天災を避けることが出來なくとも、それは漸次により良く進ませることの出來るのは否定されない經驗的事實と云つてもいゝでせう。輕い茅葺屋根の田舍家が震害を蒙らなかつた事實を、科學的施設への自然の反抗と早合點してはなりません。なぜなら科學的研究がこの事實を否定するのでは決してないからです。私達は氣長く待たなければなりません。私たちはまだ〳〵發途して間もないのですから。

B　それならば、すべての天災に對する危險を完全に豫防することの出來る時期が果して到來すると想像されるでせうか。

A　恐らくそれは出來ますまい。たとへば今度の大地震が自然に於けるどれ程な變化であつたかを考へてごらんなさい。私たち人間にこそあれ程な慘害を及ぼしたとは云へ、畢竟それは地殼に於ける極めて微細な變化現象に過ぎないのです。若し私たちの地球が熔融した熱球から冷却したものであるとするならば、その當時の溌溂たる狀況がどんな激烈なものであつたかは容易には想像することさへ難いでせう。もと〳〵人間は極めて制限せられた環境のもとにのみ生存することが出來るです。私たち人間に取りて、現時の靜穏な地上の現象のみが調和の世界を形づくつてゐるのです。私たちの理想的社會は之に適合するやうにしか成り立ち得ません。ところが自然現象そのものゝ調和の世界は遙かに之を超えてゐます。ですから私たちの物質的施設がどんなに進まうとも、更に之を破壞する自然現象が災變としてあらはれないと云ふことは決して出來ません。でも自然はやはり調和を保つて最後の平衡に進まうとしてゐるのです。

B　私たちには天地が揺らめき掻けると見えるあの大地震も樹に鳴く蟬や草にすだく蟲にはどれ程の恐怖も與へなか

つたかも知れません。地震の後で私は秋の蟲がのどかに草叢に鳴いてゐるのを聞きました。之も自然の調和の一つでせうか。

A　さうです。自然の調和の美は限りないのです。只私達人間はその狹く限られた環境にのみ生存して、限られた調和を享受するより外ありません。この範圍を超える變化は災變として私たちにはたらきかけます。けれども私たちは自然の最も奥深い意味を察知して安心を得なくてはなりません。私たち人間の個體の生命はなぜ永續的につくられてゐないのでせうか。之は私たちの深く考へなければならない最も重大の問題です。

B　人間及びすべての生物は死によつて運命づけられてゐます。私たちはこの運命を悲むものでありますけれども、人間を超越した自然の調和から見たなら、やはり何等かの意味をもつわけでせうか。

A　死は人間個體の亡滅としてその個體にとつて悲むべき事實にちがひありません。けれども人間全體を自然により廣く調和せしめるために、神の驚くべく注意ぶかく準備した意味ぶかい事がらであると私は思ひます。神は之によつて人間全體の進歩を單一なる個體によりて遂げしめずに、却つて常に新たな個體の發生によつて永遠に繼續せしめようとしたのでした。個體の自然的の死(老衰死)は之がために存在する事實なのでありますけれども、人間個體はその外に尙ほ種々の避け得ない外的原因によつて死滅します。疫病や又今度の天災のやうなものはその最も著しいものでありませう。しかも之等の災禍は或る年數を經て襲つて來るのであつて、人間を死滅し盡す程に決して頻々にはあらはれないのです。言ひ換へれば人間の壽命は之等の自然的災禍の平均週期に對して適當に選ばれてゐると云はなければなりません。

この事實は決して偶然として見過ぐされてはならないでせう。

B　實際、偶然といふことは自然のなかにあり得ない筈のものです。すべてが據る處あつて起されるものでなければ

なりません。それが神の攝理です。

A　然うです。しかも神は人間をこの地上に生存せしめて、その理想を遂げしめるものでありますから、私たちは寧ろ自らにたよつてその眞の理想を探し求め、且つ之を現ずることに努力しなければなりません。不慮の天災に對しては先づそのあり得べきことを十分に豫想して之に備へなくてはなりません。天災は決して自然の怒りではないのです。却つて自然のより大いなる調和を人間に教へるところのものです。天災を免がれたことを、單に神異の加護に歸して滿足するのは、蒙昧時代の思想的遺物に過ぎません。それがたとへ不思議とも偶然とも感ぜられるにしても、私たちはやはりその據る處のあるのを信じなければならないのです。之を審かに考へることは、後の同樣な災禍に處するために資することが多いでせう。この災變に出遇うたものは、その尊い經驗を何に資する處もなく忘れてしまつてはなりません。

B　ともかくも今度の地震は非常の出來事でした。私たち皆は之がために極度に昂奮しました。その間はまだしも多くの人の心が淨められてゐます　それがだん〳〵落ちついて來ると、いろ〳〵な困難な事情があらはれるのに氣づくでせう。私たちはその前後の處置に對して誤つてはなりません。死屍の山を前にして私たちは徒らに爭ひを續けてはならないのではありますまいか。もつと〳〵私たちは考へてゆきませう。

今後大地震が來るか

理學博士　今村明恒

今回の大地震に次いで、數年の中に、再び大地震が來るかどうかといふ事について、世間に種々取沙汰されて危惧されてゐるやうであるが、これは全く根據のない事と見てよい。この事に就いては、九月三日、既に發表したのであるが、卽ち今回の餘震中、江戸川流域に發生地を有する安政三年と、明治二十七年との大地震により、又更にその南方延長の地震帶は、慶安二年と文化九年の地震とによつて、活動の勢力が消耗せられてゐるから、近き將來に於いては再度大地震を起すべき餘力が無いものと見てよいのである。

それから今回の大地震は太平洋海岸の海岸線にほゞ平行してゐる地震帶に屬するものであるが、その北東の延長部の區域に於ては、元祿十六年十一月二十二日安房下總の東南海底に起つた大地震があり、また西方部の延長部に於ては安政元年十一月四日伊豆下田に起つた大地震（津波をも伴ふ）があり、そして今回のは丁度これ等二者の中間の空隙を埋めた事になつてゐる。

而してこれ等の地震帶上を更に遠く隔つてゐる延長部の上に於ては、東北の方では本年六月二日の常陸沖地震、西の方では安政元年十一月五日の紀伊沖大地震があつて大抵はその勢力が消耗せられてゐるものと觀測してよい。

假りにその餘力があるとしても東京からの震原距離が遠くなるから損害はない筈である。

これ等の理由によつて余は今後東京に於ては大地震はないものと推定するのである。

今後の地震に對する心得

理學博士　中村左衛門太郎

今度の大地震は、相州から房州に渡る北方の地盤が隆起したのが大原因で、甚しい處は六七尺も隆起しました。最も地震のひどかつたのは、相州の沿岸です。そして最も被害の烈しいのは、小田原と熱海の間にある根府川附近でした。根府川附近では、非常に大きな山崩れ、地辷りがあり、熱海や江の島の沿岸には海嘯が恐ろしい勢で襲つてきました。相州や房州の邊りでは、漁船のはいれなくなつたところも澤山あります。

東京では北端が襲はれただけで、その被害も相州や房州に比べたら弱い方でしたが、あの一搖れ、二搖れが、一大帝都を粉微塵　碎いたのだから恐ろしいと言はねばなりますまい。それについて、今後の日本に、今度より以上の大地震がくるか、こないか、それは私共にも豫測できないことですが、少くとも東京地方では當分起る心配がないと思はれます。併し其他の土地に就いては何とも言へないのですから、起るものと覺悟してゐなければなりません。

この地震の豫報は、將來に於ては必ず出來得る筈のものですが、今のところ何處の土地で何時起るといふやうな詳しい豫報は不可能です。唯、今でも確實に考へられるのは、一つの地震が強烈に起つたあとに、餘震が頻々として起つてくるやうな場合には、當分大きなのがこないだらうと言ふことです。それに一番惱まされるのは、所謂流言浮説で、何時地震が起るなどと分り樣もないことを言觸らすとお互に迷惑ですが、餘震が多い程危險の少いことは事實です。

今度の自分の經驗から推して、此の次の地震の心得になるやうなことを言つてみますと、地震の時に家が潰れなかつたにも關らず、本箱とか、油繪の額とかいふ家具、それからあわてて飛出して屋根瓦などで負傷を　た人が多かつたことが一つで、瓦といふものは耐火力にはかなり價値があつても、地震にはま

ゐで駄目です。今度の火事で、中央氣象臺でも、普通なら燒く筈のなかつた重要書類を燒失しましたが、やはり本箱が倒れたためで、一人では起すことも出來ず、撰りわける譯にもゆかなかつたからで、これから本箱なども、壁にしつかりくひつけておくやうにしたいものです。それから石の門柱や石塀には注意をしなければなりません。石造建築は絕對的に危險ですし、煉瓦構造の大きなものも危險です。鐵骨煉瓦構造もあまり價値がありませんが、一番安全なのは鐵筋コンクリート構造です。日本の木造では古風なもの――地方の農家で行はれてゐるやうな――は比較的安全ですが、所謂都會の貸家式建築や別莊式なものでは耐震力がありません。しかしこれらは、家が潰されても命だけ助かる價値は割合多いのですが、都會建築としては駄目で、木造建てにするならやはり平家に限ります。二階建の場合は普通下が潰れて、上が殘りますが、上にゐれば放り出される恐れがあるから同じことです。

金庫などでも轉り出される心配がありますから、家の中で逃げるとしたら、丈夫な机の下へでもかくれてゐるより方法がなからうと思ひます。石の門柱や、燈籠や鳥居、煉瓦や石塀などに縋りついては却つて危險です。道路の龜裂は間が悪ければ危險ですが、普通の場合は大して恐れるに足りません。

地震についての心得と言へば大體これ位のものですが、私が此際、特に婦人に對して改良を求めたいのは、今度の大震火災を機會として和服を撤廢することです。若し九月一日のあの場合日本の女が洋裝で靴をはいてゐたら、もつと機敏に逃げられたでせうし、それにリユクサツクのやうな物でも背負つて逃げたら死傷者も一層少なかつたらうと思ひます。どちらにしても罹災者は衣服の新調にせまられてゐる場合ですし、此際フランスあたりからでもどしどし輸入するでもして、是非衣服は改良すべきものだと思ひます。

遺難哀話

燒跡に肉親の遺骨を捜す

岩村義延

東京朝日に、孤兒になつた少年のことが出てゐた。「僕死んでも孤兒院へなんか行くのは厭やだ。僕一人で逃げてきて悪かつたなあ、でも父さんも母さんも、何でもいゝから早く逃げろと言つたんだもの。みんなが死んぢやつたら僕困るなあ。」さう言つていぢらしい悲歎にくれてゐる少年が、警視廳に保留されてゐることを知り、同時にそれが甥の正雄であることを知つた時私はどきんと胸倉を突かれた氣持で立上つた。それは喜びと悲しみとが颶風のやうに心を襲うてきたからである。一足も早く甥に逢ひにゆかねばならないと思つて急いで立ちかけたのであつたが又がつかりして玄關に腰を下してしまつた。せめてもう二日だけ早く、從弟が此世にゐてくれたことが分つたならと世にも悲慘な死をとげた叔母の斷末魔の姿がまたおり〳〵と、私の胸にしつかりしがみつくやうに浮んできたのである。被服廠跡の慘状を故郷の新聞で知つた時、丁度被服廠を二階から見下してゐた叔父の家のことを思つて、こいつはもう九死に一生もむづかしいと思つた。炎々として燃えさかる焰が數萬の男女の悲鳴を包んで悪鬼のやうに燃え狂ふ中で、叔父と叔母と、十四になる從妹と、十一と六つの從弟とが悶死する有樣が拂つても拂つても目先にちらついてならなかつた。いつでも快活な話をしながら、逢ふたびに自分を諫めたり勵したりしてくれた、颯爽とした實業家の叔父、それから體は弱かつたが勝氣で子煩惱だつた叔母や、可愛らしかつた三人の從兄弟が、あの儘灰になるといふ

とゞごうしたらかうも豫想しなければならないのであらうか。

　私が東京の土を踏んだのは九月十二日の朝で、その足を直ぐ本所に向けたが、相生署で、被服廠跡で命をとりとめた人々を救護してゐる各病院を尋ねて、愈々あてもない不安な捜索に取かゝるために、麻布の霞町にゐる友人の手を借りようと思つて一先づその方へ落つくことにした。そして十三日の朝、近くの高樹町にある赤十字病院を訪ねていつた。五人の家族のうち、誰か一人でもいゝから萬々一こゝに救はれてゐるやうなことがあつたら……奥まつた樹立の間を通つて、朝から殺到してゐる受附のテーブルで、一々救護者の姓名を書きつけてある假綴の人名簿をくりながら、しきりに胸さわぎがしてならなかつた。ところが、岡村安子（四十歳）といふ叔母の姓名がひよつこりその中から出てきた時はドキンとした。胸元が急に熱くなつて我知らず兩方の眼頭がうるんできた。案内せられて、外科の三等室の入口をくゞる時、私は今まで感じたこともなかつた異常な人間の心の緊張を感じた。何といふ痛ましい負傷者の數であらう。強烈にむせかへる藥の香であらう。一體叔母は何處にゐるのだ……すると看護婦は、廣い病室の片隅の方へ私を導くのであつた。あゝ其處で、私がまともに顔を合せた者はどんな姿をしてゐたであらうか――。みつめるまでもなく、紛れもない叔母の相恰であつたが、肉親の甥が故郷から訪ねてきて、今傍に立つてゐるといふのに、叔母はもうそれさへ知ることが出來ない不具者であつた。生きながら鬼女の面のやうに物凄く燒爛れた顔に變つてゐたのだ。眼球は二つとも飛びでゝしまつてゐたし、豊かにあつた頭髪も、大部分は燒けうせて、唇がまた二眼と見られないやうに引吊つてゐた。唯心臓の周圍と腹部とが少し火傷をまぬがれたゝめに今日まで露命をつないでゐるのであつた。唇を噛んで下を向いたまゝ私は暫く物が言へなかつた。

「叔母さん、義延です。苦しいですか。」

慄え聲で呼びかけると、じつと仰臥してゐた顔の筋肉　何といふ複雑な痛々しい表情が動いたことであらう。

「おゝ、義延さんかい。よく……來て下すつた。」

叔母は言ひながら自分に近い左手を動かさうとしたが、その手がまた親指のほかは、すつかり無慘に燒けおとされてしまつてゐるのだ。かういふ現實がまたとあるものであらうか。

「叔母さん、ほんとにしつかりして下さるのですよ。故郷の方で何でもしますからね。」

叔母は唇を歪めたまゝ暫く苦しさうに默つてゐたがやがてしくしくと聲をあげて泣きじやくつてしまつた。

「正雄、正雄はどうしたらう。被服廠へ逃げ出した時正雄は

何處にもゐなかつたが、一人で何處へいつたのやら、熱い思ひを何處でしたのやら。正雄が可哀想だ。あの子を捜して……靜子や孝一はもう捜さなくても、佛になつてゐますから。正雄をどうか捜して……」

私は叔母の一言々々に胸を絞られる思ひで熱い涙を流した。これほど手酷い火傷をしながら今日まで生きてゐたのも吾子のことが思はれたからではなからうか。

「叔母さん。私はこれから正雄君を捜しにゆきます。きつと捜してきますから信じてゐて下さい。安心してゐて下さるのですよ。」

高樹町の大通りへ出てから氣狂ひのやうにスタ〳〵と自分は歩きつゞけた。考へれば足が動かなくなる。暫く何も考へないで、本所横網町にある叔父の家の燒跡まで、器械のやうに歩きつゞけようと思つた。あの邊で聞いたら又何とか樣子も知れよう……。地面の上を數知れぬ人間の足が皆機械のやうに音をたてゝ動いてゐた。どの人の顏にもどの人の顏にも、皆驚くべき夢のあとが陰慘な影を刻んでゐるやうに見えた。それにしてもつい此間まで元氣のいゝ姿をして日本橋を歩いてゐた快活なあの叔父や、接客に忙しかつた叔母や、淡紅色の凉しい洋服をきて孝一をあやしてゐた愛らしい從妹や、被服廠跡で青年達がやつてゐる野球を見てゐたのだと云つて半日も家をあけてゐた正雄までが、もう此世の中にゐないものと無理にも考へねばならないのだらうか。もや〳〵する頭で叔父の家の燒跡へ來たのは午後の二時頃だつたらう。カン〳〵と陽は地面に腹ばつてゐる燃殼の上を照りつけてゐた。叔父の家と云へば、二百餘坪の間であつたが、若しやその中にと大體の目當をつけて、とにかく遺骨を捜してみることにした。持合せた三尺の棒で、遺骨を捜しながら、私は時々茫然として突立つた。後には三萬に餘る死人の山を昨日で漸く燒き終へた被服廠跡がある。その前に花を投げて香をたいて默然と頭を垂れてゐる人々の群も皆半は夢心地であらう。自分はその日とう〳〵叔父の家跡に六人の遺骨を捜しあてねばならぬ運命を持つてゐた。臺所のあたりで見つかつた二つの白骨は女中達の最期であることはたしかだが、中庭に面した座敷の縁側に並んでゐた三つの遺骨については其時見當がつかなかつた。若しや此中に正雄が交つてゐるのではないかと思つたがあとで附近の人に聞いたところによると、地震の時逃げこんできた隣家の老人と、女達であることが分つた。最後に私は、倒れた土藏の下のところで、とう〳〵叔父の死をたしかめねばならなくなつた。土藏は眞二つに割れてゐたのであるが、その下のあたりに一つの遺骸を發見したのだが、その附近には

叔父が平常しめてゐた黑縮緬の兵兒帶の端が燃え殘つてゐたのである。

次の日も朝早くから甥の行方を搜し廻つたが、一向手蔓がつかないので、夕方になつてからこれも氣になる叔母を、再び赤十字病院に訪ねてゆくと、その時は既にもうおそかつた。良人や子供の後を追つてとう／＼此の世の人ではなくなつてしまつてゐた。普段から非常に氣にしてゐた、用意のいゝ叔母であつたが、何といふ悲慘な最期をとげさせられたものであらうか。叔母の最期に逢へなかつたことゝ、正雄の消息がそれから二日後になつて知れたことが、どうしても心苦しくてならない。

私と逢つてからも、正雄は悧巧な勝氣な子であるから、默々と一つこねずに、にこ／＼としてつきまとうてゐたが、「これがお母さんの遺骨だよ。」と言つて小さな箱のふたを取つた時は、さすがにしく／＼と泣き出してしまつた。

一昨日、私は正雄の父母　姉弟の骨箱をかゝへ、甥の手をたづさへながら、荒涼たる帝都から、山河の美しい故里の村に歸つてきた。恰も秋草のきそひ咲くこの北國のK村は正雄の父と母とが生ひたつたところだ。不幸な死をとげた親しい人々のために靜かな冥福を祈る――。

臨月の妻を助けて九死に一生を得た話

森　まさ子

上野博覽會場の臨時救護院では、內科、外科、產科を合せて一千人の罹災者が收容されてゐて、何れも皆此世ながらの焦熱地獄をくゞりぬけた人々である。その中で、外科と並んだ產科の入口で、親切に妻子をみとりながら、自分も負うた手足の火傷の癒えるのを待つてゐる四十餘りの質朴な男がゐる。この男は自分達の家族七人は不思議にも助かつたのだと言つて、にこにこしながら遭難の始終を話しだした。

「私の家は本所の業平橋の附近で、うどん業をしてゐたのですが、はじめの地震の時家が半潰れになりました。北風で舊三井寺――もと三井寺のあつたところですが、唯今は墓場と敷地だ

けになつてゐますから、瓦の飛ぶ心配もありません。其處に戸板を二枚敷いて、簞笥や、風呂敷包などを持ち出し、萬一火が來たらとバケツの用意をして、一家族とも避難をしてゐました。附近の人々も集つてきました。すると間もなく火の手が恐ろしい勢で三方から燃え上るのが見えました。一方は護謨會社から一方は日東氷會社と、それに富士紡績會社、この三方から焰の舌がメラ〳〵とおしよせてきて、とう〳〵逃場を失つてしまつたのです。仕方がないから火の手の迫るまゝに一寸下り、又一寸さがるといふ風にして、追ひまはされながら、再びもとゐた三井寺の原つぱへ出ました。石塔がポツ〳〵立つてゐるところで、はじめはその石塔のかげに荷物を置いて、荷物の傍に一家族七人とも一緒にゐたのですが、私は四つになるあの子供(側のせんべい蒲團の中には青白く痩せた女の兒が片手を蒲團の外へ出して、すや〳〵と眠つてゐた)を片腕にかゝへて、片手で妻はこんな體で産み月ですから、後へまはつては頭から水をかけてやつてゐたたのです。みんなその時は蒲團を被つてゐたのですが、煙と火の粉でどうしようもなく苦しくなつて、又二三間向ふの石塔のかげへ逃げました。其時分はもう、わが兒の悲鳴か、人の兒の悲鳴かも分らなくなつて、着てゐる物は旋風に吹きとばされる　同時に火の粉は頭へぶつかつてくる、直接口の中へも赤い火の粉がパラ〳〵はいりこんでくるのですから、呼吸もつけなくなつて、その時分はほんたうに九死に一生でした。自分はもう駄目だと思ひましたが、生きられるだけはもう一分間でも生きたい。若し自分が死んで子供が生き殘つた場合はどうだらう、さう思つて勇氣を鼓つてみましたが、もうがつかりして子供をだいて歩く力もなくなりました。見ると一間程先に妻が打臥して仆れてゐるのです。これではいけぬと私は一生懸命になつて水を飲みました、水を飲んで妻の名を呼びましたら、仆れた儘足を少しあげましたから、まだ生きてゐてくれるのだと思つてほつとしました。それからあと一分間も經つてから火の手は漸く距つて、煙もこなくなつたのですが、私共が逃げ廻つてゐるた間は、實に三時間でした。もう十分長がつたら、とても生きてはをれなかつたでせう。又水をかけてゐなかつたら駄目だつたでせう。私共はお蔭で七人とも不思議に助かりましたが、あそこへ逃げてゐた人は二三百名はありましたらうが、そのうち死人は七十四名でした。家の隣りにやはり姙娠してゐた女の人がありましたが、此人は助かりませんでした。もつともこれは天運でせう。私共は成田の不動尊のお守袋を一つ〳〵持つてゐたのです。妻は親戚から貰つたお守りを集めて袋に入れたのを胸につけてゐましたから、身代りに立つて下すつたのではない

かと。あらたかな勿體ない氣がしてゐます。え〻、幸ひ妻の體はところ〴〵傷を受けましたがまあ安全でした。しかしお産がすんで妻が起きられるやうになつても、四つになるあの子の腿の火傷が治るか治らないかと思つてゐますが……まだ外科の方にも二人寝てゐます。」

男は話し終つてからもにこ〳〵と幸福さうな顔附きをしてゐた。外には焦土を荒らす嵐が雨を運んで、板戸を叩きつける音が凄じかつた。

母を見殺しにした小田原の一夜

葉山一郎

又しても悲しい記憶の頁が展開されて、思ふまいとすればする程、はつきりと腦裡に描き出されるのは、彼の震災當時の光景であります。

當時、私は弟の病後の保養の爲に、小田原へ母と三人で行つてゐました。家が廣くて淋しいものですから、横濱の叔母と従姉妹とに來て貰つて、六月からずつと彼の地に居りました。

九月一日の日は、朝早くから早川へ鮎を釣りに行く筈でしたが、夜半からの風雨の爲に止めました。

恰も朝食の時でした。皆が今朝は井戸の水が湯の様に温いがどうも變だ。きつと箱根が近いので、此の附近にも温泉の出る所があるのではないかと話し合つて居たのです。今から思へば地震の前兆の様な氣がします。

此の日、母と私と弟とは二階にありました。叔母は前日乳を腫らして附中醫院で切開し、當日も治療をうけて、車で歸つて來て下の奥座敷で寝て居りました。

丁度お晝の食事の用意が出來た事を、女中が二階へ告げて來た時のことです。極めて小さな微動がありましたので、「地震だよ」と言つて居ますと、忽ち上下動が始まりました。母と弟とは下の座敷へ下りて行きました。

私は直ぐ止む事だらうと思つてゐますと、屋根の瓦がバラバラ落ち始めます。之は大變だ二階から外に飛び出ようとしていきなり立ち上りましたが、立つと轉がり、立つと轉がり、と

うしても立てません。上下動は益々猛烈になります。家鳴りがします。私は「もう駄目だ、死ぬるんだ。」と覺悟をして、座敷の眞中邊の所に坐つて、何か落ちるだらうと思つて右手で頭を蔽ふて、觀念の眼を閉ぢてをりました。すると坐つた體が左の方に倒されると同時に、家がふはりと輕く倒れるのが感じられました。(かう書くと可成の時間の樣ですが之がほんの一瞬間です)氣が附いて見ると、自分の體は天井板のとれた所から外へ出て居るのです。屋根の裂目からは青空が見えてゐます。その裂目から外へ出て見ますとあたりは濛々たる土煙に包まれ、向ひの別莊も、隣りの別莊も皆ペツチヤンコに潰れてゐます。夢ではないかと一時は思つた位です。

ところへすぐ家の下敷になつた母と從姉妹の助けを求める叫びが微かに聞えてきます。「今助けるよ――」と叫び續けながら、再び屋根の裂目から中へ這入り込んでゆきました。上下動は尚盛にしてゐます、砂煙りが立つて屋根の中は眞暗です。「何處だ――」と尋ねますと「ここだ――」「ここだ」と天井板を下から叩きます。其音をめあてに棟の下の壁をやつと取りました。而して其下は二階の床板です。

素手ですから、此厚い板はどうしても剝がれません。

下からは泣いて助けを求めて居ます。氣許りせいても床板はとれません。再度屋根の裂目から外へ出ますと、弟は無事に庭の松の木につかまつてゐますから、弟に手傳へと言つて聲をかけましたが、震動が激しいので歩いて來られません。自分獨り轉んだり、ひつくりかへつたりして、夢中で瓦をはがし始めました。

下では早く助けてくれ〳〵と泣き叫ぶのです。心ははやるけれども力が出ません。丁度そこへ老人が二人來てくれましたので之に勢を得て、屋根を上からはがし始めました。母の聲、從姉妹の聲が漸次よく聞えて來ます。地震の震動もよほど衰へて來ました。ところが叔母の聲が聞えません。「叔母さん」と呼んでも應ずるものがありません。心はせく許りです。

漸くの事で下座敷の天井板を剝しますと、從姉妹二人は無事に救はれました。母はと見れば、緣側の棟に左半身を押へられて居ます。「苦しいから早く出しておくれ。左足と手が動かないから、抱いて出しておくれ」と申します。そしてあとはお祈りをしてゐるのです。

「氣を確にして下さい」「塵が入るから眼を閉ぢてゐて下さい。」と言ひながら私と老人とで、やつとの事で棟を持上げて母を抱いて出しました。

氣がついて見ますと、家が二つに裂けて、二階の押入の夜具

類が庭に飛び出てゐるのです。之を庭の大きな梅の木の所に厚く重ねて敷き、靜かに寢かせて患部を調べて見ますと、左腕の上膊骨の骨折と、左膝關節の裂傷及び血管が切れてゐるのです。取りあへず自分のシャツを引裂いて母の足をつよく四ヶ所ほどしばりましたがどうやら出血が止つたやうです。今度は兵兒帶をといて足の下部へ繃帶して兎も角も應急の手當をしました。母の手當がすむと、直ちに私は再び屋根に歸つて叔母を盛んに呼びます。然し少しも答へる聲が聞えません。手傳つてくれる老人二人と叔母の臥してゐた座敷の上の瓦を一枚々々剝がしてゆきましたが、呼吸は苦しくなつてくる、震動は再三猛烈に繰り返してくる。瓦はなか〳〵取れません。叔母は確かに壓死したのだと思つても、尙肉身の情に迫られて、若しや生きてゐてくれはせぬかと、瓦や屋根板を取るのです。漸く屋根板を取りますと、叔母の寢てゐた蒲團が見えてきましたから、再度呼びましたが、聲は聞えません。落膽の中にも壁を取ると、無慘にも倒れた柱に頭部を打たれて絕息して居るのでした。

叔母の體を出して再び母の所へ行つて容體を見ますと脈搏は危篤を知らせてゐます。醫者をと思つて素足のまゝ倒れてゐる家々の門や、屋根を越えて行きますと、外科の醫者も内科の醫者も、醫者といふ醫者は皆壓死してゐるのです。

小田原の町三ヶ所よりの出火の爲に空には炎々と火の手が上つてゐます。頼りとする足柄病院も盛に燃えてゐます。

火事は益々猛烈になつて來ます。今にも海嘯が來ると人々は叫んでゐます。

海鳴が大きくなつて來ました。再び家へと取つてかへしましたが、火の粉は盛に降つて來ます。鳴動と共に震動は小止みなく續いてゐます。母はと見ると意識は判きりしてゐて、「醫者は來るか叔母さんはどうした。」と尋ねます。

「醫者も直ぐ來る、叔母さんも無事に出た」と言つて母の氣を落させまいとしました。然し意識はあつても母の呼吸脈搏の變調は患部出血の致命的なることを示してゐます。(私は某醫大學生です)數時間後には母の死といふ事を覺悟しつゝも、尙一心に病後の弟と二人で看護に從つてゐたのです。

從姉妹達は手傳つてくれた人に賴んで、二丁許り離れた知人の所に伴れていつて貰ひました。

迫つて來る火事、鳴動、震動、海嘯の恐怖中に日は次第に暮れ初めました。

別莊地の靜寂を破りて夜の更けると共に浪の音も、火事の音も、益々大きくなつてゆきます。恐怖に滿ちた人々は助けにも來てくれません。

母は苦しみの中に醫者を呼んで來いと言ひつゞけてゐます。「今に醫者が來ますよ」と、秒一秒と死期の迫つて來つゝある母をあふれる涙をかくしながら慰めてゐるばかりです。母は「私は死ぬのではないか、若しさうなら早く殺して此の苦しみから助けてくれ」と私に賴みます。此時の私の心の苦しさ全く何と言ひあらはしていゝのか分りません。

たゞ母の脈をとり、時計を薄暗がりで眺めながら、臨終を待つのみです。夜は益々更けてきました。倒壞家屋の下に敷かれて今尙出られずに、救ひを求める微かなる人々の呻吟、海岸より海嘯を叫ぶ漁人の聲、鳴動に伴ふ震動があたりの物凄い樣な寂寞を破つて、身を切るやうに聞えてくるばかりです。

私と弟とは、帶を互に結びつけて、それを母や叔母にも結んで一端を側の梅の幹に固くしばりつけました。たとへ海嘯で死んでも屍だけは殘る樣にと思つたからです。「是非助けて來れよ醫者を賴む」と夢現の口に言ひながら母は次第に昏睡狀態に落ちて行きます。弟と二人はたゞ何を賴ることもなしに、母の脈を調べ呼吸を數へてゐるばかりです。二日の朝三時頃になつてから、母は突然昏睡から覺めたかと思ふと、死を悟つたかの如く二人にお祈りを賴みつゝ遂に不歸の人となりました。

不安のうちに呪ふべき一夜は白んでゆきました。氣がついてみると倒壞した家屋の彼方には海が廣々と青波をたゝへて、草原の蟲が何事もなさゝうに歌ひつゞけてゐました。

職責を全うした七十の爺さん

野村ちあき

牛込原町の成城中學校で會計主任をしてゐる七十になるお爺さんがあります。このお爺さんは、もと陸軍の主計をしてゐた人で、下谷の徒町に住んでゐましたが、清島町から出火した火の手が、折からの暴風にあふられて、見るく〱おしせまつてきたので、其時家にゐたお爺さんの長男は、年老いたお母さんの方を背負ひ、一方爺さんをせきたてながら一足先に逃げだしました。殘つたお爺さんは、平常から責任感念の強い人でしたから、危急の場合にも捨てゝはおけない學校の財產記錄や預金通

帳などを纏めて、それをしつかり腹にくゝりつけて後戸外へ走り出ました。しかしその時はもう四邊は黒煙こ火の粉に卷かれて、二間先の足もごさへ、やつこ分るか分らぬ位でした。さうかこ言つて一息ついてゐれば、一息だけ危險が迫つてくるのですし、死んではならない體を、どうしたものかこ思つて躍起になつてゐるうち、漸く煙の隙間に、向ふの方へ走つてゆく人影が見え出しましたから、そのあこを追つかけて命がけに走り出しました。そしてやつこの思ひで逃げのびたこころが、たつた今、炎々こ燃え移つたばかりの上野驛の裏手だつたのです。第二の危機がまた盛りかへつてきました。上野の山へ遁れようこすれば、山はもう人で一杯だから入れぬこ言ひます。爺さんは仕方なしに持つてゆきごころもない手足で赭土の崖 縋りつきました。その一攀ぢ二攀ぢがごんなに苦しかつたでせう。途中でこう〳〵進退がきはまつて、うん〳〵唸りながら、あか土にしがみついた時、崖の上から體に刺青だらけの人がきて、お爺さんを引上げにかゝりました。するこその後からまた一人の男が下りてきて一緒に引あげてくれましたので、お爺さんは嬉し淚を流しながら頭をさげて二人の恩人にしきりにお辭儀をしましたが、あこに氣がついて見るこ、刺青の次に來て援けた男はお爺さんの、次男坊だつたこ言ふのです。

「私は此年になるが、有難う〳〵こ言つて、自分の子供に頭を下げたのは生れてはじめてでした」こお爺さんはその翌日、車で學校へかけつけた時、感慨深く話してゐたさうですが、このお爺さんのお蔭で成城中學の財產書類一切が安全だつたのですから、校長の澤柳さんも感心してをられるでせう。お爺さんの家は勿論のこと、家財全部は灰になりました。

血涙記

原田仙

父を拾つ

火の手に追はれて、吉原土手を追はれて來る群集の中に、不思議に命を拾つた兄妹がありました。足腰の自由にならない父親を、兄妹が兩わきから抱へるやうにして、先を爭つて逃げゆく群集に揉まれ揉まれて逃げて來る中には、早い火足に捉へら

れて、一聲の叫び聲と共に倒れてしまふ人達も數多くありました。その中にあつて、兄妹は、命のつゞく限りと、兎もすればあきらめ勝になる父親の氣を引立たせて、押され押されて來る中に、竹の藪の渡場まで出ました。その近くには、共同物揚場(ものあげじよう)のちよつとした廣場があつて、そこには早くも、動きのつかない程、群集が逃げのびて來て居りました。兄妹は、その群集の中に交つて、父親の身體を休めさせて居りますと、紅蓮の猛火は、容赦なく此の群集の上に降りそゝいで來たのです。一歩前に出れば河、すぐ後ろは猛火です。人々はいづれも覺悟を定めて、念佛を唱へたり、肉親の者の名を呼び交したりして、最後を期して居りました。其の中に、火はいよいよ勢強く押寄せて來ました。父親をいたはつてゐた兄妹は、もう愈々駄目と思つて、

「お父さん、皆此處で死にます。私達ももうこれまでの命とあきらめませう。」と云つて、父親の手を取りますと、父親は、

「わしは老先き短い者だから、何處でどう死なうと、ちつとも未練はない、がお前達は、これから、と云ふ身體だから、何うか逃げのびてくれ。水に飛び込んだら、或は命を拾はれるかも知れん」と云つて、二人の手をつき離して、何と云つても聞入れません。ドウツと火の手が人々の頭の上に被さつて來る度毎に、聲の限り唱へてゐた群集の「南無阿彌陀佛」が、水を打つたやうにはつたりと止みます。そして、其度に人々は死んでゆくのです。父親は、拜まんばかりに、兄妹に向つて逃げのびることを頼みます「それが此の場合の何よりの孝行だからと云つて、促がします。兄妹は涙をのんで、父親に此の世のいとまを告げて、手に手を取り合つて、巾の狹い板の棧橋傳ひに、川に身を投じました。浮び上ると、手に觸れたのが一本の杭です。此の一本が命の綱と、兄妹二人は、一生懸命になつて縋つて居りました。猛火は川面まで襲うて、その熱さは到底堪ふ可くもありません。二人は、水にむぐつて頭をひたしては顏を出し、そしてお互にいたはりつゝ、火の手の遠くなるのを祈願に懸けて居りました。ゴーツ、ゴーツ、と荒ぶ猛火のひゞきと共に、人々の聲は段々消えて行きます。折よく其處に流れて來た座蒲團を神の助けと拾ひあげて、それを、水にひたしては頭にのせ、乾くとまた水にひたして、頭にのせて居りました。斯うして、夜の明けるまで九時間の間、川の中で過して、明け方、二人は船に救はれました。あとで父親の死骸を探しに行きますと、父親は合掌したまゝ、黑焦げになつて死んでゐたと云ひます。兄妹は二人ながら、眉毛と、睫毛を燒かれて居りました。眼は、かすんだやうに白くなつて居りました。水中に居た九時間、どん

なに熱い思ひをしたか想像されます。

大川端

被服廠の惨禍のあつた翌朝、山なす骸の中から這ひ出て、とぼとぼと歩き出した男がありました、顔は土に塗れ、衣服は裂け、手脚、其處此處に、見るも痛ましい火傷を蒙つて居りました。其のあとから、すぐ、年は十六ばかりになる、髪を亂した、同じく土塗れの衣服を纏ふた娘が、呆然とその男のあとに從つてゆきました。娘と、その男とは、互ひに穴のあく程顔を見合ひました。けれど、お互ひに知つた間柄ではありませんでした。男は妻と子を失くしたことを語りました。娘はたゞ獨りの母親を失つたことを語りました。そして、千住に遠縁の親戚があるから、其處まで連れて行つて下さい、と男に頼みました。燒跡の煙の亂れた大川端を、男は、娘の手を取つて、千住の方にとぼとぼ歩いてゆきました。

母を失ふ

本所の相生橋の上には、何千と云ふ群集が橋の兩側から避難して來ました。○○銀行に出てゐる進藤春吉と云ふ、今年二十八歳の青年は、老いた兩親の手を取つて、此の橋の袂まで來て群集に押返されて、揉まれ揉まれする間に、父親の姿を見失つて了ひました。そして、母親の手を取つて、漸く橋の中央に避難しました。丁度午後の八時、此の八時と云ふ時間は、東京市中の各方面で、最も慘鼻を極めた時間でしたが、橋の兩側から火の手が寄せて來ました。橋の兩端に居つた群集は、雪崩を打つて中央に詰め寄せます。中央の人達は、爲に溢れた形になつて、ばらばらと川に落ちてゆきます。烈風にあふられた火が、人々の頭の上を掠める度に、群集はわつと一聲放つたまゝ、ばたりばたりと倒れてゆきます。相生署の巡査の一人が「皆様、もう覺悟して下さい」と叫んで、欄干からザンブとばかり水中に飛び込みました。それに續いて、群集は、あとからあとから、水中に飛び込んでゆきました。飛び込んだ人の頭の上に落ちたりして果てた人間が、幾人ゐたか解らないと云ひます。その中に、橋の兩側に火がつき始めました。猛火はいよいよ勢を得て、橋の上に被つて來ます。進藤春吉は、もう是迄と思つて、母と共に河に飛び込みました。進藤は水泳の名手と云はれる位ゐ、水泳に掛けては達者な男でした。それで水中で、すぐ母親の手を取つて、自分の肩に摑まらせました。斯うしてゐる間にも、人々は、あとから續々と水に落ちて來るのです。既に命を失つて水に流されてゆく人の身體が、仕切りなしに身

體に觸れるのを感じたと云ひます。そして、少しでも安全な個所に泳ぎつかうと思つてゐる中に、上から落ちて來た人が、母親に當つて、肩を掴まらせた手が辷り落ちると共に、もう、母親の姿は見えなくなつてしまひました。聲の限り呼んでみたが答へる者とてなく、其中に川の上にまで火がかぶさつて來たので、むぐつては泳ぎしてゐるうちに船に救はれたとの事です。

父親の方は、早く船に助けられ、橋の方を眺めてゐると、橋に火がついてからは、橋から落ちる人々がまるで火の塊のやうに見えるので、もう妻も息子も此の世に亡き者と、殆んど自失の狀態で、夜が明けるのを待つて千葉縣下の方にとぼとぼ歩いてゆきました。二三日經てその父親は、自宅の燒跡を整理しなければならない事に氣が付いたので、東京に歸つて、茫乎と燒跡に立つて眺めて居りますと、近所で知り合ひの人が來てゐて、

「お宅でも、息子さんが助かつて本當に結構でした」と云はれて、夢かとばかり驚き、何處に何うしてゐるかと、もう堪らない思ひで、親戚を探して歩きました。小石川の或親戚に巡り合つて、抱き合つた父子の姿は、なみゐる人を悉く泣かせたと云ひます。春吉は、母を失つたのはひとへに自分の責任である事を感じて、父親に詫びました。すると父親は、

「あれほど沢山の死人が貴様の眼には這入らなかつたのか。お母さん一人位ゐる仕方がない」とは云つたものゝ、男泣きに泣き濡れたさうです。

母娘の命

大事變に遭遇すると、女は、兎もすれば茫然と自失の狀態から、すぐあきらめを抱いてしまふやうです。芝の田町に母獨り娘一人の家がありました。一日の丁度地震のあつた頃、近所の細君と居間で世間話をして居りましたが、地震と云ふ間もなく古い家屋であつた爲、逃げ出すひまもなく倒壞して、屋根の下敷となつて了ひました。然し、支へる物があつて、身體は打たれなかつたのですが、もう一切が破滅する時だと考へて、その場に居合せた細君に、斯うしてゐたのも何かの因縁でせうから此儘二人で死ませう、と觀念して居りました。その時、二階の方から「助けて下さいよう!!」と叫ぶ、わが娘の聲が聞えて來たのです。その一聲でフトわれに立返つた母親は、身を振ひ起して、重なり倒れた器具を突きのけ、手を固めて、壁を突き破つて外に出で、娘を救ひ出しました。娘を救ひ出すか出さないかに、すぐ隣りの家から火が出て、たちまち自分達の家も燒きつくしてしまつたさうです。

美くしい情

こんな事變などがあるにつけ、人の心といふものはよく解るものだと思ひます。

小田原町の山の手に、鏑木千代さんと云ふ、澤山の子供を抱へた夫人が居ります。地震の前日に米屋からお米を取つたばかりの所で、家族の方達の、當座の食料はあつたのでしたが、その白米を震災を蒙つて野宿生活をしてゐる近所の人達に殘らず分けて食べさせました。それから間もなく食料は絕えて、鏑木さんはじめ、近所の家でも殘らず馬鈴薯で命をつながなければならなくなりました。

鏑木さんの分け前を頂いた家に、松長ふみさんと云つて、同じやうに子供を澤山抱へた家族がありました。息子さんが、箱根山を越えて、食料を持つて來たとかで、すぐ鏑木さんに白米二升ほど屆けて寄越しました。夕方、松長さんの子供が用事あつて來た時、千代子さんが、

「今日はあなたのお家でも白い御飯が頂けたのでせう？」とお互ひに喜び合ふ心持で言葉をかけますと、その子供は

「うそ、家では今日も馬鈴薯」と、不滿ともつかない、妙な顏をして居りました。

後で、其日息子が背負つて歸つた二升のお米を、松長家では手をつけずに、その儘鏑木さんの方に讓つたことが判りまして、淚が出る程人間の美くしい性情が感じられたといふことです。

夫と共に

同じ小田原町のことです。本町に近い所に野間さんと云つて母一人に息子夫婦で、さゝやかな暮しをしてゐる家がありました。

息子は、二年程以前に其の妻を貰つたのでしたが、其の當時から、ずつと不治の病ひに倒れて、床を離れることも出來なくなつてしまひました。妻は、その二年越し、他の人の到底及ばない看護に手を盡して來ました。處が大地震の際、その若い妻女は、先づ姑を外の安全な場所に避難させ、激震の續く最中、はたの人の止めるのには耳も貸さずに、再び家の中に引返し、身體の思ふやうに利かぬ夫の身體を抱へて、座敷を踏出さうとした刹那、夫婦諸共に、果敢ない最後を遂げて了ひました。その模樣を聞かれた妻女の實母が、

「あれ一人が生殘つたとしたら、私は世間に合せる顏がありません。それでこそ、私が育てた甲斐がありました」と云つて、淚をはらはらとこぼしました。

焦熱地獄を巡る

藤澤清造

　私が吉原へいつてきたことは、雜誌「改造」へ書いた通り、私自身から進んでいつてきたことなのだ。だがつぎの——つまりこゝへ書く被服廠ゆきは、まるでそれとは違つてゐた。いはゞこれは、人から頼まれるまゝに、餘儀なくいつて來たのだといつても好いのだ。といふのは、私のゐる宿の親戚で、本所の森下にゐた者があるのだ。これが、一日の正午ちかくの地震にあふと間もなく、すぐ近所からでた火に追はれて、着のみ着のままで、越中島は商船學校のまへの糧秣廠へ避難したのださうだ。で、そこの主人が、家族をそこにおくにも、

「俺はちよつといつて、火を見てくるから、みんなこゝを動くぢやないぞ。」といひ渡して、元きた路を引きかへしたのださうだ。暫くいくと、火は阿修羅王のとち狂つたやうになつて、目にもとまらず燃えうつつてくるから、それを見ると、彼は慌てふためいて引きあげてきたのださうだ。きて見ると、どうして何處へいつたものか、もう家族の者はそこにはゐないのださうだ。それから、雲霞のやうに群つてゐる避難民の間を、掻きわけ掻きわけして探し廻つたのださうだけれども、さういふ場合だから、探す家族の者は、どこにゐるのか　皆目分らないのださうだ。

　さうかうしてゐる中に、風にのつて燃えうつつてくる火は、もう糧秣廠を燒き、商船學校から相生橋までも嘗めつくしてしまつたのださうだ。その間彼は、工業試驗所横の、生えしげつてゐる葦のなかに身をひそめてゐて、命だけはことなきを得たのださうだ。そして、火が落ちてしまふのを待つて、まだ燻りかへつてゐる燒け跡をぬけて、駈けつけてきたのが私のゐる宿なのだ。

×

明けると、それは三日になる。彼は、夜の引きあけるが早いか、すぐと電のやうに飛んでいつて、越中島一圓をのこらず探しまはつたのださうだが、誰に尋ねる相手といふのは、何處にも見當らないのださうだ。そして、その次の日だ。この日も彼は、早朝から宿をでゝ、心當りといふ心當りを、洩すなく探してみたのださうだけれども、それは落したこともない物を探しまはつてゐるやうに、何處にも見えないのださうだ。

暗くなつてから、やうやく歸つてきた彼は、

「どうも、灰にしてしまつたらしうございます。」といつて、長い吐息をもらしたかと思ふと、すぐ詞をつづけて、「みんなを殺しておいて、わし一人生きてゐるのが、濟まなくなつてきます。」といつたが、それなどはもう涙にぬれそほつてゐた。

また彼は、別れしなに、四つと九つになる二人の子が、彼をつかまへて、しきりと飯をねだつておかなかつたといふことを語つたあとで、

「これも定まりごとなら、わしも諦めますが、たゞわしは、同じ殺すにしても、あの二人の子供に、腹のやぶけるほど飯をくはしてから殺してやりたうございました。」といつて、またも涙をこぼしてきた。

見たところ彼は、いかにも精悍さうな容貌をしてゐるのだがしかしこの時ばかりはまるで、打ちひしがれた藁でもあるやうに悄氣かへつてゐた。それだけに私もまた、それらを見聞きしてゐると、溜らない氣持ちになつてきた。

それがどうしたのかその翌日だ。彼は朝おきると、もう汽車でもつて、國へかへつてしまつたのださうだ。──彼の國は、越後は新潟なのだ。

「もう仕方がありません。國へかへつて、葬ひでもしてやります。」

彼は立ちしなにかういつて行つたさうだ。

×

その日は私は、「死の舞踏」の休む間をぬすむやうにして、ちつとばかりうとうとして目をさましたのは、五日の正午頃だつた。それから、私が下へ目覺をおこしにいくと、そこで出會つた宿のかみさんが、そのことを私に聞かしてくれた。

ところで、この日もよう暮れてしまつてからだ。幽靈のやうにして、私のゐる宿の玄關にたつた一人の男が、

「ちよいとお聞きしますが、こつちらへ本間さんがお見えになつてゐらつしやいますか。」といふのださうだ。で、そこにゐた女中が、

「えゝ、本間さんは今朝ほどお國のほうへお歸りになりましたが……」といつて挨拶すると、その男は、かさねて、
「皆さん御一緒にですか。」といつて聞くのださうだ。
「いゝえ、旦那お一人です。」
女中も相手のいひぐさが變なところから、これはどうしたことかと思ひながらかういつたのださうだが、それが切れるか切れないうちに、
「ほう、旦那が生きてゐらつしやいましたか。」といつて、驚きの聲をあげたあとから、「では、おかみさんやおつかさんは、まだこちらにゐらつしやるんですか。」といふのださうだ。
こゝまでくると、女中はもう自分の目のさきへ、白刄をつきつけられたやうな氣持ちになつてきたさうだ。だからかの女はひとりでに、そこの後は茶の間になる、その方を振りかへつてみたのださうだ。
すると、そこに煙草をのみながら、それまでの始終を聞いてゐた宿のかみさんがそれへ出てきて、
「あなたは誰方でござんす。本間さんは、一日の日におかみさんやおつかさんとは、越中島の糧秣廠のところではぐれたのださうですが、それからは昨日も暗くなるまで、處處方方と、心當りといふ心當りをお探しになつたのでござんす。ですが、幾くら探しても、皆目行方が知れないものですから、これはきつと燒け死んぢやつたんだらうとおつしやつて、今朝ほどお國のほうへお歸りになりましたが……」といふと、その男はちらりと煙草の煙でよごれてゐる歯をだしたさうだ。そして、
「さうでござんすか。私はすぐ本間さんの近所の者ですが。」といつて名乘つてから、「それならまだ、本間さんのおかみさんやおつかさんは、小さい方達と一緒に、越中島のほうにゐらつしやるんでせう。私は火がきえてから、商船學校のまへで、皆さんにお會ひしました。その時に皆さんは皆さんで、旦那のことを案じてゐらつしやいました。おかみさんは「うちの人は男ですから」とおつしやつてゐらつしやいましたが、しかし、大變に皆さんが、旦那のことを心配なすつてゐらつしやいました。」といふのださうだ。
なんでもその男は、不斷に本間の主人が、
「わしの親戚が、根津の權現前にあります。そこは、下宿屋をしてゐるのです。」といふのを聞いてゐたのだ。そして、今度自分達が谷中へ立ちのいてきたのを幸に、もしや本間の家族も、こつちへ見えてはゐないかと思つたところから、尋ねてきたのだといつて、間もなく、その男は歸つていつたさうだ。
それから、私のゐる宿は、にはかに電氣がついたやうになつ

てきたのは事實だ。それと、こゝで斷つておくが、本間といふのは、私のゐる宿の親戚の名なのだ。

×

その夜宿の者は、洋服のはいつてゐた本箱を二つみつけてきて、それでもつて、大きな旗を四本こしらへた。無論それへは求めてゐる相手の姓名を、思ひきり筆太に書きつけたのはいふまでもない。

また、その殘りの紙でもつて、これもかなりに大きな喇叭を二本こしらへた。宿の者達は、夜があけると、それを持つて、本間の家族をさがしにいかうといふのだ。

×

私はその夜また夜番をしてゐたのだ。その中に夜がしらんできたから、自分の部屋へかへつて、これからは床へはいらうとしてゐるところへ、下から女中がやつてきた。――それは、前の夜から、好ければ私も、明日は皆といつしよに、探しにいつてもいゝからといつて置いたところから、下では私をも誘つてくれたのだらう。女中は、

「濟みませんが、藤澤さん。あなたにも行つていたゞきたいのですが……」といふのだ。だから私は、顔も洗はずに、そのまゝ皆とつれだつて、宿をとびだしたのだ。

なるほどその時の私の體はくたびれてゐた。もし止していゝものなら私は止して、一時も多く眠りたかつた。がそれと同時に、私はさうした一行にくはゝつて、行き方の知れない人達をさがしあてゝ見たいといふ氣持ちも、なかなか盛んに動いてゐた。だから、莫迦々々しいといへば莫迦々々しいことを、私はあへてしてのけたのだ。そして、私が自から進んでゝはなく、人から頼まれて、餘儀なく被服廠のまへに立たせられたのだといつてもいゝのだといつたのも、畢竟するところは、この點にさしていつたのだ。といふのは、この歸り路に、私は被服廠へよつてきたからだ。

×

私達同行五人は、まづ大川を渡しで、越中島へつくと、商船學校の燒け跡はもとより、その裏手になる、水產講習所のなかを、口では喇叭を吹きながら、鵜の目鷹の目になつて、殘らず探しまはつたのだ。またそこの陸軍用地なのか、廣い明き地になつてゐるところに、これも燒けたトタンでもつて圍つて、避難してゐる人達のなかをも、隈なく尋ねまはつてみたのだ。だ

が、どこをどう探してみても、私達の求めてゐる人達の影も形も見えないのだ。

そのうち宿のかみさんが、

「もう止しませうよ。これだけ探してみてゐなきや仕方ありませんわ。もうこゝいらで歸りませうよ。」とかういふのだ。

正直にいへば、それは私とても同感だつた。もうその時は、そこへ行きさへすれば、此方で尋ねまはらなくとも、先方で歡びむかへてくれるものゝやうに思ひこんでゐた私の心持ちなども、事實のまへに見事裏切られたこころから、私とてもうそれ以上に、手をつくしてみようなどゝいふ元氣はなくなつてゐた。がただ私は、私達だけはそれで好いとしても、宿の主人が今かいまかと思つて、私達のもたらしていく吉報を待つてゐる心持ちになつてみると、どうでも私だけは、そのまゝ引きあげていく氣にはなれなかつた。

それに、前の晩知らしてくれた男のいふことが事實だとすれば、紛ふ方なく本間の家族はみな生きてゐるのだ。それがそれと分らなかつたこころから、本間の主人は、當夜みた火のさかんさと、探しまはつてみて知つた燒死者溺死者の多いこころから、自分の家族も、てつきりそれらと同じ運命に座したものだとのみ思ひつめた揚句が、とうとう國へも歸つていく氣になつただらう。その氣持ち――こゝろ殘ればこそ、なほもそれを振りきつて、歸鄕の途についてしまつた本間その人の心根をおもひやると、私だけは蹉れるまでも、もう一應あたつてみなければ凝つとして居れない氣持ちになつてきた。だから私は、宿のかみさんと、そのかみさんの兄なる人をそこに待たせておくことにしたのだ。そして、私は他の女中二人と一緒になつて、その先に延つてゐる工業試驗所のなかを、ひとわたり尋ねてみることにしたのだ。

だがしかし、當つてみると、そこにも私達の求めてゐる人達の姿形はおろか、その影らしい影さへも見ることが出來なかつた。だから、私はそこを出てくる時には、もうがつかりしてしまつて、歩く元氣もなくなつてゐた。仕方ないから私は、今度は私のはつからして皆を急きたてゝ、ぼんやりとそこを引きあげてくることにしたのだ。

×

それから、これは野邊おくりの歸りではないが、今度は私達はきた時と路をかへて、眞直ぐに龜住町通りのはうへ出てきたのだ。そして、それから後は、電車路にそふて、龜澤町へと步いてきたのだ。

ところで、そこへくるまでに渡つてきた海邊橋といふのが、そこを渡る時にはまた私達は、どんなに膽をひやしたか知れなかつた。何しろその橋は、みごと燒けおちてゐて、跡に殘つてゐるのは、電車の線路と、垂れかゝつてゐるその架空線のほかには、橋のしたへ通されてゐた、これは二寸幅位の鐵材が二本あるのみだつたからだ。私はそれへかゝつた時には、こつちへ來がけに、三間ばかり渡りかけて、餘りの恐ろしさから止してきた、永代橋での出來ごとを思ひだした。

まつたく、その時の不安さ、切なさといつたらなかつた。何しろその橋　ちやうどこの橋のやうに燒けおちてゐて、殘つてゐるのは、これも二寸幅くらゐの鐵材が、各五尺くらゐの距離をたもつて、都合三本かゝつてゐるのみだつた。だから私ははな、そこの袂でそれを目にした時には、私は、私達をそこまで持つてきてくれた自働車の運轉手のことが、何か知らしきりと悔くまれてきてならなかつた。

×

これは、その日私達が宿をでゝくる時のことだつた。前の日に一度本所の被服廠を見物しに行つてきた宿の主人が、殘つてゐるのは兩國橋だけだから、行くときはきつとそれを渡つていくが好いといふことを、繰返し繰返し、私達にいひ聞かしてくれたのだ。やがて私達が、八重垣町の通りへきて待つてゐてくれた自働車、――それは後で聞くと、私のゐる宿の者が、近所の知合から借りてきたのださうだが、それへきて腰をおろすともうその自働車はやけに馳けだしたものだ。そして、上野からさきは、右をみても左をみても、目のおよぶ限りたゞ一面に、灰でもつて覆はれつくしてゐる燒け野原のなかを通つて、萬世橋へでゝきたのだ。がしかし、その時はどうしたのか、當然左へまげなければならない車をまげようともせずに、反つて梶を右にとつたかと思ふと、更にそれを左へと取つて、これも焦土に歸つてゐる日本橋通りを、銀座のはうへと向つて、脇目もふらず逸散に走つてゆくのだ。私はへんだと思つた。

ところでそれが、南傳馬町の四つ角へきた時だつた。そこでぴたりと留まつてしまつた。私はなほも變だと思つた。するとそれへ乘る時に、私達よりも前に一人乘つてゐた男が、こゝで車をおろすと、足を鍛冶橋のはうへと取つていつた。それを見るとそれまで持つてゐた私の疑念なるものがはじめて氷解してきた。同時に自働車は、またも梶を左へとつたのを今度は右に變へ、また左へと取つて、留まつたのが永代の橋袂なのだ。

そこへくると運轉手は、

「やあ、こいつはいけませんね。兩國のはうへ廻しませうか。」
といつたが、しかし、宿のかみさんは、その時なんと思つたのだらうか、
「えゝ、ようございます。此處でおろしてくださいまし。」といふと、その言葉通り自分もおり、また私達をもおろすと、もうそこから自動車を歸してしまつた。がいけないのはそれから後なのだ。

×

私達が橋のそばへきて見ると、そこには十人ちかくの人夫達が、積みかさねた板に背をもたせて立つてゐた。そして何かしきりと話合つてゐた。
「どうします。こゝを渡しますか。」
私はこの時、かみさんに向つてかういつたのだ。――こゝを渡すといふことは、慣れぬ綱渡りをするも同じだつた。だからさう思ふと、私のこゝろは震ひあがつてきたが、それを内にひし隠して、目でもつてそこの鐵材をさし示しながら、かういつたのだ。すると相手は、
「仕方ありませんわ。渡りませうよ。」といふのだ。
そこで私は、まづ一人の女中の手から、四合壜を一本とつてやつた。それは私達が途中の用意のために、中へは水を一杯つめて持つてきてゐたものなのだ。それを手にすると、私はまつさきにその二寸幅の方へやつてきたのだ。とそこへ、
「おい、いけねえ。いけねえ。」といふ聲が私の耳へついてきた。それは、そこにゐる人夫の一人が、私を呼びかけてきた聲なのだ。
で、私は耳をその方へ假しながらも、一方目をば、薄氣味わるく濁つてゐる川の中へ持つていつてゐたのだ。がそれはいきなり、槍でもつて、突きさゝれたやうになつてきた。何故といふと、そこには私が前の日に、吉原病院の池のなかで見てきたも同樣の死體が、男女とりまぜて二十人足らずもゐたらうかそれが型のごとく、腐敗しきつた眞桑瓜のやうになつて、流れただよつてゐたからだ。私は、これはいけないと思つた。がしかし、乗りかゝつた船なら、どうでも向うまでは渡さなければならない。さう思ふと私は、出來るだけ慇懃な態度でもつて、今しがた私に聲をかけてきた一人の人夫のはうへ向つて、ことの入りわけを訴へてみたのだ。
訴へられると、その人夫も流石に氣の毒になつてきたのだらう、彼は、
「ぢや、早くしねえなあ。おいらはこれから、こゝへ板をつけ

るんだからなあ。」といつて、これを最後に私達を、それでも案外快くゆるしてくれたのだ。

×

それから私は、右手に櫻はにぎり太のステツキを持ち、左には一本の四合壜を持つて、その二寸幅の前へきて立つたのだ。そして、何氣なく目をあけて向うのはうを見てみたのだ。すると、その時は火のやうになつてゐた私のこゝろ持ちも、遠くほやけて見える向う岸と打つかると、それはちやうどホースの水でも浴びせかけられたやうになつてきた。私は、これはかなはないと思つた。

がさらに、もう一度目をそこへ持つていつてみると、ちやうど向うのはうから、それはもう橋の中程だつたが、そこへ一人の男が、身もかるがると輕石のやうにして、こつちへ渡つてくるのに出會した。それをよく見るとその男は、肩へ自轉車をのせてゐるのだ。その時だつた。私は失ひかけた氣力を取りかへしたといふのではない。なかば私は捨てばちな氣持ちになつてきた。でさうなると、後はもう無我夢中でもつて、私はそこの二寸幅を渡りだしたのだ。

×

がいざ歩きだしてみると、やつぱりいけないのだ。──私はこゝろの中では、出來るだけ身を輕く持つて、一氣に渡りをうせて見せようと思つたのだが、渡りかけてみると、第一に足が芋苗のやうになつてくるから弱つたのだ。仕方ないから私は、今度は出來るだけこゝろを落ちつけて、なんのことはない足は尺取り蟲のそれのやうにして、出來るだけ靜に運んでいつたのだ。

ところへ後のはうからして、

「えゝ、間拔けな野郎だなあ。さう足元許りを氣にせずとよ、もつと前のはうを二三間前の方へ目をつけて歩けば歩けるのになあ。」といふ聲が、その結びめに舌皷をうちつけて、私の耳へはいつてきた。だが私は、この場合さういふ忠言に、こゝろを傾けてゐる餘裕などは持つてゐなかつた。反つて私は、さういはれゝばいはれるほど、なほも足元へばかり目をつけながら、例によつて尺取り蟲のそれを極めこんでくると、そこに小さな釿の頭の出てゐるのが目についてきた。と思ふがはやいか、哀れにも私の足はもうどぢを踏んでゐた。がその刹那には、私はもう自分の意識をなくしてゐた。それはちやうど、一日の正午頃にみた、あの激震當時と同じだつた。そして、私がその失つた意識をとりかへしたのは、それから物の十秒ち經つてからだ

つた。

で、その時だつた。私が自分にかへると

「だから、いはねえこつちやねえぢやねえか。一階のこと手前のやうな間抜けは、川へおつこつて死んぢまいねえ。下へはごつさりお迎へがきてらあなあ。」といふ聲がしてきた。そして、それと相前後して、長く引く息のしたから、

「あゝ、びつくりした。止しませうよ藤澤さん、歸つて頂戴な。」といふ聲がしてきた。これは斷るまでもなく、前者は人夫の口からでたものであり、後者は宿のかみさんの口から出たものなのだ。

　それを私は、併せて聞いたものゝ、しかし私は、一方の人夫へ對しては、なんらの反感も持てなかつた。たゞその際にあつたものは、宿のかみさんの言葉に對する感謝の念のみだつた。

　やがて私は、自分の向きを變へたのだ。――まるで、陸へあがつてゐる、軍艦でも動かすやうにして、私は自分の向きを變へたのだ。そして、この時もまた何氣なく、私は自分の足のしたになる水のうへへ目を持つていつたのだ。するとそこに私は火を見るやうにはつきりと、死の影の踊つてゐるのを見た。同時に私は自分のこゝろの中で、白刃を井桁にとりくんだ中へ首をさしこんで、震ひあがつてゐる自分の姿をも見た。それに氣をとられてしまふと、元の岸までへは、三間あまりもあつただらうか、そこへ足を運んでゆく元氣も私にはなくなつてゐた。

　それをどうして引返してきたものか、物の五分間もすると、それでも私は、もうそこの岸についてゐた。私は、土のうへに立つてゐる自分をみた時には、いきなりそこへ突つぷして、口附してやりたくなつた。

×

　ところで、危險だつたのはこればかりではない「一難の經れば一難きたる」といふ譬通り、相次いでまた、渡し船といふものが立ちあらはれてきて、それがまた、どんなに私達の胸をおびえさせて行つたか知れない。

　橋を渡りそこなつた私達は、今度はそこに突つたつてゐるポリスを捉へて、橋をよそにして、向う岸へ渡る方法はないものかといつて聞いてみたのだ。するとポリスは、それは船でいくのだ。もう暫くすると、向ふ岸から渡し船がやつてくるからといつて、親切に敎へてくれた。

　私は、渡し船のくる間、そこいらに助かつてゐる土藏の数をかぞへたり、または、私達と同じ目的でもつて、そこに座つてゐる人達の口から耳にとりかはされてゐる話に耳を傾けたりし

てゐた。そして、時々向ふ岸からくるといふ渡し船を、まだかまだかと思ふこゝろでもつて見遣る私の目へは、筏でも通つていくやうにして、幾つかの死體の流れていくのが見えてきたりした。

やがてのこと、五十人くらゐは乘つてゐるだらうと思はれる傳馬が一艘、いういうと此方へやつてきた。見るとそれは、私達の待つてゐた渡し船だつた。

で、船にのつてゐた人達は、最前からそこへきてゐた三人の兵卒に護られて、——その兵卒はみな劍附鐵砲を手にしてゐたが、それらの兵卒に護られて陸へあがると、今度は私達の番になつてきた。

私が船へのつたのは、かなり殿りだつたが、さて船にのつてそれまで私達が腰をおろしてゐた方の岸のしたを見た時だつた。私はそこでもつて、またも形容に絶した衝動をおぼえた。

×

そこへ打ちあげられてゐた死體は、七つばかりもあつたださう。だがしかし、それは形においても、また數においても、少しも私には珍らしくはなかつた。ただ私が異様におもつたといふものは、その中の若い男女の死體だつた。この二つの死體は、ものは兵兒帶なのだらうか、鼠色した切れでもつて、堅くかたく結びつけられてゐた。それを見ると私は、この世における最もうつくしいもの、最も、盛んなものを見た時とおなじやうな感激をおぼえた。と同時に、この世における最もいやしいもの最も憎むべきものを目にした時のやうな反感をおぼえた。そして、それこその中に、もう渡し船は岸をはなれだした。そして、それが段段と川眞中へでてきたと思つてゐると、そこへ出しぬけに「おい、あぶねえ。あぶねえ。重舵、重舵……」といつて怒鳴る船頭の聲がしてきた。と思ふと、それまでは殘らず、そこへ腰をおろしてゐた乘り手が、一齊に持ちあがつたから溜らない船はその(惰)勢を食つて、左右へ動搖しだした。私はどうしたのだらうと思つてゐると、その時川上から走つてきた蒸氣船が一艘私達の船の後を、擦れずれにして拔けていつた。とその餘瑞に、やけに大きな波のうねりがやつてきた。そして、それを受けた私達の船は、さらにはげしく、前へ後へと動搖しだした。私がその刹那の恐怖、これも私には忘れがたいものだつた。私が船から陸へあがつた時に、またもそこの地上へ突つぷして、口附したくなつたのも、これはみな、その恐怖からのがれた嬉しさがあつたからだつた。がそれらがこの時、——私が擁護(?)を渡つてくる時に、しみじみと私のこゝろへ上つてきたこちやう

ごそれは、麻縄をみるやうにして、――永代橋上のできごとや渡し船での遭遇事が、そこで一つになつて、私の胸をしめあげてきた。

×

それから、驚いたのはやうやうの思ひでそれを渡して、高橋へきた時だつた。そこの橋の袂では、私が吉原がへりに、厩橋ちかくに見てきたやうな死體が幾つか轉つてゐた。わけて悲しかつたのは、その中に四つばかりも、子供の死體が交つてゐたことだつた。

また、橋のしたなる水のうへには、男女幾十人かの死體が堪らない匂ひを漂はせながら浮んでゐた。そして、ここでは堅く背中へ嬰兒をゆはえつけたままに、溺れてゐる女を見た時には私のこころはまた、涙でもつて包まれてきた。

×

ここを離れると、もうつぎは森下だつた。宿のかみさん達は探しあてられもせずに、空しく引き揚げてきた本間一家の住んでゐた家の跡を、ここかしこかといつて尋ねてゐたが、しかしそれもはつきりとは分らないやうだつた。

それはさうと、私がこのあたりへきて氣づいたことは、人と車との、その往來のはげしさだつた。それはどう贔負目で見ても、正氣の人間や、それらの人間の手に依つて、囘轉されてゐるもののやうには見えなかつた。

車は自轉車もあつたが、その多くは自働車だつた。それがみな氣の狂つたやうな迅速さでもつて、左右に駈けちがつてゐるのだ。私はそれを見ながら、今にもパンクしないか、今にも衝突しないかと思つて、どんなにはらはらしたか知れなかつた。

同じことは、またそこを歩いてゐる、多くの人達についてもいふ事ができた。

これは一つは、皆がくたびれてゐるところから來てゐるのだらうが、彼等の片一方の手はゐねむりをしてゐた。そして、もう一方の手は、それとは反對に、活氣を横溢させて動いてゐた。そして、これは手のみではなく、その足だつて同じことだつた。ただこれらと違つてゐたのは、その顔面だけだつた。

それはまた、ながく氷漬にでもされてゐたやうに、筋肉といふ筋肉、神經といふ神經は、極度に内へ引きしまつてゐた。それに色だ。これはまた、ながく水のなかに晒されでもしてゐたやうに、大抵は蒼白くなつてゐた。また目は目で、それはちやうど獸のやうに、瞳孔はやけに大きくなつて、黒く底光りにひ

かつてゐた。そして、その眼瞼は、子供のもてあそぶ折り紙のやうに、三角になつたり、四角になつたりしてゐた。恐らくは彼等はこの場合、誰か誤つて打つかりでもしようものなら、きつと物をもいはず、直ぐと張りたふしてしまつたことだらう。どうやら私にはさう思はれてならなかつた。

×

で、私がこの光景をみて、さらに思つたことは、「修羅の巷」といふことだつた。さうだ。これはそれを外にしては、到底他にみることの出來ない闇だつた。

正直にいふと、私はそこを通つてくる頃は、もうかなりに草臥てゐた。——連夜の睡眠不足と、この日はまた、かうして歩きとほしてきた所爲からでもあらう。私はもう足をあげるのさへも懶くてならなかつた。それを忍んで、私が倒れもやらずなほ歩みつづけてきたといふものは、一つは私の内にいきり立つてゐた、心の働きからきてゐたのはいふまでもないが、同時にこれは、かうしたここの空氣があづかつて、大に力あつたものだと私は思ふ。それほど私には、ここの光景が恐ろしかつたのだ。

その中氣づいてみると、そこはもう遊廓町だつた。この時宿のかみさん達もまた疲勞を感じてきたのだらう。ここで一休みしようといひ出した。そして、かみさん達は、そこの焼け跡に散らかつてゐる煉瓦をみると、もうわれを忘れた者のやうになつて、それへ腰をおろしてしまつた。

ところで私はこの時、宿の主人からいひ聞かされてゐた、被服廠のことを思ひだした。思ひだすと私は、そこへ行つてみたくて溜らなくなつてきた。が同時に私には、それを恐れる氣持ちもあつた。といふのは、少し薄れかかつてゐたといへば薄れかかつてゐた四日の日にうけた印象が、さう思ふこころの前でもつて、はつきりその姿をあらはしてきたからだ。そして、この二つの氣持ちが、暫くの間相爭つてゐたが、その中にとうとう見にゆきたいと思ふ氣持ちのはうが勝ちを占めてきた。つまり恐はいと思へば思ふほど、その恐はい物みたさの氣持ちのはうが、勝ちをしめてくることになつたのだ。

それから私は、宿のかみさん達へこの事をはなして、被服廠のはうへやつてきたのだ。——「私はこれから、ちよつとそこの被服廠へまでいつてきますから、皆さんのお疲れがやすみましたら、どうぞ先へいらしてくださいまし、路は一筋ですから、私はすぐと後からおつつきます。」

私は、宿のかみさん達にかういつて置いて、被服廠のはうへ

やつてきたのだ。

×

その途中でまづ私は、自分の首につけてゐた手拭の端をとつて、それでもつて、一段とかたく鼻をおさへることにした。というのは、私は吉原の死の池地獄のことで、さうだ。あすこの死の池地獄のことで、散散に懲りてゐたからだ。

で、鼻のことはもうそれで好かつたが、しかし、どうにも出來ないものに心といふものが殘つてゐたから、歩いてくる中にも、なんだかかう、氷室のなかへでもはいつて行くやうな氣持ちがしてならなかつた。がしかし、それでもつて、本當にいやだといふなら、はなから來ないことだつたなどと思ひながらやつてくると、そこはもう房總線のガードの下だつた。それを拔けて、少しくると、謂ふところの被服廠まへになるところに、幅はあれで四尺もあらうか、一筋の溝があつた。その溝のなかに、窒息して斃れたのだらう、幾人かの死體が横たはつてゐた。そして、それらも矢張り、二目とは見られないまでに、醜くもまた痛ましい容貌姿態をしてゐた。それをそつと横目でみながらやつてくると、そこにもまた奇怪な容態をした死體が座つてゐた。

ここの溝は、幅四尺くらゐあることは、今いつたが、これはそれを横に、おひだ二間ばかりといふものを、目白押しに押しなゝんでゐたから驚いたのだ。——なんでもそれは、四人づゝ並んでゐたやうだつた。そして、それは皆雛演堂でみる雛演のやうに、前列よりはその後列、その後列よりはその後後列といつた風に、後になればなるほど、首だけをうへへ高くのぞかせてゐるのだ。

斷つておくが、溝はおなじ溝つづきでも、これは前のとは違つて、みな全身黒焦げにこげてゐるのだ。だから、白いものはといへば、それは口のなかに殘つてゐる齒ばかりだつた。從つてそこには、性の差別、老若如何なども判斷出來なかつた。少くとも、私にはさうだつた。

これを見ながら私の思つたことは、何處をどうしたら、この人達は、かうした溝泥のなかで、しかもそれが座つて四人縱列しながら燒けたかといふことだつた。みな顏を、通りのはうへ向けてゐるのも、なほと私に、私のこの疑ひをこんがらかしてきた。

×

それからだつた。私がそこを離れてくると、もう私の眼前へかねて豫期してゐた、恐ろしいといへば恐ろしい光景が展開さ

れてきたのは。――

見るとこれもやはり、性の差別や、老若如何となども、容易に判断することの出來ないやうになつた燒死體が、ちやうど腐つた茄子でも敲きならべたやうになつてゐた。そして、この死體の姿かたち、例へば、それが俯向いてゐるのか、または仰向いてゐるのかなどといふことは、纔に齒牙の有無や、指先の向き不向きに依つて判ずるより外には、どうにももう手のつけやうがないやうになつてゐた。

×

さらに驚いたのは、これらの數の多いことだつた。一體ここには幾人ゐるといふのだらう。見渡したところ、ずつと向うの端にたつてゐる者の姿が、まるで子供のそれのやうになつて見えてこようといつた程に、それは廣くて大きいのだ。この間をべた一面、それでもつて埋つてゐるのだから驚くのだ。

で、さういつた風だから、これが通りちかくに並んでゐる者はいい。それは少くとも、私達の目には、ひどく變つてはゐても、しかし人間の燒死體としては見えてくるから。だが、そこから三四間ばかりも先のはうのになると、それはもう人間だか獸だか一向に分らなかつた。だから、いつて見るとそれは、まるでそこに積みおかれてある、一塊の石炭ででもあるやうにしか思はれなかつた。

まつたく、そこの廣大さと、そこに斃れてゐる死體の數多いのには驚いた。そして、それを見てゐる中には、いろんなことが考へられてきた。

まづ私が、ここでもつて思ひだしたのは、吉原のことだつた。吉原の死ヶ池地獄のことだつた。だから私は、それをこの焦熱地獄のまへへ持つていつて、この二つのものを見比べてみたのだ。ところでまた、さうして見て私はおどろかされてしまつた。といふのは、この二つの物は、地震をうちへ包みこんで、烈しく燃えさかつてくる火なるものを背景にしてゐる點 同一だつたが、しかしそれを外にしては、他は殆んど比べ物にならないくらゐに相違してゐたからだ。

×

まづ第一に、この二つの物は、悽愴さまたは醜惡さにおいて違つてゐた。この點はなんといつても、ここよりは吉原のはうがどんなに勝つてゐたか知れなかつた。そして、私のみたところでは、これは一に、火と水との相違からしてはじまつてゐるもののやうだつた。

例へば、吉原のそれは、極度に私達人間の持つてゐる醜惡さなるものを、外へむかつて曝露しつくしてゐた。それに比べると、ここのは、それとは全然反對にといひたいまでに、それは殘らず内へ内へと向つて消滅しつくしてゐた。もつとこれを分りやすくいへば、前者は、あくまで水死した者だけに、その形體は、絕息後もなほ依然として、生前同樣に保たれてゐるのだ。がそれが、その後に時間の經過なるものを受けると、俄然として、そこに一大變化をきたしてくるのだ。例へば、全身の浮腫だとか、その皮膚の色素分解だとか、ひいては脫腸、睾丸膨脹などといふ、醜惡無比な變化をなしてくるのだ。

ところで、後者はといへば、それは既に火にかけられて、後はもう性の判別さへもつかないやうになつてゐるのだから、これはその後に幾くら時間の經過があつても、微塵とここには變化らしい變化も起つてはこないのだ。つまり後者は、燒れたが最後、もうそこには、變化を起したくとも、それを起すだけの材料なるものをなくなしてゐるから、所詮はできない相談なのだ。それにこれは、前者とは違つて、あくまで水中ではなく、地上に終始してゐるといふことが、どんなにこの變化作用から逃れてゐたか知れない。從つてそこには、これもまた前者とは反對に、見る者をしてなんら顰蹙させるがものは持つてゐなかつた。

×

またこの相違は、兩者の死體から發してゐる臭氣についても同樣だつた。

例へば、前者のそれは、一旦これが鼻にするが最後、こころは直ぐと、「死の舞踏」をやりだしてきた。ところでこれが後者のになると、なるほどそこには、飽迄「死」なるものを思はしめるものはあつたけれども、それが直ちにこころの中まで忍びこんできて、舞踏をやらせるだけの力は持つてゐなかつた。

つまり、後者のそれは、烈しさにおいて微塵前者におとらないものがあつたとしてからが、その底には、松脂ほどの粘り力を持つてゐなかつた。だから、その點からいへば、つまり、これを時間のうへからいへば、もうそれは前者の敵ではなかつた。ましてそれが、烈しさにおいても、前者に比して、多分の引け目を持つてゐたから、これはとても勝負にならなかつた。

×

それからまた、かういふことも、そこに見ることができた。例へば、炎炎として燃えさかつてくる火の勢ひや、それから生れてくる火の粉などは、後者の方が、前者のそれよりは、一段と烈

しいものがあつたに相違ない。したがつて、それに卷かれたり、また、それを浴びたりして、そこに立ちさはいでゐる群集の有樣や、同時に、その群集の口から叫ばれてゐた悲鳴のさかんさなども、屹度後者のはうが遙に前者を凌駕してゐたに相違ない。

だがしかし、それでゐて不思議なのは、その慘憺たる光景も何か知ら私の目には、落ちゆく日の影でも見るやうに、ひどく褪れてみえたことだつた。あるひはこれを、物の厚薄さや、事の強弱さなどではなく、時間のうへにおいて、甚く短かつたといつても好い。とにかくそれは、同じ懊惱さであり、同じ悲慘さではあつても、何か知ら私には、かう影のうすい、謂はば擦へものといつた風にしか感じられなかつた。少くとも、吉原の死の池地獄の狀にくらべていへば勝にさうだつた。そして、つまるところはこれも、數において眞に驚くべきものがあつても、そこに斃れてゐる者の形體上に、微塵それらしい表現が殘つてゐなかつたといふことが、——殘つてゐなかつたから、見ることが出來なかつたといふことが、私をして、かういつた風な考へを起させてきたのではあるまいかとおもふ。

それにしても、恐ろしいのはここに死んでゐる者の數だつた。これに比べると、吉原のそれなどは、九牛の一毛にも如かないといひたい位のものだ。で、目のおよぶ限り、ただ一面に積みおかれた石炭のやうにも見える。その燒死者の群を見てゐると、私はまたそこに、それまでのとは全然違つたべつな感じを強ひられてきた。

×

それは、天變地異の持つてゐるその力の偉大さといふことだつた。そして、それに比べていへば、その間に介在してゐる私達人間の微少な、無力さといふことだつた。

それを、何時までも凝つと嚙みしめるやうにして考へてゐると、そこへ、これら二つの物の持つてゐる味のやうにして考へられてきたのは、これら天變地異に對する、豫防策如何といふことだつた。

それからまた、かういふことも考へられてきた。——それは都市經營法についての、種種の獻策だつた。その中には、見るからに美しくて涼しい幾つかの噴水もはいつてゐた。また、そこいら中を一面に、鬱蒼たる樹木でもつて覆ひつくしてゐる、廣い大きな公園もはいつてゐた。それを私は、一心になつて考へてみたのだ。

といふのもこれは、謂はばそこの石炭置き場の樣子から、といつては分るまい。つまり、見てゐる中には、ひとりでに目も

かすんでこようと思はれるまでに廣い、ここの被服廠のなかには、以前からして唯の一本も、樹木らしい樹木が植ゑられてゐなかつたのを私は知つてゐたからだ。その沙漠のやうな構内へ火を逃れたさの一心から馳集つてきた多くの人達があれば、それに依つて、幾分降りかかつてくる火をもさへぎることが出來ただらうに、その用をなす樹木らしい樹木が一本もなかつたところから、それらの人達は、むざむざとつきぬ恨みを呑んで燒かれていつてしまつたのだらうと思はれるにつけて、私はかういつた果敢ないことまでも考へさせられたのだ。

とにかく、ここの廣大さと、そして、燒死者の多數だといふことが、それまでに私がただの一度も、考へ思つてみようともしなかつたことまでを、切に思はしめてきたことだけは事實だつた。がしかし、氣がついてみると、私はさうして何時までもそこに立つては居れない體なのだ。きつと、宿のかみさんをはじめ、皆の衆が待つてゐるだらう。さう思ふと私の足はもう向きを變へて、元きた路を歩きだしてゐた。

×

ところでこれは、私が十足ばかりも歩いてきたかと思はれる時分だつた。私のうしろのはうで、

「こん畜生、何をしやがるんでえ。篦棒め。」といつてゐる聲が聞えてきたから、私は何氣なく振りかへつてみたのだ。すると筒袖にできてゐる、白地の浴衣をからげたその下から、キヤラコの猿又が見えてゐるようといふ拵へをした一人の男が、いきなりそこに立つてゐた、寫眞機を蹴飛ばしてしまつた。と同時に

「そん畜生を、蹴殺しちまへ。」といふ聲がしたと思ふと、そこにゐ合した人達が、髮のながい、白地の洋服を着てゐた一人の男を目掛けて取りまいてしまつた。私は背伸びをして見たが、しかし、洋服着の男は、群集の蔭になつて見えなかつた。それが焦熱地獄のまへに行はれたことだけに、一種異樣な恐怖を私のこころへ與へてきた。

×

で、私は龜澤町の角へくるまでは、半夢中だつたといつても好かつた。やうやくそこへくると、本當の自分にかへつてきたから、私はこころを定めて、宿のかみさん達のゐたところを見たのだ。ところで、そこにはもう影も形もみえなかつた。

それから私は、足をはやめて歩きだしたのだ。そして、そこの國技館ちかくへきた時だつた。そのはづれを、歩いてゆく人

達の頭のうへから、「本間ノブ」こいふ姓名を書いた、大きな旗が四本、それは宿のかみさん達の持つてゐるものなのだが、それが動いてゐるのが目についてきた。その時私はまた、何か知ら涙ぐましい氣持ちがしてきた。そして、これはそれを見てすこし落着いてきた所爲からだらうが、その時私はまたそこいら一面に流れてゐる空氣の、その凄さおそろしさを感じてきた。

見るこ、そこの電車の軌道のうへは、自働車も不斷は荷物を運んであるく自働車でもつて、殘らず埋つてゐたこいつても好いくらゐに、多くの自働車が集つて驅けてゐた。皆それらの自働車は、箱の横へか、もしくは上へたててゐる白布の旗へ、「警視廳」だこか「市役所」だこか、または「赤十字」などこいふ目印を書いてゐた。その自働車こ自働車の間へは、自轉車、オートバイなどが、これも風のやうになつて走つてゐた。

それから、左右の人道はもこより、これが不斷なら、車道になつてゐるそこも、歩かうこ思つても、歩けないくらゐの多數の人が歩いてゐた。それが皆、目ばかりをひからして、右往左往してゐるのだ。まつたくそれは、物凄いくらゐのものだつた。

私はこれにちかいものを一度高橋を渡つてからこつちで見たことがある。だがしかし、それとこれこは比べ物にはならなかつた。向うの烈しさを、此方に比していへば、それは、五分の一、もしくは十分の一にも當らないほどのものだつた。そしてこれが兩國の橋のはうへくればくる程、だんだんこ色濃くなつてゐるのだから、私は驚いたのだ。

これは、私がそこの橋へかかつてから知つたのだが、橋のうへでの音響の凄さこいつたらなかつた。すこし誇張していへばそれは直ぐこ、一日の日の激震當時を思はしめるに足りるやうな物凄さだつた。

それに驚いたこいへば、この橋のうへには、幾人かの兵卒が眠つてゐたことだ。――兵卒は、人道こ車道こを仕切つたその境目のところへ、エツキス形をして立てられてゐる鐵材へ寄りかかつて、安らかに眠つてゐた。恐らくは、綿のやうに疲れきつてゐる彼等の耳へは、おなじこの橋のうへでの音響も、一向に響いてはこないのだらう。

私は橋こいへば、何を措いても、此日の朝がけに出會した永代橋でのそれを思ひださなければならないのだが、しかし、此時ばかりはどうしたのか、それらしいものの影さへも、私の心へはのぼつてこなかつた。ただ私に不思議だつたのはいかにも安らかに、そこに眠つてゐる兵卒を私がみた事だつた。そして、私は橋をおりしなに、目をあけてみるこ、またもその先をあるいて行く、「本間ノブ」こ書いた四本の旗が、私の目へついてきた。

罹災者の情況と婦人團體の活動など

澁谷のぶ

どぶだめに猫や鼠が轉つてよく死んでゐるが、私はいつでも人間の死といふものも、あの猫や鼠の死と一寸も變らないもので、人間の死ばかりが特別美的で深刻なもののやうに見るのはをかしい自惚だと思つてゐる。葬式の花とか、喪服とかいふやうなものは、餘計な裝飾で、人間は生きてゐる間は出來るだけしつかり生きさへすれば、死ぬ時には猫や鼠と同じやうに泥溝の中にさらされても平氣だと考へて、餘計な虚僞から超越した人間かもつと澤山出來たらいゝと思つてゐたが、九月一日はさすがに恐ろしく、感銘の深い日であつた。

たつた一搖れか二搖れの、それも長くて僅か十三秒位の間に何處かの地面が六尺とか七尺とか隆起したといふだけで、人間の手でつくつておいた仕事が、物の美事に、滅茶々々に粉碎されてしまつたのだから。そして自然は易々と百七十萬の罹災者を東京市に提供したのは事實だから。おまけに十幾萬の横死者が、腸を出して血にまみれながら死んでゐる鼠以上の無慘な死骸をさらさねばならなかつたのも事實だから。人間の持つ一切の抗抵にも一切の粉飾にも拘泥しないで、自然は何といふ露骨な地膚を見せつけたものであらう。小氣味のいゝ程人間を野犬へ放り出してくれたものだ。

昨日まで持つてゐた、持つてゐれば氣にもなつてゐた家財とか、うるさい書類とかいふものも、綺麗サツパリと燒かれてしまつたのだ。着のみ着のまゝの姿で、燒野原の光景を一々觀つめて歩くと、人間同志が識らず〳〵の間に築きあげてゐた今までの虚僞の厚味が痛い程あからさまに映つてきて、熱い涙が我にもなくこみあげてくる。

大變災後の二日目三日目を、燒け出された姉一家と、友達の安否をたづねるために、私は日比谷から芝公園の附近を搜しま

はつてゐたのである。見るもの、聞くもの、昨日までは人間の心に空想することさへ出來なかつた世界が、不思議な實在を展開して、行く先々に轉つてゐるのを見た。昨日までの帝都の文化は、今日は見渡す限りの焦土と化して、路傍のポプラの梢にも、灰になりそこなつた葉がしよんぼりと焦茶色をつけてゐた。その上を一面に塗りつぶした水際だつた空の碧さ、眞夏のやうた太陽の射返しがジリ／＼と燒野原を照してゐた。鐵を軋る電車の音も急に聞えなくなつた道路を、肩もすれ／＼に右往左往する避難民の群も、山手方面から人を搜しに出た人も、皆昨日まで考へてゐた慾望を忘れるともなく忘れてしまつたやうな顔附に見えた、女は皆襷がけだつた。裾を端折つて白い手拭をかぶつて歩いた。××救護團とはりつけた自動車が疾驅する。非常用の車が走る。塵埃車が罹災者の荷物や女子供を運んでガタガタと通る。皆悲痛な程眞顔になつて歩いてゐた。道行く人はさうであつたが、芝の增上寺の本堂や、日比谷公園に急ごしらへの蒲鉾小屋とか、テント張りで、罹災者ばかりが集つてゐる中を覗くと、そこにはまだ恐ろしい悪夢から放たれたばかりの青ざめた顔が幾百となく寄合つて、瞼のたるんだやうな顔を見合せて、吐息をついてゐた。ひそ／＼と話あつてゐる男達の側に、額に手をあてて荷物の上にうつ臥してゐる老婆もあれば、火のついたやうに泣いてゐる赤ん坊もあつた。その中には近いうちに親戚とか故鄕の家とかへ一先づ落つける人もあるだらうが、一夜のうちに衣食住の三つを失つてしまつた上に、賴りどころもない不幸な人々も多い。血氣な若者はそれでもいゝが、若い間に汗みどろになつて働いておいた金で餘生を送るつもりでゐた老人達はどうするか。父親のない子供はどうなるか。東京市では、罹災民救護のために逸早く活動を開始して、各町區に分れて避難者に對する給米給水などの勞を急いだ。

今日は陛下から罹災民に對して一千萬圓の御内帑金の御下賜があつた。三井も岩崎も五百萬圓を寄附した。持つてゐるものは皆幾何かづゝ出した、明日は大阪から數萬石の食糧が橫濱の港へ着く、芝浦には薪炭料が山と積まれたといふ各新聞の一々の救護報道は當時の罹災者にとつては嬉し涙を流させるものであつたらう。

それにしても人間の生命は刻々をきざむ。百七十萬人の罹災者、五十萬人の失業者(この中には罹災者でない人もある)は、何とか早く糊口の道を搜して、獨立の道を講じなければならない。二日三日と經つうちに、燒跡には急に露店の飲食店が殖えてきた。石炭箱を臺にして牛乳を賣り出す若い細君も出來れば四辻に立つてマスクを賣る可憐な少女も出てきた。

夜は公園のベンチに眠つて明方から燒跡へ勞働に出かける若者も出來た。貰へる間は寢てゐて食つた方が增しだと考へて一日ごろ寢をしてゐる男も出來た。

市の社會局では、失業者救濟のために東京市內に十二ヶ所の職業紹介所を設けたが、一日約八千人づゝの求職者に對して、求人者は二千五百內至三千人平均だといふ。がそのうちにも燒野原の有樣は一日々々目まぐろしい程變つてくる。

燒跡には各所に罹災者收容のバラックが建つことになり、各救護團の活動も次第に內容を備へてきた。併しどうしても忘れることも癒やすこともできない罹災者の痛手は、たつた一夜のうちに父を殺し、娘を傷け、母を亡つたりして魂に彫りついた生々しい血の滲む思ひ出である。九月一日から十八日までに、東京各區に收容した死體の數は五萬九千四十八人だといふが、引取人のないのが三分の二以上もあつた。

着のみ着のまゝで燒け出された罹災者の白い浴衣の裾に秋風が冷かにからむやうになつてくる。昨年までは恐ろしいとも思つてみたことのない霜時が今年の秋ばかりは恐ろしい。わけても淺草、本所、深川あたりの悲慘な罹災者は、燒けのこつた焦トタンを集めて、犬も住まないやうな小屋の中に小さくうづくまつて、早くバラックでも建てばいゝと念じてゐる。隣りより先にバラックへ移りたいがために、わざと哀れ深く見せかけてゐるずるい連中もある。

九月二十三日夜、私は馬場先門のテント村から日比谷村のあたりを歩いてみたが、麥穗秀づる亡國の都を想はせるやうに、燃えおちた丸の內附近の殘骸の上には月の光がほの〴〵と照つてゐた。電燈の洩れる窓もない薄暗い大道の隅には、紅い酸漿提灯を商ふ貧しい老人や女の群もゐた。宮城前のテント村といふのは、五百五十の戶數に三千二百人の人口で、家並を揃へて向ひあつてゐる一つづゝのテントの周りは九尺二間もあらうか。不意にあるテントの中から村中に響き渡るやうな大聲で日蓮宗の題目を唱へるのが聞えた。ふとある感慨と共に私は日蓮尊者のことを思ひ浮べてゐた。

「どうですか。村で喧嘩なんかありませんか」

あるテントの店先でキヤラメルを買つたついでに尋ねてみると、

「いや、決してありません」と菓子屋の親父さんは强く否定してゐた。

「やつぱり給米は每日でせうか」

「えゝ、今のところ一人三合宛です」

「バラックの方へ移りたいとお思ひになりませんか」

「明治神宮のバラックへ移るやうにとお話もあつたのですが、誰も行かうとはしないのです。あすこへいつても商買が出來ないやうな建方で、罹災民同志お互に不自由ですから」

なる程、テント村の中では生活に必要な日用品一切を買ひ集められるだけの商店が細々ながらもつゞいてゐるのだつた。

それから日比谷村の方は戸數九百六十戸に人口五千五百名といふ日本一の大きなバラック村であつて、銀座村、淺草村、上野村、神田村、九段村など、それ〴〵の特徴を備へたバラック村が段々繁昌してゆく。

最近市の調査によると、東京の罹災者百七十萬人の中、府下の郡部に行つてゐる者が六十萬人、完全に郷里へ歸つたものが五十萬人で、あと六十萬人は山の手の殘存家屋の近親者や、各所のバラック其他燒跡の假建築の中に住つてゐて、毎日約三萬人の退京者に對して二萬人の入京者があるさうである。

九月二十四日の東京の寒さは十一月の末を思はせた。暴風雨は夕方になつてから益々荒れつのつて、傘も何も吹きとばされてしまひさうになつた。私は上野の廣小路で傘をすぼめたまゝ雨の中を迷つてゐたが、心をきめて市の臨時救護院にあてられた池の端の博覽會場まで歩いてゆくことにした。受附で聞いてみると、會場全體に收容してゐる罹災者の患者總數は一千名で九月七日開院以後の累計は一千二百三十四名、その中死亡數が六十九名だつたさうである。

大久保病院に傳染病が流行したので、九月の七日にこゝへ移してきたのが始めで、それから深川の岩崎公園、下谷の區役所、上野の自治館、龜井戸の第一第二小學校、博物館、寛永寺、傳法院、東照宮、市ヶ谷及習志野の陸軍救護班、内務省などから續々と患者を收容してきて、今ではこゝが東洋第一の患者數になつたと話してゐた。私は外科と産科とが一緒になつてゐるガラン堂のやうな一室を覗いて見たが、そこには六百餘の患者がズラリと寢た戸板のベッドが、廣い場内の周圍をぐるりと一列にめぐつて、更に中央に長く二列のベッドが並んでゐた。

嵐の中を息せききつて歩いた體にもゾク〳〵する程、廣い場内の隅々から冷い夜氣がしんと迫つてくる中で、顔から頭に繃帶をかけた患者が青い顔をしてジイッと仰臥してゐた。中には下向きになつて講談雜誌を讀んでゐる若い少年もあつた。産婦の寢てゐる方からは赤ん坊の泣聲も聞えた。私を案内してくれた人が、側の女（四十五六）の人に一寸話かけると、その人は色々と身の上をかこち初めた。『生きてゐた方がよかつたのか、死ん

でゐた方がよかつたのか分りません」とも言つた。するとその隣りのベッドに起き直つてゐた二十位の娘も「ほんとにさうです」と答へる。内儀さんは見るからに淡泊で、人のよささうな人だつたが、色々と病院に對する愚痴までも言ひ出して「こちらの端へは一寸も手が届きませんから困ります。お晝の御飯もこちらへは廻つてきませんでした。お藥も頂けません」と言つて御飯の時のに買つてきたのだといふ枕もとの小さな食鹽の小壜を見せた。

「ほんとにお氣の毒ですが、私共も毎日馬鈴薯を食べて、これで三晩も徹夜してゐるのです。しかし追々手が廻るでせう。藥のことも今地方へ賴んでゐるので、東京では今、處々箋を書くにも藥がなくて書けないのです」と案内をしてくれた人は氣の毒さうに答へてゐた。

　ところへ向ふの入口の方から看護婦が、今着いたばかりだといふ眞白い海軍毛布をかゝへて寒さうな患者の胸へかけて廻るのが見えた。

　かういふ救護院の一室にまで、配給の不統一がかこたれてゐて、そのことがどれだけ病人の心を痛めてゐるかを思ふと、私は市全體の罹災民の上にも同じ配給の平等をのぞまずにはをられなかつた。

「内科の患者の中には肺を惡くする人が多くて困るのですよ。大久保の傳染病院も滿員ですし」そんなことも話してゐた。

　今年も九月の末から十月の末にかけて開館する筈になつてゐた博覽會場が、此の秋は何といふものを陳列したのであらうと池の端の薄暗い道を歩きながら、私はこの時こそ、大自然の皮肉な惡戲が妙に胸の底までこたへてきた。

　上野の二科會の附近にズックのテントを張つて、毎日二三十名の櫻楓會員が白い割烹着をきて鍋を二つ圍んで敏活に働いてゐる。元氣な井上秀子女史も殆ど毎日出席してをられる。

　上野の山にむらがつてゐる八千人餘の罹災者の子供（約一千名）を三歲以下と十歲以下とに分けて毎日溫かい晝食と、おやつを與へてゐるのだが　それは市内の罹災者を一々視察したところ、幼兒が殆ど營養不良で腸をこわしてゐたからで、さういふ子供達に營養分をとらせる傍ら、子供をつれてくる母親にも適當な食物のつくり方を教へるのが目的である。一人がよちよち步く男の兒に粥を食べさせてやると、一人は母親が飯を食べてゐる間に、背中の幼兒に乳首でスープを吸はせてやる。御飯のすんだ者には手を洗つてやる、爪をきつてやる。そればかりか、三時頃になると大好きなおやつまで貰へるのだから、上野

の川の子供からは「親切なをばさん」で親しまれてゐる。次に献立表の二三を参考までにあけてみる。（Aは三歳以下の幼兒で、Bは十歳以下の子供である。）

第二日（四百人）

A　牛乳入マッシュドポテトー

　　玉子入オヂヤ

B　白御飯

　　コンデンスミルク入南瓜

おやつ　コンデンスミルクビスケット

第三日（四百二十人）

A　おさつ粥、いり玉子

B　白御飯、スチユー

おやつ　コンデンスミルクビスケット

第四日

A　玉子粥、南瓜マッシユ

B　紅葉御飯

　　鑑と肉とキャベツの煮付

おやつ　御飯と滋養味噌汁

第五日

A　玉子粥

　　薩摩藷マッシユ

B　ごもく飯

　　わかめの味噌汁

材料は凡て市の社會局から出てゐる。尚目白の女子大學では毎日櫻楓會員や在校生が集つて罹災者のために古着の日光消毒や、裁縫に没頭してゐる。上野の兒童擁護も當然一時的なものになるから、此次は何か半永久的な仕事にかゝるつもりで色々考慮中だと當事者が話してゐた。

東京の婦人團體の活動としてはほかに會長の下田女史や本野理事などの差配で、愛國婦人會が熱心に働いてゐる。婦人會は第一に附近の罹災民を本部の家に收容して、それから罹災當日から、三千餘の罹災者に炊出しを初めると同時に、本部内で兒童健康の救護班を設けた。それから内務省との交渉で、先づ第一に子供の着物にとりかゝりたいのだが、その方法にもて除してゐるさうだつたから、本部は早速市内の商店から綿ネルと染絣を大部分買占めて、それを實踐女學校の生徒二百名と、本部の職業相談所の實業部に通つてゐた人、百名とに頼んで縫ひあげて貰ふ。一方には地方の五十支部から慰問や救護に用するものを本部宛に送らせたところ、九月十六日迄に一萬點ほど集つたから、それを東京市内の各警察に援助を頼んで、主に最下級

の罹災民の手に入るやうに配給したさうである。

十六日（上野――三千五百點。淺草――四千五百點）
十八日（深川――千四百點。龜井戸――三百點）
二十日（深川方面――六百點）
二十一日（下谷萬年町――二千四百點。淺草――四百點。深川――五百五十點）
二十四日（本所方面――七千點）

愛國婦人會もひきつゞき救護をつゞけることであらうが、國難に當面した此際にも、唯一人のエレンケイすら、ナイチンゲールすら、見出せないやうな日本だつたらほんとにさみしい。物質的には云ふまでもないが、心の中からも餘計な粉飾をとり去つて、思ひきり女性が美しく氣高くなれる機會が今こそ到來してゐるのだ。美の標準を思ひきり高い處において考へたい。裸身（はだか）になつて質實に考へたい。

婦人團體の活動についてもまだ書殘りがあるが、紙面の都合で一先づ筆をおく。

感心な母親

震原地に近かつただけに、鎌倉町の災害はわけても烈しかつた。長谷の大佛が二三尺前へ辷り出たなどといふ鎌倉の震災の有樣と一緒にこんな話をきかせた人がある。ある若い會社員があわてて自分の家へ歸つてゆくと、家はぺしやんこになつて倒れてゐた。家の周りを搜したが妻と赤ん坊の姿が見えない。（可哀さうにやられてしまつたか！）男泣きに泣きながら木材やくづれた壁をとりのけてゆくと、果して下から腹這ひになつて死んでゐる妻が出てきた。ところがどういふものか赤坊の姿が見えない。どうしたのだらうと思つてゐる矢先、打臥してゐる妻の胸の下からふと赤ん坊の泣聲が洩れてくるのだ。驚いて近よつてみると自分の下に赤ん坊を守りながら若い母親は兩肘を立てたまゝで死んでゐたのである。一人の乳呑兒を助けるのにどんなにか苦しい思ひをしたことであらう。

湘南震災地踏破記

柴山武矩

大船驛まで、始めて汽車が通じた日。

一日分の食料を斜に背負ひ、草鞋、脚絆に、金剛杖こ云ふ裝束で、小糠雨の巣鴨街道を池袋の停車場にゆく。「此處なら、よもや……」こ、多數の人が身を寄せたこいふ、厚味二尺に足ること思はれる巣鴨刑務所の煉瓦塀が、根方から倒壞して、道々堆高い煉瓦の小山が出來てゐる。その煉瓦塀の下敷になつて、腦髓を粉碎されたこ云ふ話、形も失せるばかりに全身を打ち碎かれて、屍骸をシャベルですくつて片附けたこ云ふ話が、道を急ぐ私の腦裡につき纏つて、胸を濕らせる。こ思ふこ、昨夜、落着かぬ眠りの中に聞いた幾發かの銃聲――脫走を企てた囚人に向つて放たれたこ云ふ銃聲の事などが、遠い過去の物語のやうに想出されて來る。

午前六時こ云ふのに、五百に近い罹災者の群が、もうプラットフォームを埋めてゐる　銃劍を付けた歩哨に列車時刻を問ふこ、もう三十分位こ云ふ。割込んで這入る隙さへない人込みに、やうやくむぐり込んで、昨日あたりの夕刊で見た罹災者輸送の、無蓋貨物列車の到着を待つ。日暮里驛から既に罹災者を滿載して來た汽車が、プラットフォームに入るや否や、待ち構へてゐた群集はわらわらこ雪崩を打つて、未だこまり切らない車に手をかけて縋らうさする。それを制する驛夫や警官の怒號、押し合ひ、へし合ひ、罵りわめく喧騷の裡に、いつの間にか私の前には腕一本差し入れる餘地のない人垣が出來てしまつてゐた。此の汽車を逃がせばまた一時間此處で待たねばならない。此處で失ふ一時間は、先きへ行つてから三四時間の旅程を失ふことになる。どうしても此の汽車に乘らなければならないこ思つて、人々の背後をあちこちこ、伸び上つて、人間一人這入れさうな車を見付けて歩くが、その人垣が破れゝばこそ。どの車にも、詰るだけ人間が詰つて、餘つたのが、車こ車この間のチエーン

の上に乘る。巡査が來て、サーベルを鞘ごと握つて、其處に乘る人達の尻をはたいて下す。巡査が通り過ぎると、また、一人乘り、二人乘り、三人四人と、車の縁に手を懸けて、チエーンの上に乘らうとする。巡査がまた來る、擲る、蹴る、果ては、巡査と群集の一人と組打が始まる。そのどさくさ紛れに私は漸く車の縁に手を掛けることが出來た。

「すみませんが、一寸一人だけ融通をつけてくれませんか」

「駄目だい、駄目だい、此の上乘られちや車がこわれらあ」

「すみませんが、一寸……」と云ひながら、草鞋の土を乘客の股引につけたりして、無理やりに片足車にまたがると汽車は動き出した。

雨模樣の雲がきれて、蓋のない車の上に、身動きならない程詰つた人々の頭の上に、九月の太陽は照りつける。人いきれの蒸暑さに、頭の方から間斷なく流れて來る玉の汗を拭ふゆとりさへない。

品川の乘換場に於ける群衆の雜沓と混亂は、池袋驛のそれより尚甚だしい。背負つた今日の辨當の握飯などは、足で踏みつけたやうにペシヤンコになつてゐるであらうと想像しながら、私は、「すみませんが、どうか一人乘せて下さい」を何度も繰返して、此處でも無理やりに漸く貨物列車の中に立つことが出來た。

車中では、どちらに耳を傾けても、地震と火事の話で持切りである。火の手に攻められて逃げ廻つた揚句、池に飛び込んだところ、その池が案外深くて溺れさうになり、何か取縋るものをとさぐる中に、何だか浮いてゐるものが手に觸れたので、覺束ない乍らも確り抱へて一夜を水の中で過し、空が白みかけてから、フトそれを見たら、女の屍體であつたと云ふ話、吉原の遊女が、すは大地震と云ふので悲鳴を揚げて飛び出したが、大門も裏門も非常門も固く閉されてゐて廓の外に出ることが出來ず、さうかうする内に、彼地にも此地にも火の手が揚つて、たちまち火炎に包まれ、熱さに耐へられないで次ぎ次ぎに池に飛び込んだところ、深い池故たちまち溺れ、あとからあとからと飛び込むうちに、屍體が重なつて丈がたつ程になつたと云ふ話、池の縁にひたつてゐたのでは到底熱さに耐へられないで、一人泳げる者が池の中央に立てられた棒杭に縋ると、次ぎの者はその肩に掴まる、又その次の者が、前の人の肩に掴まる、斯うして出來た長い人間のつながりが、そのまゝ燒け死んで了つたと云ふ話、いづれ、此の世の出來事とは思へぬ悽慘な物語りならぬはない。さうかと思ふと、それも、死地から救はれた喜びが變つた諧謔でもあらうが、悽慘場裡から、今となつて笑はれる滑

稽な場面のみを陽氣に物語つて、乘客を笑はせる若い男も居る。河岸に浮いてゐる夥しい屍體を、男は男、女は女と、別々に分けて引揚げる。男の水死體はうつ伏して居り、女の屍體は仰向いてゐるので、それに依つて屍體を分別してゐるうちに、正しく男であるのに仰向きになつた屍體を發見したと云ふ。そして人足共が集つて、開闢以來斯う云ふ間違ひに出逢つた事がない、と云ひながら引上げて見ると、背中に手提金庫を背負つてゐたと云ふ。又、丸の内の或る石造の建物が崩壞した時、下に立つてゐた人が眞上からつぶされて、掘出した時には一尺に足らぬ人間の形をなしてゐたといふ。

　そんな馬鹿な話がありますか。

　神奈川あたりから被害は目に見えて甚くなつてゆく。線路に殘された貨車は、罹災者の住宅となり變つてゐる。ドアの所に速成の小さな梯子などが掛けられ、薄暗い車内に莚一枚敷いて其上に横になつて赤子に添乳してゐる女房さんも見える。貨車の表側に繩を張り廻らして、襁褓など干し並べたのもある。

　横濱に着く手前から、もう眼を遮る何一つなき一面の燒野原である。新築して幾年も經なかつた横濱の停車場は影も形もない。燒け落ちて、どす黒く煤んだ建物の跡から立昇る煙が空を低くなびいてゆく。車上に立つて眺める人達も、それについて語り合ふには、光景が餘りに陰慘すぎる。地震の激甚であつたこと、強風にあふられた火の足の早さ、逃ぐるに道なくして、倒潰した家屋の瓦の上を渡り渡り落ちのびたこと、更に、頭を潰された娘の屍體の、足を肩に擔いで、滴る血汐をそのまゝに、屋根の瓦を踏み踏み、逃げまどつてゐた老人がゐた、と云ふ話を聞くに及んでは、おのづと胸はさしぐまれて來る。

　南京街などは全滅だと云ふ。「何しろ此の春の地震の時でさへ家が崩れて、死人や怪我人が出たんですからねえ、殊に晝時分ときてはぞろぞろ人は出ますし、建物は古し、往來は狹し、ごつちみちいけませんは」と或男は語つてゐた。

　鎌倉では、家と云ふ家は悉く潰れてゐる。倒壞家屋の爲に、通れる道も通れなくなり、廻り道をして廣津和郎氏を訪ねると家族と共に田中純氏方に避難をしてゐると云ふ貼紙。更に、田中純氏を訪れると、此處はまた地震が素通りして行つたかと思はれる位ゐ何事もない。食事を終つたばかりらしい純氏は、「やあ」と云つて、元氣な、笑ひ顏を見せる。廣津氏はと聞けば、一昨日東京に行つたと云ふ。葛西善藏氏の消息を知りませんかと問へば、「さあ、地震のあの晩、風呂敷包一つ背負つて、東京に行くと云つて鎌倉を出たがね、國にでも歸つたんだらう」と云つてゐた。久米さんの消息が暫く知れなかつたので、東京の

お母さんがずゐぶん心配して居られた話をすると、「なあに、久米の方ぢやァ案外呑氣でね、また直ぐ鎌倉に歸つて來るつてさあ」と笑つてゐた。足を洗つて少し休んで行けと云ふのを、今日中に是非小田原まで行き度いからと、辭して、厨川白村氏の最後を忍ぶべく海岸橋にゆく。

倒れて、幾つにも折れた大鳥居を跨ぎ越えて暫く行つた所で通りすがりの小僧さんに、

「海岸橋に出るには何う行くんです」

「此處をまつ直ぐ行つて、あの松並木の切れたあたりを左に行くんですが、橋はもう落ちてしまつて渡れないから、一層まつ直ぐ海岸まで出て、川をお渡りになつた方がいゝでせう」

「川は深いんですか」

「いゝえ、かかと位です」

「や有難う、君、此處らは餘程津波が來たかね」

「えゝ、ほら彼處に生垣が倒れてゐるでせう、あれより、もう少し此方まで來ました」

小僧に指さゝれたあたりを見ると、松林を圍つた生垣の並木が、根こそぎにこがれて、波の引いた方に向つて倒れてゐる。

教へられたまゝに海岸に出る。乾いて陽炎の立つ砂濱の向ふには、平素の波が、多少濁りをもつてはゐるが、靜かに寄せては返してゐる。砂濱を流れる清流の汀に、只獨り、男がゐて、芥を燒いてゐる。何事もない靜かな情景だ。何と云ふ自然の仕草だらう。川を控えた向ふの砂丘には、厨川氏の「戀愛館」があらはに立つてゐる。周圍の石塀は倒れ、コンクリートの頑丈な建物は處々ゐみ割れて、總體が、心持前に傾いてゐる。誰も人影は見えない。壁は落ち、用材は落ち、混亂した勝手道具の中に、白いエナメル塗りの鍋などがころがつてゐる。庭に廻つて仰ぐとベランダは今にも倒れるかと危ぶまれる程、前に傾ぎ、硝子戸は破れ、破れたながらに、明るい九月の空と、周圍の松の緑を映してゐる。道を返して、芥を燒いてゐた先刻の男に、

「こゝに住んで居られた厨川先生と云ふ方は、どんなにして歿くなられたか知りませんか」と聞くと、

「さあ、私もまた聞きで、自分で其場に居あはせたわけぢやないですがね、何でも其處の海岸橋の袂まで逃げてお出なすつた時津波に浚はれましてな、二度目の波で此の川尻に上げられなさつた時には、もう、肺の方に澤山水が這入つてゐて、間もなく事切れて了はれたやうな話でした」

此の春、「女性改造」の文藝講演會の當日、壇上に立たれて、

「私が此處に斯うして立つてゐると、皆樣の顏が、私が何か戀愛問題に就いて話をしなければ氣がすまない、といふやうに見

受けられる」と云つて、絶大の拍手を浴びせられた博士、戀愛の味をおでんの味に譬へた博士は、もう此の世に生けして居られないのであつた。洋裝の美しい蝶子夫人、面ざしが博士によく似た令息は、何處に、何うして居られるか知ら。

「もう彼處には誰も居らないんですね」

「えゝ、今朝早く女中さんらしいのが二人來て、何か片附け事をしてゐたやうでしたが」。

自動車で逗子に行く。里見弴氏を訪れようとして、既に何囘も來て、知り過ぎる程知り拔いてゐる筈の道筋であるのに、東郷橋の方に曲る道がどうしても解らない。近所の郵便局で尋ねると、すぐ其處の屋根を越えて、少し行くと道があると云ふ。潰家で、狹い往來は全く埋つてしまつたのである。弴氏の家も、世間なみに悉く倒壞して了ひ、二三人の職人が忙しさうに跡片附をしてゐる。

「お子さん方は庭で遊んでゐらしたので何事もありませんでしたが、奧樣が下敷になられて、でも、お怪我もなく出られました」と職人が語つてゐた。家族の者全部東京の有島さんの方に避難されてゐると云ふ。

大船まで道を返して東海道の本街道を下る。鐵道軌道の上に機關車の百噸が、嘗て人に見せたこともない腹を露はに見せてゴロリと倒れてゐる。四つの車輪から受ける感じか、何だか巨大な動物の横死した狀を思はせる。軌道も土臺が崩れて、線路が飴のやうに曲りくねつてゐる處があると思ふと、龜裂の爲に線路が枕木もと遠く相隔てた箇所もある。夕近い空の明るみから覗いてゐる富士の高嶺が、餘りにさり氣ない。辻堂から茅ケ崎、平塚と、被害の程度は、逗子、鎌倉のそれに比して遙かに僅少である。街道に戸板を出して、簡單な雨よけをして、パン、サイダー、うどん、團子などを賣つてゐる。馬入川の慘狀は全く想像以上である。頑丈な石柱の鐵橋の土臺は悉く崩壞して跡方もなく、水勢の漲ぎつた濁流の中に、山形をなした赤塗の色さびた鐵柵が、時に見え、時に隱れ、そのあたり白浪が絕えない。工兵大隊の手に依つて懸けられた假の板橋を渡つて、平塚の驛に近づく頃、空には三つ四つ、星が出てゐた。軍隊が出動してゐるとは云ふものゝ、夜にかゝつた獨り旅は心細い。日頃無性から髮を長く伸ばしてゐる私のこと、若しや社會主義者の嫌疑を受けはしまいか。東京に居る時から既に二三囘も鮮人に見誤られた私のこと、田舍の人は何と見誤るか計られない。殊に、町一つ越えれば定まつて松並木がある。夜となれば人通りも乏しいその並木道で、どんな間違ひが起らないとも限らない。斯う思ひ巡らして來ると、足がすくむ程私の身邊が不安に感じ

られて、老松の蔽ひかぶさつた並木道に這入つた頃には、足さへ伸び伸びと進まなくなつて來た。

先方に燈(あかり)が現はれて、多少の心强さを感じたかと思ふと、それが自轉車で、振返るすきもなく、風を切つて過ぎ去つたりする。荒れてゐるらしく波の音が心を寂しくさせる。何となく身邊を返り見たい心持で振返ると、後の方から提灯がひとつ來る。弛みもせぬ脚絆の紐をしめ直したり、背の荷を背負ひなほしてゐる間に、提灯は近づいて來る。白服らしい。巡査なら此際一しほの有難さである。近づいた人を見ると、雄々な體格を持ち極めて小さな劍を腰にブラ下げた海軍の將校であつた。私は一時の安堵から、豫期し得なかつた平たい心持になつて、極くくだけた、親しみ深い口調で、

「あの、失禮ですが何方(どちら)までおいでですか」

と聲を掛けた。海軍將校は、大股で地を踏みつけるやうに歩きながら

「小田原まで行きます」

「私も小田原まで行くのですが、それは丁度よござんした。御一緒に參りませう」

地震のことから話を進めてゆけば話題が盡きることは思はれない。將校は、小田原が生家で、母堂や兄弟が居るのだが、その人達の生死を頻りに氣遣つてゐる。大連で無線電信に依つて此度の災害を知り、今朝横須賀に着いたばかりだといふ。

「私などは全く道を歩くと云ふ事はなかつたんですが、さて、歩きつけると歩けるものですね」自分で感心しながら、例の大股ですたすたと足を運ぶ。星の光の冴えない空に、時々一筋の淡い光線が移動しては消える。今夜は、小田原に驅逐艦が二隻來てゐる筈だから、その探海燈だらうと云ふ。私達は時々道の端に蹲んで、提灯のローソクを代へた。將校は其度に背負つてゐる風呂敷包を解いて、太いローソクを取出した。包の中の紙袋は餡パンらしい。疲れて來ると、言葉が重くなる、無言の儘歩きつゞけて行つて、暗がりに立つてゐる步哨兵の銃劍に、ハッと驚かされたりした。

「陸軍と海軍とは禮をしないですねえ」

將校は無言でゐたが、微笑したらしかつた。

「鎌倉逗子あたりを通つて來ると、海軍さん海軍さんで、青年團にまでもてるけれど、此處らあたりに來ると、もう、海軍なんて振向いても呉れませんな」暫くしてから斯んな事を云つてゐた。鎌倉から向ふは、横須賀の海兵に依つて警備されてゐるのである。

二宮から押切まで來ると、潰家が多くなつて來る。荒い波の

音がすぐ近くで砕く。道端の堤が崩れ、松の大木が往來に横さまに倒れたりしてゐるのをくゞつて通る、

「焼けた事は確實に知れたんですがね、地震が甚かつたご云ふから、おふくろなごは逃ける暇もなかつたでせうよ」少し沈默が續くご將校は、私から少しでも氣休めの言葉を引出さうごするのか、こんな風に家の事を氣づかつて云つた。途中、まだ起きてゐる民家で、熱い湯茶の馳走を受けたりして、夜半、國府津に着く。軒に提灯を連ねて、まだ寝ない家が多い。酒匂橋は落ちて、同じく工兵隊の手に依つて假橋が懸つてはゐるが、午後六時過ぎは絶對に通行禁止だごいふ。今夜これから酒匂川橋の袂まで行つて一夜明かさうご云つたが、將校の勸めで、國府津泊りご定め、一軒一軒「何處か、一晩お宿をねがへる家はないでせうか」ご聞いて歩く。或家の女房さんらしいのが

「おふたりですね」ご、細い路次を海岸の方に連人つてゆく。案内された家は、建てかけの待合らしく、かざした提灯で、門燈の「みごり」の三字が讀める。草鞋を脱いで上るご、雑作のない吹きさらしの幾間かの部屋には、既に多くの旅人が雑魚寝をしてゐるらしく、鼾聲に交へて語らう聲も聞かれる。先刻の女房さんが、敷蒲團を二枚持つて來て大枚一圓を要求して去る。廂合から仰いだ星空には、弦月があるらしい。强震が來た場合何方からごう逃ける、ご、豫め腹の中に手筈を定めて、其儘横になる。此んな際には、戸のない家も都合がいゝ、ごは思つたものゝ、明け近い頃を流れる風が、ごこからごなく身内に染みる。

未明に酒匂川の假橋を渡る。つい先頃出來たばかりの、コンクリート造りの酒匂橋は、ぐずぐずに崩れて、橋の形をなしたまゝ落ち、酒匂川の水を堰いてゐる。折から待ち合せてゐたガタ馬車に乘つて、小田原に入る。小田原の町は、行くごころ、何一つない焼野原である。かの將校は、灯のない提灯をブラブラさげたまゝ、自家の焼跡をたづねて行つた。小田原名所の一つであつた鐘突堂は、土臺の石崖が崩壊して、堂は眞さかさまにひつくり返つて轉けてゐる。小田原城の石崖は悉く堀の中に崩れ落ち、内部の松原や、全潰した御用邸が、外から見られる。最初の强震の折、堀端の道を通つてゐた巡査が、左手に帶劒の鞘を確ご握つたまゝ、あつちにころころ、こつちにころころ、立つ事も出來なかつたご云ふがさもあらう。堀端の道には巾一尺ほごの亀裂が通つてゐる。焼殘つた、停車場前の待合、あさひ、伊勢竹、レゾート、いづれ、當時の激震を忍ばせるに餘りある、痛烈な潰れ樣である。第一震に潰れた家が多く、從つて家の中で生き乍ら焼かれてしまつた者も少なくないご云ふ話。

海には大きな龍巻が起り、その飛沫を見た者が大津波襲來の宣傳を觸れ廻し、陸には、あの大火の中に大旋風が起つて、眞赤に焼けたトタンの雨を降らしたといふ。×××××××××何處でも生きた心地を失つたと云ふ。

「×××××××××××××××××××××××××××××××××と云ふのでせう。此の大勢の子供を抱へて、逃げる事もならないではありませんか。××××××××××××××××××××××××××××××は半鐘を打つから、其時はもう覺悟して與れと云はれ、娘達には印絆纏を着せたり、頬冠をさせたりして、小さい子供達は潰れた物置の中に押込め、私は私で、××××××××××××××××××××××××××××××××、皆で呼吸を殺して靜まつてゐると、チャーン、と鐘が鳴つたではありませんか、まあ、其時の氣持つたらありませんでしたよ』或る家の細君が、今では笑ひ話の一つとして斯う語つてゐた。

竹藪を切拓いて建てた木兎の家(北原白秋氏宅)は、幸に震災も火災も免れたと云ふ。

吾妻橋の火を逃れて上野へ

宮城久輝

大地はこんとんし出して小さい人間の反抗の餘地もなく、全人類の運命も終末だと思ひながらも自分丈は助かりたいと、電柱や家の倒れるのをさけるために道の中央に出ようと努めた。此の恐怖が去つた時此の地震が未曾有な災厄なことが直覺されたので、今行かうとした用事先のK氏へは、先づ三町も隔てない親友のS君の家を見舞つた後に行かうと厩橋を渡つて行つた。

外手町に來たら屋内から飛び出した人々が悄々として、倒れた家々崩れ落ちた軒などを前にして煙の出る方を仰いでゐた。藏前の工と淺草橋の間らしい所が早くも猛火と見えた。外手町でも一町と距てない所に黒煙が濛々と立ち上つた。地震後まだ二分と經つまい。三四人の娘か某蕎麥屋の火は消したらうか、などと慄えてゐるのを見た。露路を這入ると一町程の赤煉瓦塀が根こそぎに道に倒れてゐたが、中間程の處に人が潰されてゐるとて四五人の男が金棒で掘り出さうと急いでゐた。S君の家は誰もゐなかつた。書棚や戸棚が雜然と座敷一杯に倒れ散つてゐた。前のバリカン工揚が全崩して道は辛うじて通れた。

近くのお寺の庭に搖り返しを恐れた人々がゐた。搖る怔に人は南無阿彌陀佛々々々々と叫ぶ聲は悲愴を呼び起すのであつた。S君は今朝大阪へ、妹は今日からの學校へ行つたとて、S君の妻君は五歳の彌生を背負つて群集に雜つてゐた。ものゝ五分も經つたかと思つたら人々は火事だと周章(あわて)出した。今迄の地震は忘れたやうに荷物を取り出した。も早私は妻君と彌生を攻め來る火の中に見離すことが出來なくなつた。妻君は下の引出しを包んでくれと言つた。私は被ひの白布でそのまゝくるんだ。妻君はS君の保險證や銀行郵便局の通帳などの入つた手金庫、纏め終へて佛間の佛を無雜作に取つて私の包んだ包みの中に入れ、次に彌生のまんとと冬着の二三枚を入れた。三人は飛び來る火の子の中を逃げ迷ふ人々の中に交つて二三町先のからたち寺

の庭まで來た、私は三度運び出して、四度目にはもうこれまでと白毛布に持てる丈けを包んで行つた。もう此處まで來たら大丈夫と思つて群集と木の下を頼つて坐つてゐたが、火は北風に煽られて激しい火焰を揚げて寺の東方二三十間の所が俄に猛火の海となつて恐しい火焰が吹き荒れて來た。此處も駄目と群集は周章出した。よいものを毛布に移して殘つた三つの包みを木の根に置いて、妻君は佛け入りの包みを首にかけて彌生を抱き、私は毛布を背負　手金庫を提げて火と並行に電車道からサッポロビール會社の側を通つて枕橋の方へ行つた。電車道に出た時は業平橋から中之郷停留場一帶が赤爛たる火焰に燃えてゐた。私は吾妻橋なら大丈夫と思つたが妻君の言ふまゝに進んだ。枕橋には川に面した幅一間程の灌木の植つた圍ひがある。早や圍ひ内は人々が一杯であつたが無理に柵を越えて三人は入つた、前はサッポロビール、橋を渡れば水戸侯、西方は隅田川、縱令東方の家が燒けても此處なら大丈夫だと安心した。が今大きく搖れ出して石垣がのめると川に溺れ死ぬと思つたりした。妻君はもう社の方へお歸りなさい。よいですよと云つた。母子が落着いたのを見て私は何心なく模樣を見ようと吾妻橋へ行つた。S君の家へも再び行つて見たが、吾妻橋あたりは火事らしくもなく、S君の家も此通りなら助かると思つた。人影は殆どなかつたが飯櫃からむすびを二つ拵へて藥鑵に水を汲んで戻つた。枕橋は避難の群れで雜然たる荷車が交つて人々が咬み合ふやうであつた。妻君や側にゐた老婦なども如何に〳〵と氣づかつたが自分は縱令前の家が燒けてもビール會社の燒ける筈がないからその陰になれば大丈夫だと無關心に彼等をながめた。が火は早や三四軒先に來てゐた。妻君は切に氣づかつた。向島なら大丈夫だと云つたがそこは黑煙が天を焦してゐた。吾妻橋は大丈夫だからと何心なしに枕橋の小さい圍を出た。其の時は叉・人々もあわて出して荷車馬車いろ〳〵の持ち出し道具と人の山で容易なことでは通れなくなつてゐた。ビール會社の前を横ぎる時であつた。四五人の消防夫は赤煉瓦のビール會社に火が入つたとてつゝ先きを運んで駈け込んで行つた。三人は漸く吾妻橋の口に懸つた。人々は荷車を捨てよ人の命を助けよと口口に叫んだ。橋の半ばに行つた頃からは砂が激しく降つた。ビール會社の非常汽笛が凄じく鳴り續いた。押され乍ら一目振り向いたら三階の窓の幾つかが水平に凄い火の舌を出してゐた。息詰るやうな暑い空氣が絶えず被ひかぶさる。橋を出る所は荷車、捨てた荷物で塞がり後から押す人々によつて踏み潰す、喚く泣く呼ぶ叫ぶ、全く修羅の巷と化してゐた。私は欄干を越え丈餘を飛んで橋際の渚の石の階段へ飛び下りた。數人の男達が川

水を汲んで塀にかけてゐるしを　氣が付いた。何時の間にか自分は帽子も毛布包みも失つて手提金庫のみ右手に持つてゐた。

後から押す群集が増す程捨てた荷車と荷物の山との間には叫喚の聲が高まり悽愴の光景が募るのみとなつた。姙娠九ヶ月目の妻君と五歳の女兒は正しくその中央に捲き込まれた。電車道を横切り自分は逃れたと思つて振り返つたら群集は互に橋口で藻掻き合つて一歩も吐き出さないで踏み躙り合つてゐるやうに見えた。

おかあさん〳〵。——姉さんもう四人で逃げようよ。——橋口の修羅場を振り返つてもまれてゐる母を呼ぶ聲、連れに望みを絶つ聲など非常汽笛の凄いうなりや焼崩れる煉瓦の大工場の猛火やと和して終局の恐怖をそゝつた。妻君と彌生が助かる筈がないと思つた時自分は手提金庫をＫ君に渡す淋しい場面を思つて當惑してゐた。自分は幾度か彼等母子を迎へる爲めに行き戻りして遂ひに逃げるに逃げられず車道の端に呆然と立つてゐた。群集は絶えず田原町へ向つて雪崩れて行つた。私は自分を疑ふ嬉しいとも悲しいともつかぬ安心を覺えた。中央部に髮を振り亂して額一杯泥土に汚れて血走つた眼の妻君が押されて來るのを見た。

彼女の着物は兩袖共肩まで綻び、帯から下は泥土で染めたやうに足は跣足になつて彌生の手を取つてゐた。後で見た彼女の右足は全體が黑い斑で膨れてゐた。吾妻橋はその數十分後焼け落ちて數千人が雨の降るやうに隅田川に焼け落ちたと云ひ、水戸家も焼け、枕橋の下にゐた船——人や荷物の避難した四五艘の船も焼けたと云ひ、原庭署の取扱つた四千人の死者を見出したのはサッポロビールや枕橋水戸家附近、即ち私達三人が安全だと避難してゐた所が主であつたと。向島にも逃げられず袋の鼠のやうに焼け死んだのであらう。

發達の遲い彌生は蟻の歩みであつた。妻君は彌生にもまして遲く尖つたお腹を抱いて私を追つて來る姿は憐れであつた。上野についたのは夕方になつてゐた。兩大師の廣場に夜を送ることにした。

私は池の端七軒町まで行つて敷蒲團と紙と煎餅サイダ水等を求めて歸つた。東京は全市が火の海であつた。午前になつてゐたか、淺草本願寺が黄金の殿堂のやうに焼け落ちる光景など言語に絶した。翌日になつても上野から見た東京は火の海で如何することも出來なかつた。二日の早朝私は再び池の端七軒町へ食物と水を求めに行つた。下谷區役所や、市街自動車庫やタンクが焼けた頃からは上野も不安になつて人々池の端へ移り出した。石油鑵の焼け殻が隣りの人に落ちた。上野驛に火がついた

ら近くにゐた鳥が一齊に鳴いて凄愴なる夕空を池の方へ飛んで行つた。再び群集は混雜し出した。
水、手提金庫、敷蒲團、センベイ類、傘、彌生、此等の携帶物を持つて池の方へと群集に交つた。人々は田端を指して雪崩れた。私達三人も無茶に曳く荷車の後に先に、或るは間になつて谷中の夜の細道を搖れる毎に石塀や屋根の下敷になる恐れを持ち乍ら通つた。團子坂下に出る迄の道は今にも崩れ落ちさうに傾き或ひは壞れた家が續いてゐた。今にも落ちる墜道をくゞる思ひで通り拔けた。彼等母子の蟻の歩みを引き立て／＼逃れ行く人々に交つて肴町に出て上富士前の廣場まで行つたのはもう十時過ぎてゐたらう。さしも廣い所も避難の人で一ぱい被はれてゐたが逃げるに便利な直ぐ道に面した少しの餘地に蒲團を忍ばせて母子を休ませた。
　早朝殘る煎餅を大事に四切づゝ食ふことにした。彌生は殘り少い食糧を知つて私には拒んだ。母は「兄さんにあげないとかあちやんもやあちやんも一しよに死ぬのよ。そんなにせないで上げなさい」など云つた。
　大塚仲町から清水谷の横山氏方で湯を貰ひ後生大事に求めた一本の葱を立てゝ食べ、むすびを食ふ人の幸福を羨んだ三人も初めて蘇生の思ひがした。傳通院下の救護所の入口の石段に親子を休ませて燒跡の道を見て歸つたら妻君は泣いて眼を脹らしてゐた。勇氣を鼓して麻布の親類　燒けないことなど言つた。妻君は飯田町牛込九段の燒跡の火氣ある中を半藏門へ行つた。妻君は五歳の彌生よりも遲く一人娘の彌生は日頃の我儘で如何とも出來なかつた。妻君はとう／＼電車の中に泊ると言ひ出したが、私は叱責して虎の門から燒跡の中を通つて麻布についた。
　學校へ行つてゐたS君の妹は九日目に勢一杯の荷物を背につて姉をさがし當てたとのことだつた。その荷物は私が運び出した餘りで三十一日淺草の中店でS君と妹と彌生の三人で買つた彌生の人形まで持つて來たと。

被服廠跡遭難實話

濱本浩

上

總てが人類の經驗を超越した大震災と大火災と、そして暴動とに脅迫され、不安と恐怖のどん底に突き落された罹災民は、何麼（どんな）血腥い事件にも心を動かすまい。昨日まで空徂く雲の姿にすら涙ぐんだ者も、今日は血も感情も硬化して、幾百の溺死體に堰き留められた神田川、百にも近い若い美しい女のみ折重つて燒死した呉服橋の慘事すら、日常茶飯事として聞き過す事が出來る。さうした修羅の世界にも、本所被服廠跡の大悲慘事のみは、あらゆる人々の心を種々の意味に於て強く激しく動かさずには置かなかつた。

一ツの場所に於て三萬二千七百六十五人の慘死者を出した陸軍被服廠跡は本所區横網町一丁目の全部と二丁目の一部を包んだ約三萬坪の大空地であつた。數年前工廠の建造物を取り壞して以來、一部分をトタン塀で圍んだのみ、境内は荒廢するにまかせ、附近の少年達が集つて野球をしたり、馬の競進會場に使はれたりして居た。市電石原町停留場寄、兩國停車場寄、横網町二丁目の安田邸寄の三ヶ所に入口があつた。そして北方は市電龜澤町車庫の一部を交錯し、南西部は兩國驛構内引込線と相接し自由に交通が出來た。被服工廠跡と境を接した横網町二丁目は隅田川の東岸でその八番地から十二番地まで町内全部が安田一族の邸宅に占められて居た。工廠跡から安田邸を過れば隅田川までは二三十間に過ぎない。豪奢を極めた安田邸には築山もあつた、池もあつた、池には大川の水を引いて、鯉や鯛が泳いでゐた。

大正十二年九月一日正午第一回の大地震と殆んど同時に本所區内は各所から火災が起つた。吾妻橋際の札幌ビール會社の大建築物から吐き出した火焔は、風下の原庭町、竹町、表町と躍

く間に舐め盡した。同時刻に若宮町、外手町、石原町も、何處か火元か、忽ち火焔の海に呑まれてしまつた。隅田川の對岸藏前の高等工業學校はその時旺に燃えて、火片は水の面に雨の如く灑いでゐた。此の附近一帶の土地は裏通りや横町が縱横に走せ民家櫛比して居るに拘らず、公園や空地は一個所も求められなかつた。だから火災各所に起り郡部への道をさへぎられ、のみならず對岸の淺草區一帶猛火に包まれて避難の途が全くないこと知るや、原庭町、業平町以南の住民は悉く被服廠跡の空地を目指して避難したのであつた。

直ぐ間近に新築の相生警察署があつた。署長の山之内秀一警視も官舍にあつた家族達を被服廠跡の廣場に避難せしめた。警察の重要書類を其處に運んだ。そして自ら部下の原警部、西岡警部補以下十八名の警官を指揮して避難民の整理と救護に努めて居た。午後三時頃には約四萬の避難民が家財を纏めて此の廣場に集つた。警察では、それ以上避難民を収容する事の危險を感じたので、入場を禁止した。午後四時頃、火災は益々接近した。其れも三方からなので殆んど避難の途は考へられなかつた。廣場では避難民が何れも中央へ中央へと集つて、そのために負傷者が出た。電車線路側に居た數百名は、危險の迫るのを知つて逃れ出した。彼等は火の粉を浴びながら龜戸方面へ落ち延びて行つた。

午後六時前後、火は遂に兩國驛、龜澤町車庫、安田邸に燃え移つた。それと共に焔の一大旋風が場内を一掃したので避難民の持込んだ道具類に延燒した、續いて二回、三回、火焔の旋風は廣場に渦卷いた。そして數萬もの避難者の悲鳴と叫喚が全く絶えてしまつたのである。

三萬三千の燒死體が、蛇のとぐろを卷く如く、打ち重なり相擁し、三萬餘坪を埋めて居るのが、その翌日軍隊に依つて發見せられた。三萬三千人と云へば地方の小都市の全人口である。富豪の令孃も居たらうし、貧民窟の老人も混つて居たに相違ないだが燒死後十五日を經るのに遺骨を引き取りに來た者は僅に五百に過ぎなかつた。尤もその遺骨とても勿論當の主人が判る筈はないのだ。

中

相生署長山之内警視の夫人と令息は、それと覺しき屍體が發見せられたが、署長の屍體は遂に發見せられなかつた。たゞ家族達と一町餘離れて警視用の帶劍と肩章が發見せられたので、署長の燒死は確實になつた。署長が責任を負うて割腹したと云ひ避難民の子供達を一所に集めて保護しながら燒死したとも云

ふけれど、勿論見た人の話ではない。

部下の原警部は頭部その他に重傷を負ひながら、屍體の間から掘り出されて蘇生した。警部は火焔の旋風に煽られて窒息したが、周圍の遭難者が苦悶しながら其の上に上にと折重つて打ち斃れたので、屍の下敷になつて危くも難を免れたのである。彼は救助せられるまでの何等の記憶も殘つては居なかつた。

小學教師のAは柔道二段の強者であつた。Aは火焔にむせびながら、半死半生の罹災者を掻き集め、積み重ねて山となし、その中に身を埋めた、その中には悶きながらAの腕に獅嚙みついたり首に纏る者もあつた。Aは自己の生存以外に何事をも考へる事が出來なかつた。Aは手近から半死の少年をつかみよせそれで頭上の焔を、防いだ。少年はいつしか絕息したが、やがて少年の屍體が焔に焙られて、熱湯のやうな脂肪がAの頰にそゝいだ。Aはそのたびに疼痛を感ずるほか何事をも感じ得なかつた。曉近く火焔は去つた。彼は屍體の穴から拔け出した。そして見渡す限り累々たる燒死體の山を踏み越えながら心の中は生存の驚喜で張り裂けさうであつた。Aは殆んど視力を失つた。

外手町で荒物屋を營んで居た松岡某は、逸早く工廠跡に避難した一人であつた。だから彼は後から押し寄せる避難者の群に押されて、西南隅の安田邸に接近した場所まで行つた。焔が接近すると知つたので、簞笥を踏み臺に塀を乘越えて安田邸の池の中に飛び込んだ。その刹那工廠の中では爆彈のやうな烈しい響がした。其の音をきくと、彼は工廠內に殘して來た妻と子供の事がふと念頭を起つた。然し家族の事は直ぐ忘れて、池の中に居る自身の危險を感じた。池の水は熱湯のやうにあつかつた。地理に明るい彼は、目の前の火焔を突破して大川岸から隅田川へ飛び込んだ。然し、さしもの隅田川も兩岸の火災に川面いつぱい焔に包まれてゐた。彼は水底にもぐりながら焔を避けて居たが、濡れた頭の毛までヂリヂリと音がして燒けてしまつた。然し生命は助かつた。

勵しあつて助かつた兄弟が居た。廣場の中央より稍々電車路に近い窪地で水道の鐵管が壞れたので其處に深さ一尺ばかりの水溜が出來た。血氣旺りの兄弟は片腕を肩に掛け合つて押し倒されない用意をし、片手で水を掛けあつて焔を防いだ。その兄の方が避難後の談話に依ると、苦悶の叫び、肉身を呼び合ふ聲そして南無阿彌陀佛の稱名が、轟々と唸つて過る火焔の音に混つて物凄かつた。その聲が寂（しん）と靜まつた時は何でも一日の夜半だつたと思ふ。窃つと顏をあげたが兄弟とも眼が疼んで堪へられなかつた。そのうちに月が昇つた。月の光と火のほてりに見

渡すと、あたりは屍骸の山であつた。弟は、全く失明したから見捨てゝ逃げてくれ、と悲しい事を云つたが其れだけは何うしても出來なかつた。弟の手を引いて横網の方へ出ると安田邸の燒跡にも屍骸が折重なつて居た。燒跡の池を探して眼を洗はうとすると、池の面も屍骸に埋まつて居た。

下

三萬二千八百の屍體は、燒跡の窪地に積み重ね、石油を注いで場内數箇所で燒却した。そして更に燒け殘つた殘骸を場内四箇所の臨時火葬場に運んで松材と石油を用ひ茶毗に附するのであつた。九月二日の午後から初められた同所の火葬作業は二週間を經た十四日に及んで、未だに幾多の屍骸を殘して居た。火葬人夫も、屍骸運搬人夫も二日續けて働いた者は必ず發熱した。兩國橋を渡つて一度び江東の地に入れば屍體を燒く臭ひと未だ發見されない死屍の腐敗した惡臭とで鼻を掩うても堪へられないほどであつた。

　被服廠跡は哨兵に護られながら火葬作業が續けられて居る。三萬二千八百の生靈、やがて其處に新回向院が建設せられる筈である。

荒都記

—赤い地圖第二章—

竹久夢二

1

どんな最大級の形容を持つてしても、此度の震災が人間に與へた驚きを、適確に言ひ表す言葉を持たない。

個性を持たない人間が、世界の病氣であるところの機械文明や商業主義に、生活を浸して、創意(オリヂナル)のない文化に浮かされてゐたことが、間接に、慘害の度を大きくしたとは言へ、阿修羅地獄の火炎のなかに、影繪(シルエット)のやうに踊り狂ひながら逃惑ふ群集が擧げる阿鼻叫喚をきいた時には、私はぢつとしてゐられなかつた。どうして好いのかわからずに、數寄屋橋の袂に立ちつくしてゐた。日比谷の官舍にあづけてある一人兒の安否を氣遣かつて來たのだが、私は子供のことよりも、自分のことよりも、たゞもうこのすさまじい光景に全身を奪はれたやうに立つてゐた。それは自分の子供や自身を忘れて、今死んでゆく人を救はうとしたのではない、死の斷崖で踊りもがいてゐる人の姿に全く氣をとられて、自分を失つたと言つた方が適當であらう。

私がもしあの火中にゐるのだつたら、逃げてゆく人の方へやはり逃げていつたかも知れない。或は茫然成す所を知らず死んでゆく人と共に死んでしまつたかも知れない。

2

今でもまだ生き殘つた事實や、その人間並の喜びさへ、はつきり心に染みないが、あの日も何か落付のわるい、心の底の騷ぐ日で、着物がしつくり身に添はないのであつた。いつでも創作の前に感じる焦慮のやうなものを感じ、いつもの癖で、手や足に何か汚ないものがこびりついてゐるやうに思へたから、湯に入つてきて、さて描きかけのカンバスに向つたがどうも鼓を持つた女の指が、すんなりと描けないので、やつぱり眼で見なけりや駄目だと、自分へ、外出の申譯をこさへて出かけることにした。前の日に別れた、やはり繪をかく友達を誘ふつもりで、足袋をはいてゐる所へ、ぐらツとあの地震が來た。

元來、天災を怖れない私のことだから、何か棚のものでも落ちるかなと思つて、ぢつとしてゐたが、あんまり戸外の物音が烈しいから着物をきて下駄をはいて玄關を一步出ると、もう步けない。駈出したら步けたらうと後で考へたのだが、人に誘はれて慌てゝ走つてゐたら、露地を出る時(私の假りの住居は露地の奥にあるのです)屋根が落ちて來る所だつた。井戸端の木へつかまつて暫く立つてゐた、もしその隣の家が倒れたら、この塀を越えるまでのこととときめて見てゐた。

三日の夜あたりから本當に自然の暴威と天災の怖しさをやつと感じ出したやうに思ふ。誰が宣傳したのか、宣傳の目的が何であつたか私は知らないが、また實際そんな事實があつたことも、私は見ないから知らなかつたが、三日の夜の如きは、私もやはり空地へ出て、まだテント生活をしてゐる人と同じ心持で、何か知らない敵を假想してゐた。川崎の方から、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、新宿のタンクへ向つてゐるといふのだ。二三町先の驛の近くでは、群集のたゞならぬ騷ぎや叫び聲が、はつきり聞える。軍隊の自働車が幾臺か坂の上の方からまつしぐらに走つて下りる地響きがする。其中にピストルの音がした。それにつれて悲鳴があがる。

「おい灯を消せ」誰かが言つた。テントの中でも、立つてゐる人も提燈の灯を消した。息をこらして、本能的にみな地の上に伏した。後できくと大地に穴を掘つて、妻子を埋めた人もあつたさうだ。

私は何の武器も持つてゐないから、敵を殺す氣もなかつた。だから殺されもすまいときめて、垣根の所へ腰かけて、遠くの叫喚を聞いてゐた。それは、幾百人の群集が入り亂れて戰つてゐるかと思はれるのだつた。

だが何事もなくその夜は過ぎた。

流言蜚語の第一報が人から人へ傳はつた時間が、西は、濱松あたりから、東は川崎、目黒、駒込、千葉あたりまで、殆んど同じ時間であつたことも、その地方から來た人にきいて、いまでも不思議に思つてゐる。それは人間の本能的な第六感とでも言つたら好いだらうか。

妻君や子供を殺して、大阪まで落のびた男や、外國へ避難する計畫をたてた人もある。この上どの位、悪いことがある世紀だか誰も豫め何とも言へないことだ。しかし、私は方丈記の作者のやうに、世を果敢なんで、山の中へこもるほど世を見捨てる氣にはなれない。それでもあの騒ぎを見るにつけ、眞赤に焼けてしまつた東京の街を見るにつけて、十日ほどの間は、死んだ街や死んだ人を見て歩いて、夕方郊外の書室へ歸つてくる頃は、何かしら大聲をあげて叫びたいやうな悲しみか寂しさかに似て、もつと不安なものにおそはれて、生きてゐるすがはなかつたものだ。

それでも電車が通じて、街を稍自由に歩けるやうになつてから、また人間同志の淺間しい小ぜりあひや、焼跡に垣を結び、持つてゐるものはより多く持たうとし、持たぬものに持たうとする、人間生活の元氣を取返した人達を見ると、何かしら憤りに似たものを感じて、山へ入る謙譲な心持や消極的なあきらめがなくなつて來る。

何かしよう。創意をもつた自分の生活をしよう。自分をよく生かして生きやう。そんな元氣をとりもどした。

5

これを書いてゐる所へ、鼓を描きに誘ふはずの人から、あれ以來の音信を手にした。それを添へてこの稿を終らう。

「上野の山で三日二晩暮しました。家は出たきりで、二人の女中をつれて、女中の家のある千住まで落ちのびましたが、こゝでも東京の噂におびやかされ、N町の父の家へ歸るつもりで、出かけましたが、N町の近所でもあの騒ぎで、山の中でまた一夜おくりました。そのうち一人の女中にも別れて、二人でやつと翌日父の家へつきました、そこにも居堪らずまた母と女中と三人で、立づめの汽車にゆられて、こんな山の中へ來ました。私の知つた人達は、どうしておいでやら、また、再び私の好きな東京でお目にかゝる時はありますまいか。わづか一瞬の間に、この人もあの人も別れ〳〵に

なつて、たつた一人の心の中に忙しく住まねばならない自然の運命を、今更のやうに考へます。

死ぬに死なれず、不幸な母と二人、私はこの山の中で暮すことでせう。こんな感傷的な心持は、私の思過しでせうか都の様子をお知らせ下さい。繪の道具だけは持つてゐますが、山を見ても空を見ても眞暗で、色彩を持つてゐません。太陽の出る日はいつのことでせう。」

震災日誌

△九月一日

一九二三年九月一日は、人類の有する涙の一大記錄として、歷史のあらん限り永遠に傳はるべき日であらう。此の日午前十一時五十八分――人々は午餉の食卓に就かうとする頃――突如異樣な音響と共に、關東の地は大波の搖らぐが如く搖れ、家屋は倒れ、樹木は碎け、岸壁は崩れ、大地は龜裂し、電車汽車は埒外に外れ、人々は大地に轉び伏して、「此世の終り」に臨んだやうな心持の裡に幾分時を過した。

東京に於ては震後五分時、早くも火煙天に赤く漲り、次いで全市數十箇所に黑煙が渦卷くよと見る〳〵うちに大東京市は火と煙の裡に包まれてしまつた。火勢は時を經るに從つて益々激しく、夜に入つて火焰空に映じて恰も晝の如く、悲鳴を舉げて逃げ惑ふ人々の聲は眞に悽慘、全く此の世ながらの修羅場を演出した。

此の日、最初の强震に次いで餘震頻發、人間の感覺し得るものだけでも、午後六時まで百七十一回、午後六時より夜半に到るまで五十一回の多きに上る。また震後、正南の方向に入道雲の如き異樣な黑雲が現はれ、數日に及んで消えた。人々は之を以て或は伊豆七島の爆發と云ひ、或は東京灣の爆發と稱し、恐怖と昂奮は極度に達した。後になつて橫濱の石油倉庫が爆發して、海に流れた石油に火が付いたのだといふことが判明した。

夜に入り橫濱から東京に逃げて來た者に依つて、東京以西の被害が一層激甚なることが報ぜられた。橫濱は全然全滅し、その上倒壞家屋は目下頻りに火災に襲はれてゐるといふ。又、大森、川崎、鶴見、神奈川等の海岸の住民は、大海嘯の襲來を怖れて、老若男女、取るものも取敢えず、山手の方へ逃げ惑ふてゐるといふ。

夜の更けるに從つて、地震と火災の災害の模樣は、相續いて人々の間に傳はり、東京市外の住民も、それ〳〵逃げ仕度して火勢と風向とを氣づかつた。恐怖と不安とは、無心の童兒をさへ傷心させ、人々は風呂敷や敷布を以て天幕を急造し、野宿してたゞ〳〵夜の明けるのを希つた。

△九月二日

夜は明けたけれど、餘震頻りに來たり、火災も亦未だ全く消

沈せない。昨日來燒燼した區域は、丸の内の諸大建築物を初め銀座、京橋　日本橋　神田の全部、下谷、淺草、本所、深川、芝、四谷、牛込の一部であることが判つた。下谷、淺草、本所深川、小石川、本郷、麹町は今尚盛に猛火に包れてゐる。本社も亦倉庫と共に今午前一時頃、全く灰燼に歸してしまつた。

此の日午後、政府は東京市及び隣接郡部に「戒嚴令」を施行するに到り、同時に食糧其の他の生活必需品の供給を懸念して、官報號外を以て「非常徴發令」を發布した。又、去月二十八日後繼内閣組織の大命を拜して、閣員銓衡中であつた山本權兵衛伯は、此の非常時に際會して一刻も猶豫すべきでないとし、午後六時半急遽赤坂離宮に伺候して、攝政宮殿下に拜謁仰付かり、閣員銓衡の旨を奉答、大命を拜して直ちに親任式を擧行した。新内閣の顔觸は左の如くである。

總理兼任外務　伯爵　山本權兵衛
内務　子爵　後藤新平
大藏　井上準之助
陸軍　陸軍大將男爵　田中義一
海軍　海軍大將　財部彪
農商務兼司法　男爵　田健次郎
遞信兼文部　犬養毅
鐵道　山之内一次

前日午後、所澤の飛行機に依つて、早く關東大災害の報が名古屋及び大阪に傳へられたが、本日午前に至り、船橋無線電信との通信が連絡し、各方面との通信が開けるやうになつた。

東京の火災は夜に入りて大半消沈したやうである。燒失家屋約四十二萬戸、死傷二十萬餘、江戸三百年來の大帝都が僅々二十餘時間にて大半焦土に歸した。

此の日の餘震は、夜半より午前六時まで五十三回、午前六時より正午まで八十一回、正午より午後六時まで八十六回、午後六時より夜半まで百三回。

△九月三日

火災は全く沈靜したけれども、逃げ損んじて多數の燒死者を出だし、本所被服廠跡では約三萬餘、其の他神田、吉原、兩國吳服橋の燒死者は數を知れずと傳へられ、人々みな〳〵心を痛む。

横濱の外、横須賀、鎌倉、小田原其の他湘南地方一帶の全滅を傳へるものがあつた。房州も亦全滅せりと傳へらる。

罹災者中には、前日來一食一飲だにせざるものあり、諸所の各團體は、昨日來焚き出しや救恤等に努めてゐるが、本日になつて漸く組織立つて來る。外米六十萬俵芝浦に到着すと傳はる。

埼玉、栃木、長野等の諸縣より救援隊續々來着する。

本日の餘震は、夜半から午前六時まで六十四回、午前六時より正午まで三十六回、正午より午後六時まで四十二回、午後六時より夜半まで三十九回に及んだ。

此の日關東戒嚴司令部が設置され、司令官に福田雅太郎大將任命さる。

御内帑金壹千萬圓御下賜さる。

△九月四日

本日の餘震は、夜半より午前六時まで三十六回、午前六時から正午まで五十六回、正午より午後六時まで六十回、午後六時より夜半まで三十二回。

官民の諸團體、罹災者の救恤に努む。

△九月五日

餘震は著しく減少し、正午まで四十八回となつた。

戒嚴令を更に擴張して、千葉、埼玉兩縣下に及ぶ旨發表せられた。

△九月六日

本日の餘震は、正午まで七十八回となる。

政府は此際暴利を貪るが如き不徳漢を嚴重に取締るため、緊急勅令を以て「暴利取締令」を發布した。次いで農商務大臣は右暴利取締令に依る生活必需品を指定した。

又、「流言浮說取締令」發布さる。

△九月七日

餘震は著しく減少した。

債務の支拂延期等に關する件につき、緊急勅令公布さる。

都下の新聞紙で二三社、不完全ながら發行せられるやうになつた。郵便電信の配達は未だし。

△九月八日

餘震漸次減少。

特殊の銀行にては、一口百圓以下の預金支拂を開始された。

△九月九日

餘震尠し。

文相全國學生に對して告諭を發す。

△九月十日

餘震尠し。

△九月十一日

本日は微震あり。

米穀輸入稅免除の件に關し、緊急勅令公布さる。

本日現在にて調査した災害後の東京市の人口は次の通りである。

震災前人口	二、四九九、二二七人
震災後人口	一、五八一、二二九人
避難者(市内に在る者)	七六七、三二六人
現在人口	一、六八五、三二四人

○東京近郊避難者、歸鄉者の推定數は、八一三、九〇三人である。

△九月十二日

震災に關し大詔渙發さる。

震災地の租税減免の件に關し勅令公布さる。

本日まで判明せる關東の燒失家屋及び死傷者の總計は次の如くである。

燒失家屋	四四八、七七二戸
倒壞家屋	五六、九六八戸
死者	一〇四、六一六人
傷者	一二四、五六八人

△九月十六日

昨今殆んど餘震を感ぜず。

「帝都復興審議會」官制公布さる、總裁には山本首相之に任ぜらる。

時評

山本内閣について

室伏高信

地震のため東京地方では暫らく新聞を見ることのできないでゐるうちに山本内閣ができ上つてゐた。でき上ることが寧ろ遲かつた。地震のあつた一日の日に直にでき上るべきであつた。勿論その時にはまだ閣員の顔觸が間に合はなかつたであらうが非常の際に備へる内閣としては、首相なりその他の閣員が缺けたるものを凡て兼任して責任を擔つて立つべきである。そのことの一日遲かりしため戒嚴令の施かるゝことも一日遲く、食物の配給も一日遲く、從つて××××××××××××××××××××××××××延いて幾多の×××をまでもちきたしたのである。これ山本内閣成立の際における最大の失態である。

山本内閣は明らかに一つの閥族内閣、若しくは官僚内閣である。その顔觸れからいつても時代後れのしたものばかりである。その爲すところを見ても、××××のやうな世界の近世史が始まつて以來殆んどその類例を見ることのできない××××××舞を演んじ、地震のどさくさ紛れに×××××に對する私憤私怨を酬いるがごとき卑怯陋劣の擧に出で、殆んど凡ての社會主義者を檢束したことなど、その××は歴史によつて贖ぅたれるものばかりである。やがて贖の日がきたのであらう。

けれどもかうした時代後れ、かうした××でさへも、今は世間がこれを甘受しないまでも、少くともだまつて見てゐる。或るものは自××能のために、或るものは勇氣なきがために、そして少數のものは機會のきたるのを俟つたがために、今は默して××××××を受取によりほかにない。

概していへば世間無能のためである。今にして××内閣などができようとは何人も夢にだも思はなかつた。日本の政黨は三

四十年來閥族退治を口にしてきた。けれどもその政黨なるものが抑も怪しげなものであることが一般によく理解されてきた。代議政治の不信用は今日は正にその極にまで達してきた。これ現在政黨の罪であるとともにまた制度そのものの罪でもある。國民の眼から見ると、政黨もまた一つの閥族である。天下を取つた時にはまた一つの官僚である。政黨と官僚または閥族との間に今日では何の區別もないことが一般國民の悟るところとなつてきた。こゝにおいて閥族内閣が今日できたにしても、世間は特別にそれを憎惡もしなければ反對もしない。たゞ冷笑して傍觀してゐるだけなのだ。こゝが閥族内閣の機會なのだ。この機會に乘じて閥族が獨り得意である。政黨がその鼻息を伺ひつゝある。

無能なのは獨り政黨だけではない。日本における組織的勞働者の無能は政黨のそれ以上である。この非常時に何事もなさず、また何事もなし得ない。たゞ官僚が殺戮され行くのを傍觀してゐるだけなのである。かくのごとき無能なる團體はこの際宜しく解散すべきであらう。

暴利取締令

暴利取締令なるものが世界戰爭當時寺内内閣によつて定められたものであつたことは何人も知るところである。そしてそれが非常の際に相當の効力のあらうこともまた何人も疑ふべからざるものである。

資本主義社會における事業または營業の目的は利潤にある。即ち營利にある。營利に限度はあり得ない。より多く利すことがより善きことである。より少く利すことがより少く賢明である。それゆゑに資本主義社會は本來「暴利」といふことはあり得ない。契約賣買による利益はこの社會では凡て法律によつて保護さるべく、レエゼエ・フエルニチンの社會の代表的精神であるべきである。

利潤を罪惡なりとするは社會主義の思想である。社會主義社會では利潤は凡て罪惡である。一錢一厘と雖も罪惡である。從つて利潤は凡て暴利である。

資本主義社會では二錢の蠟燭を十錢に賣つても正當である。社會主義社會では二錢一厘に賣つても罪惡である。

そこで暴利取締令といふものは資本主義と社會主義の中間にぶら　つてゐるあるものである。資本主義社會の破綻を暴露してゐるものであるとともに、社會主義にとつてはもとより中ぶらりんである。

政府にしても若し少くとも、非常時においてだけでも、資本

主義的商賣人主義の弊を悟つたとするなら、暴利取締令でなく、もう一歩を進めて、衣食住の管理にまでは行くべきである。それさへもできず、寺閣の老人連が智慧をしぼつて、せいぜい仲小路廉の術案を踏襲したに過ぎなかつたのでは、その内閣もあまり有能の方ではあるまい。否、資本主義内閣としてはこれ以上にできないのだといふた方が寧ろ至當の批評であらうと思ふ。

東京その他の再興

東京の復興は今日では日本における中心の問題となつてゐる。そのために審議會ができ、復興院ができ、幾多の豫後備の政治家がこゝに復活し、大小の役人がその涸渇した頭惱を虐使することゝなつた。かうした人たちは古き東京とともに、葬らるべき人たちであつたのだ。その人たちによつて新らしい東京が計劃されるといふのだから、それ等のものが取るに足らぬであらうことは今から想像するにあまりある。

それなら東京は如何に復興さるべきか。

東京は如何に復興さるべきかといふ前に、私にとつては、東京は復興さるべきか否かといふ先決問題がある。燒け出された東京市民、その他の罹災民はもとよりこれを救はねばならぬ。これもとよりわれ〳〵同胞の責任である。けれども罹災民を救ふことゝ東京市の再興とは同一問題ではない。否、却つてあべこべだとも考へられる。大都市、若しくは世界都市の建設が人間を救ふか、人間を破壞するかは心あるものが先づ考へなければならぬことである。文明の美名、機械の魔力に囚はれてゐる多くの人たちは大都市の建設によつて人類が幸福になり得るもののごとくに考へてきたこと既に久しい。そして人類が無前の不幸に落ちてきたことも既に久しい。この點を一度考へてから東京市の再興を考へてもらひたい。

東京市が再興しなければならないとしたら、如何にこれを再興すべきか。一つの大都市、一つの世界都市は一つの大國家、一つの大社會生活の必然の產物でもあり、またその中心でもある。一つの大國家、一つの大社會がある限り、一つの大都市、一つの世界都市は必ず存在すべきである。

それゆゑに一つの大都市、一つの世界都市の領分は明白である。一つの大社會、一つの大國家生活の中心機能たることがこれである。またそれゆゑに大都市、世界都市としての東京市の復興はこの職能に從つて企てられなければならない。

東京市は日本に於ける政治的經濟的資本主義の中心として、交通、商業並に統治上の中樞に置かるべきことは勿論であるが

それぞれに都市そのものゝ内部組織も、これに應じて中央集權主義、劃一主義に則る大規模の計畫を建てなくてはなるまい。その街路は先づ紐育のごとく、その建物は伯林のごとくあるべきである。そしてその大都市のオアシスとしては倫敦のごとく廣大な公園、コムモンス、若しくはスクエアをもつべきである。この三つの特質を併せ用ひることができれば、世界都市として若しくは日本における資本主義社會の中樞機關としての東京市はこれによつて再建の基礎を得たものであり、新らたに東京市に生活を營まんとするものゝ住居方針の根本義が定められるわけである。それゆゑに東京市の再建を考へるものは、何よりも先きに、この三つの方針から定めてかゝらねばならぬ。

新東京を藝術化せんとする人々のあることを私は知つてゐる。伯林に遊んだものは、そこに多くの藝術化的努力の跡を見ることができるであらう。けれども大都市的劃一主義、若しくは大都市の精神たる商業主義と藝術とともに兩立することはできない。これが兩立を要求するものは藝術の眞諦を理解せざる人々である。東京を藝術化せんとするなら、東京を、所謂「藝術の大學」——中世都市たらしむべきである。中世都市たらしむるためにはその社會制度も、その文化も悉くをあげて中世化せしむべきである。

復興すべき東京市は藝術の都ではない。滅びたる古るき東京が商業主義の中心であつたがごとくに、興るべき新東京市も再び商業主義の中心であるべきである。でなくては大都市は無用でもあるし、興ることもできはしない。商業主義若しくは商業的中央集權主義を除いて大都市を起さうとすることは、權力を除いて國家を樹立せんとするがごときことである。大都市復興論者は凡てみなブルヂョア、若しくはプチブルヂョアである。今日はブルヂョア若しくはプチブルヂョアの時代である。資本主義はまだ日本においては行詰まつてはゐない。地震後には再び非常な勢ひをもつて資本主義並に資本主義的精神が興隆するであらう。この勢力と精神のもとに大東京の再興、または新興を見るは近き將來であらう。

人々の注意は今日東京市にのみ注がれ、神奈川縣の如き震害の最も激しかりし地方が却つて閑却されてゐるかの觀がある。けれども横濱を初め、鎌倉その他の湘南地方なるものが今日では東京の附屬地のごとくに存在してきた以上、それ等の地方もやがて東京の復興とゝもに復興するであらう。まだ東京の復興するにまでは復興することができないであらうことも止むを得ないことである。

このさいの希望

武者小路實篤

自分は地震の時に日向に居たので何にも知らなかつた。いろ〱のことを聞くにつけて自分が地震のことをかくのはおこがましい氣がする。實際地震の恐ろしさ、火事の恐しさ、津波の恐ろしさは話を聞いただけでも想像以上のことが多い。

家がつぶれて兩足をはさまれて動けない所に火が來た話しなぞは正視出來ない話である。そして見す見す、親や子供や、夫や妻を火中におきざりにして逃げてゆく話しなどは想像するさへ恐ろしいことである。

その他いろ〱恐ろしい話、運のいゝ話、わるい話し、取りかへしのつかない話、感心な話、憎むべき話、利口な話、馬鹿な話、悲喜劇こも〲起つて、何百萬の人がすべてその端役をつとめた事實は、大事件であつたことを語 。人命は勿論、經濟の方面でも、こんな打擊を受けたことは日本では勿論、世界でも珍らしいことゝ思ふ。世界の同情はそれを語つてあまりある。

今は皆、氣がたち、命びろひをしたよろこび、次から次ぎに起るいろ〱の問題、事實で興奮してゐるが、今に段々疲れて來、淋しくなるにつけて、人々の受けた傷は、人々の心にしみこみ、參らすであらう。しかし我々は參つて許りは居られない。

あまりに不幸な目にあつた人はやむを得ない、勇氣をふるひ起す餘地のあるものは勇氣をふるひ起して立ち上らなければならない。幸、自分の知れる限りでは人々は決心を新にし、力を新にし、死んでも死なない意氣を見せてゐる。日本人の底力は今後あらはれ出すはずだ。いざと云ふ時に底力のある國民はたのもしい國民である。人間はさう出來てゐるものかも知れない。ともかく日本は今日まで平穩無事に育つて來た國民ではない。だからこのさいも立派に勝ちぬくと思ふ。

又自分の見た處では日本はどの位ひどい經濟的打撃をうけたか知れないが、國が細長く、大事な部分をやられても、まだ損害を受けない所が多いから、わりに安心してゐられると思ふ。この際地震にやられたものは勿論やられないものも決心をあらたにして、勇氣をふるひ起して、日本の生命力の強さ、根強さをはつきり示さなければならない。

日本が一つの生命によつて貫ぬかれてゐることは今度のことで實にはつきりした。日本は今迄あまりに幸運すぎた。幸運になれすぎた。今度の打撃はあらゆる方面で、人々を反省させ、覺悟を新にさせたと思ふ。眞劍にならないと生きられない時が近づいて來たと思ふ。之からは大事な時であり、面白い時である。日本に面白い人物がゐれば、このさいあらはれて來さうに思ふ。日本の思想界もそろ／＼巨人が出て來てもよささうだ。

ともかく人間の生命を尊重する思想だけはこのさいゆきわたらしたい。人間が人間らしく生きられないこと、罪なきものが罰せられると云ふやうなことは、なくなることをのぞむ。自分は無責任な、未來を考へる力のない革命家を輕蔑するが、又日本とロシヤや米國とまちがへるやうな非實際的革命家を輕蔑するが、人命を重じること、人々の獨立性を尊重することを忘れることは恐ろしいことであることをはつきりさせたい。人々は常識的にいろ／＼の點で目覺めつつあることは事實だが、時代錯誤の人間が白晝うろつくことは、今後あり得ないやうにしたい。

自分はこの未曾有の慘事を何かに利用した人のないことをのぞんでゐる。自分は思想的に、眞理をもつて戰ふのが、一番立派なことであり、又一番まちがひのない効果のあがる方法と云ふことを今更にはつきり知る。

今度の慘事にたいして政府の取つた、いろ〳〵の處置には、現代の日本の常識が餘程影響してゐたことを感じる。米の別ち方、汽車その他をタヾにしたこと、暴利の取りしまり、家なんかのたてかた、罹災民にたいする處置の目標は、五六年前の日本、十年前の日本の政府には思ひもよらなかつた點がありはしないかと思ふ。今度のやり方にはまだ手ぬかりが多く、わづらはしさが多かつたと思ふが、數年前よりは遙かに進んでゐるやうに思ふ。今後さう云ふ常識は次第に進歩すると思ふ。この一般の常識の進歩が日本の生長を意味してゐるやうに思ふ。

だから今後はます〳〵この常識をはつ達させ、今度行はれたある非常識なことは今後決して行はれないやうにしたいものだ。

人命を重じること、他人の不幸に同情すること、之なぞはまちがひのない事である。

自分はこの天災の影響が、今後どうあらはれるか、靜かに見たく思ふ。同時に自分は益々、人々が自分の行爲の責任は自分で荷ひ、無責任なことはしもせず、云ひもせず、そして自分を生かすことを先づ考へ、そして餘力ある時、他人の生ることを兄弟姉妹の氣持でたすけ、そして自分の愛することの出來ない人をも、不幸にしないやうに注意し、そして自分の確信してゐることは益々はつきり云はうと思ふ。非難すべきことを非難するのは恐れないが、それは他人の獨立性を害し、他人の生長をさまたげ、又他人にありもしない罪をきせるおせつかいものか、内に惡るだくみをしながらそこは善人をよそほつてゐる恐るべき惡人にたゞしてだけにしようと思ふ。

他人の生命、特色、個性、先天的にきめられたものは自己の生長力を害してこない限り、お互ひに認めあふべきだ

と思ふ。

自分はいぢけた心、ひがんだ根性、ちつぽけな頭をよろこばない。それは人類の生長にとつて害があるから、自分は大きな心、眞直ぐな性質、ほがらかな氣質を愛する。

自分は昨晩、いやなうはさを聞いた、○家族が○されたと云ふ噂である。その他にいろ〳〵の噂がつたはりすぎてゐる。自分はこのさいすべてをあかるみに出すがいゝと思ふ。そして惡は惡とし、善は善とし、まちがひはまちがひとしたい。憎惡は憎惡であり、恐怖は恐怖であり、底意は底意であり、わるだくみはわるだくみであり、無邪氣は無邪氣である。秘密から生れるものに、日光をあてるがいゝ。悲慘な事實には馴れすぎてゐる，恐怖から生れた悲劇は慘狀的景が出來る。調子にのつた處から起つた罪は、改心させるべきである。すべてを暗に葬るには噂さがひどすぎる。個人の責任は個人が負ふべきで、監督不ゆきとゞきなぞと云ふ言葉は時代おくれである。、、、、、、、、、、、、、、間に責任はあらう。だが人間として責任のもてないことまで責任をもたしてせめることは時代おくれの考である。とりしまれることをとりしまらなかつたらその責任はおふべきであるが、命令に背いて行はれたことに、命令を出したものゝ責任はない。よく上官が、「本官の不德のいたす處」なぞと云ふのを見ると、その空々しいのと潛越なのに不快を感じる時がある。その不德と云はれるのや、責任を恐れて、秘密主義はよくない。少くもある處までは事實を發表すべきである。責任のあるものは責任を恐れてはいけない。すべてがはつきりすれば、なりゆきの自然がわかる。人間はさう不自然なことは出來ないものだ。原因結果をむすびつけてゐるものは、人間の弱點以外ではない。それは眞實を知る時、無理がないと云へる程度だ。たゞ賢くなかつたのと、本當のことが彼等にはわからなかつただけだ。其處で人間はお互にもつと賢く、本當のことを知らなければならなくなる。

秘密の裡に生れるものは、よくない。誤解はさける時がある。疑惑は無意味な犧牲者を出す。自分は日本人の素質にいゝ處のあることを信じてゐる。淡白なことゝ、惡意の少ない點では、類のない國民のやうに思ふ。この位始末のいゝ國民はないやうに思ふ。それがまちがつた考が、不親切な、恐るべきことを平氣で行へる國民にするのは教育の仕方と常識教育の不完全からだと思ふ。憎むべきものを憎むのはいゝ、正當防衛固よりいゝ、しかし罪なきもの、おとなしいものは愛しなければならない。

自分は今後、ます／＼人間の生命をお互に重じ、そしてすべての人が人間らしく生きられるやう、心がけることが常識になることを望んでゐる。このことは實際には容易なことではないが、目標としてはまちがひのないことで、この目標に反する他人の獨立性を傷け、他人の生命を害し、自由意志を壓へつけるものに反對することをのぞむ。それ以上、人々がお互に助けあひ、そして自他の生命が生ることを本願にすることをのぞむ。

いぢけたり、しなびたりすることはよくない。共に大きく生きられることを本願にしたい。天災はやむを得ない、人力でその際出來るだけ犧牲を出さずにすむやう、お互に自分の長所をいかして働きたいものと思ふ。（二三、九、二三）

震災雜記

(後日子供達に見せるために)

平塚明

大正十二年九月一日のお晝近くでした。お母さまはお晝のおかずに坊や達のすきなスチューをこしらへようとお臺所でお肉の鑵詰をあけたり、お芋や人參の皮をむいたりしてゐますと、ふと、代々木の方面から四五臺の自働車が續いて走つて來たかと思はれるやうな響を聞きました。實際お母さまははじめちよつとはさう思つたのでした。なぜならお家のすぐそばの往來は坊や達も知つてゐるやうに、新宿から代々木や千駄ケ谷の停車場の方へ行く道で、人通りは少ないのに割合に車や自働車の多く通るところで、その度毎に可成家に響くのでしたから。併し次の瞬間その間違ひに氣付くと同時に、お母さまは急に襲ひかゝる不安の中で「坊や達は何處にゐるだらう」と第一に子供部屋にかけこみました。その時はもう地震だといふことがはつきり知らされるほど家がゆれ出しました。坊や達ふたありと恰度その時遊びに來ていらしたおむかふのお嬢ちやんの三人はお父さまにすがつてお縁の眞中に立つてゐました。お母さまも無論そこに行きました。震動は容易にやまないばかりか却てひどくなるばかりで親子のかたまりはまるで大波にもまれる小舟のやうにゆら〳〵とゆられ、お母さまはもうまつすぐに立つてはゐられません、兩手をひろげて三人の子供達を一緒に抱へ込むやうにしたまゝでだん〳〵腰をかゞめてしまふのでした。お父さまはそれらの上を蔽ふやうにして立つて、いらつしや

いました。見る間に、お父さまのお部屋の隅の本棚の上の置時計やら寫眞立てなぞがばら〳〵とゆりおとされ續いて本棚が倒れてご本がバタ〳〵と落ちます。襖や障子が外れて倒れかゝります。壁土はザラ〳〵落ちて來て、眼にはいります。今までちやんと片付いてゐたお家の中が忽ちゴッタ返しになつてしまひました。坊や達のお友達のあのお隣の養鷄所の鷄さん達もどんなにか恐ろしかつたに相違ありません。いくつかの鷄小屋からはけたゝましい羽ばたきの音と共にココココココ、ケケケケケ、カカカカカ、コケコケコケとそれは〳〵不安な、そして物狂はしいほどの悲鳴が一齊にあがりました。そしてそのやかましさといつたら近くの瓦のドドドッと落ちる音や女や子供達の喚き叫ぶ聲さへ一時は消すほどでした。

お父さまやお母さまさへ今思ふとなかば夢のやうな氣持で、殆どお互が口もきかず、只坊や達を無暗に堅く押へてゐた位なのですから、坊や達もさぞ度外れの驚きのために只あつけにとられてゐたのでせう、泣き出さなかつたのは勿論こわいとさへ一度も言ひませんでしたね。あの泣き蟲のこわがりやの小さなお孃さんさへ泣くといふことを忘れてゐましたもの。きつとあなた方三人の小さな人達はあの時きれいな眼を大きく開いたまゝ、顔の筋一つ動かさずにゐたのでせう。お母さんはいろ〳〵なことに氣を奪はれてゐたので、坊や達のそのお顔を一度ものぞいて見る丈の餘裕がなかつたのは殘念です。

かうして私達はお緣先まで出たばかりで、とうとう第一震がすむまで外へ出ませんでした。いえ思ひきつて出られなかつたのです、ミリ〳〵と今にも潰れさうな無氣味な音をして、お家がさかんに軋む度毎に、「出ませう。」「今出ちや危い。」「あ、潰れさうだ。」「大丈夫かしら、潰れても」「出ようか。」「瓦が危い。」なぞとお父さまとお母さまとは同じやうなことを繰返してゐるばかりで、それにお使から歸つて來たおばさんが（その時働きに來てゐた派出婦です）表の方

で、「早くおでなさいあぶなう御座います」と大聲で怒鳴つてゐるのも聞えてはゐたのですけれど。

震動が少しやはらぐとお向ひのおばさまはお孃ちやんをお迎ひにいらつしやいました。今迄あんなにおとなしくしてゐたお孃ちやんはお母さまのお聲がすると急にお母ちやまと言つて泣き出すのでした。

私達は今のうちに外へ出ようと思ひました。はじめは庭へ出る氣でしたけれど、庭といつても極く狹いのですし、垣越しに續く廣い養鶏所の地内に出れば一番安全な場所ですけれど、お父さまはいゝとしても坊や達やお母さまには生垣を乘越すのが面倒なので、いつそのこと往來へ逃げようと玄關まで出たところで、又地響きと共に搖れ出しました。お父さまとお母さまは夢中で隣室の大机の下に坊や達を無理に押し込むやうにし、お父さまは外れた唐紙を楯にしてその周圍にお立てかけになる、お母さまはお母さまで、お戸棚からお蒲團を引きずり下して又その上にかぶせようとあせりました。全くお父さまとお母さまの心は坊や達を保護することで一杯になつて居たのでしたから。

「こわい！」と敦ちやんが泣きかけたのはこの時がはじめてでしたね。でもこれは地震そのものがこわかつたといふよりもお姉ちやまとふたりきりで机の下へ押し入れられたことや、そしてお母さまのお顔が見えなくなつたことや、お母さまの手で自分の手がしつかり握られてゐないことなどが急に不安と心細さを増させたのでせう、けれどお父さまに「泣いてなんか今ゐられない」と言はれて、すぐだまつてしまひました。

二回目のこの震動を過ごさしてから、私達は皆靴をはいて靜に外へ出ました。出て見ると露路の兩側に瓦が澤山落ちてゐるのに先づ驚きました。お家の屋根を見ると、可成りの被害らしく棟瓦まで殆ど落ちてしまひました。近所の人達はもうみんな外に出て、ひと塊になつてゐました。跣足の人も幾人もゐます。四五軒先の炭屋の店先は、高く積み上げられた炭俵や薪束などが崩れ落ちて、路にころげ出てゐますし、瓦や壁の落ちたのは家並ですし、土手の崩れたところ、

門の倒れたところなど、地震は實際思つたより大きかつたのが知れました。

併し私達は外へ出て、安全らしい場所に立つと、急に氣が樂になりました。そして地震がきのふでなくてよかつたことを話し合つてよろこびました。昨日のこの時刻にお父さまとお母さまは、ほんとに久しぶりで坊や達を連れて淺草へ坊や達の大好きなお猿さんや犬やお馬などの動物が澤山出るといふ活動を見るために行つてゐたのでしたから。

けれど多少の心の餘裕の中でこんなお話をしてゐるところへ又大きな水平動が來ました「そら又來た」人達はお互に寄り添ひ、つかまり合つて、不安と恐怖の眼で大きくゆれ動く頭の上の電線を見上げ、電柱が倒れやしないかと氣遣ひ合つて居ました。

それからも餘震は何回となく殆どしつきりなしに襲つて來ました。一度去つた不安がまた返つて來ました。私達は大きな、古いらしい電柱をさけて櫻の大きな木の兩側に並んだ、どこかの邸宅へはいる小路の方へ避難し、搖れ出すときは樹の幹に抱きついて身を支へました。氣のせいか搖れてゐない時でも全身に大地の動搖を感じて、お船によつた人がはじめておろされて土を踏んだ時のやうな氣持が絶えずするのでした。

一時、二時になると御役所や會社などに勤めてゐる洋服のおぢさん達が汗だらけになつて、てく／＼と歩いて通るのを何人も見ました。あの人達はみんなお家にゐるお母さんやお子さん達を案じてあゝして急いでお勤め先から歸つて來たのでせう。お母さんは曙町のお祖父さまのことを思ひ出しました。お祖父さまも今頃あゝして丸の内から曙町までの遠い路を、お家のことを心配しながら歩いていらつしやるのかも知れない。お祖父さまもお祖母さまも御無事でゐて下さいと御祈りしました。

私共がはじめて市内の被害狀態を知つていよ／＼夢のやうな出來事に驚いたのは京橋の會社からお隣のYのおぢさんが歸つて來られてからのことです。

天災の價値

鷹野つぎ

大災害後の思想界――ひいては一般民衆の生活態度といふやうなものが、今後どう變化して行くか、斯ういふことは、目下一部の人々の間には、興味ある話柄となつてゐる。

しかしよく考へてみると、此の天災を機會として、どう變化して行くか、或ひはどういふ開展をとつて行くか、といふやうに考へるまでには、考察の餘地があるやうに思ふ。

○

私は自分の立場から、殊に女性に關して云つてみるつもりであるが、果して婦人界にも、斯う云ふ傾向が現はれて行くものとすれば、此の天災のもつ價値は、色々の意味で、從來の女性の生活の、いかに浮薄に傾いてゐたかを、指示する點にあるのでなければならない。

○

一體斯うした大變事に際しては、大多數の人々が、ある一時的、特種な心理狀態に置かれるのは、止むをえないかもしれない。それにしても事を重大に感ずるものも、また左程に感じないで濟まして居られるものもあるかと思ふ。

悽慘たる災害に直面した人々の、氣の毒な有様のことはしばらく此の話のほかにして、此の際人心が、徒らに狼狽を

感じ、或ひは徒らに重大事に際會したやうに、思惟するといふのも、決して本來の狀態では、ないといふことができる。

○

若し斯ういふ心持ちから、われ〳〵女性の間にも、まるで昨日の生活が此の突發事に刧されて、明日にも一變化して行くやうに考へるものがあるとすれば、曾ての彼女らの生活の根柢は、果してどこにあつたのかと、指摘される順序になるのが當然ではないかと思はれる。

○

しかし此の際指摘されて、顏を赧くしないで居られるものが、どれほどあるであらうかといふ事が考へられてくる。事實、異常な緊張と發奮とをもつて、此の際私たち女性間の生活態度も、一新されて行かなければならないと、考へて行く方が、遙かに妥當を思はせられるのは、そこに餘りに私たちの從來の生活態度に、浮華、弛緩、遊戲の分子が、多分を占めて居たがためではなかつたらうか。

○

一面から云へば、ある變事に際會して、ハッと氣のつくやうな私たちの狀態は、決して悅ぶべき狀態ではないと云へる。若し此處に一生をもつて正しく生活して行かうとする者にとつては、心の緊張は不斷の狀態に置かれて居るべき筈である。

○

斯う云ふ點では人間ほど、平穩に馴れ易く、また自己をなみし易いものはない。此の場合等しく、慘澹の狀態に戰慄する人の心は、また遊樂に己れを忘れる人の心であるかもしれない。

此の間にあつて、私は女性間にも立派な、根の据つた生活意識が、一貫して居べき筈ではなかつたかと思ふ。それは決して、斯うした間歇的な天災の襲來によつて、その都度立て直されて行くやうな、さうした種類のものであつてはならない。從前にもあり、また將來にも續く、不斷の生活態度の充足である。

○

口にすることは易い、そしてまた斯ういふやうに自ら私たちが叫することも、容易ではあるが、さて何時になつたら至りつく境地であらうか。私たちは平穩に際しては、知らず識らず眠り、知らず識らず怠り、そして知らず識らず弛緩して行く。個々の小さなその時々の緊張などは、此の眼に見えぬ尨大な、平時の時の流れには、何等の力も見せてはくれない。

哀しむべき人間、憐れむべき人間――小さな誇へに生きて行く人間、獨りよがりの人間、憤りも愧も思はぬ人間――さうしてあらゆる寂しき人々の、その色々が生れてくる。

○

人心は徒らに小さく、千切れ〳〵て歸趨を失つて行く、眞實なものはだん〳〵影を沒して、人生の奥底に沈んで行つてしまふ。

私たちは何時になつても、此の情勢に依つてゐる以上は、生活の土臺となつてくれるやうな、偉大な力を見出すことも、恃むこともできない。

○

「いゝ加減だらけてしまつて居た」と、災害以前の世間の狀態を、人々は等しく評して居た。「特に女性は、此の機會に

救はれなければならぬ點が多い』。

私はむしろ此の際、此の天災を目して、重大だと見る人の心を、まだしもたのもしく思はざるを得ない。私たちは最早、化粧に浮身を窶す前に、不平を並べてみせる前に、小さな目前の樂しみを追つて行くまへに、再び赤裸々な人間に立ちかへつて、深く深く各自の生活の核心に直進して行かなければならない。

○

質實な、健氣な、そして優しい聲が、最早私の耳に聞えてくるやうな氣がする。軈てそこに新らしく生れてくるものは、實に輝かしいまでの素朴な、女性の姿でなければならない。

博士のゆくへ

深尾須磨子

正しくそろへた二本の手を、
いのるものゝやうに空に向けて、
時も氣をうしなつた。

ああ、千九百二十三年九月一日、
一線、筆太に朱を引いて、
潰えたいのちよ、炎上した力よ。

刻め、永遠の胸深く、
おりんぴやの園をもふるはせて、
お前の最後は偉大だつた。

驚き、怖れ、喪心、自失。

そして今、半壊の扉から、
さし覗く生をいぶかりながら。

私はおもふ、
あの可憐な小娘のありかを、
あの有徳の博士のゆくへを。

悪鬼の形相すさまじく、
のたうつ白煙に空を壓して、
大東京よ、お前の死は偉大だつた。

火嵐に追はれて

坂本眞琴

疫術にて入院四日目、食鹽注射を終へた計りの十一歳の長女を背に、夕暮迫る頃木挽町の病院の門を出る折、私は、のがれ出づる自分達よりも、大森の住居、店舗、病院の三つを一身に氣づかひ、今日本橋の眞中にある夫が、再び此病院にかけつけて、どんなにか焦慮探索し、平素の身輕を利してどんなにか猛火を犯す事だらうと、全身は火のやうにほてりましたが、勢に押されて、海軍病院、兵學校、水交社、芝離宮と後々と火の嵐に逐はれ乍れ、逃げのび、離宮の草原に病兒を伏させて、頻りに騒ぐ心を叱つて、帝都を燒く煙を通して見る、赤く鈍い色の月の愁ろ空を仰いで、暫く祈り注射其他の手當をすまして、辛く鐵路に匍ひ上り、火の嵐、焔の海、天地を震撼する轟のうちに包まれ終つた帝都を後に、重き歩みを進めましたが、そのうちに、附添の看護婦にも去られましたが、不思議に勇氣も脚力も衰へませんでしたので、一氣に大森の住居迄と思ひましたが、背の病兒を死屍にしてはと心附き、通りがゝりの高輪病院に假の診療を願ひますと、大混雜中であつたにもかゝはらず、院長はじめ多くの方々の情によつて親切にいたはられ、悲喜の涙にくれて、曉を待ち、二日朝には漸く家族一同顔を揃へ隣家の庭の急造テントに入りました(不思議にも病兒も元氣にて)、これを己れ一個としましては、正に火の洗禮を受け、貴い體驗を得たものと信じて居りますが、その後にまた言語に絕した避難談の中へは入らんかも知れませんが。

小田原の一知友の遭難談を摘錄しまして、湘南地方の震動の激しさと、直接地震によつて受けた慘害の程を知る一端にいたしたく存じます。

「道を歩るいてると、何をも感ずる暇もなく只前に倒されたが、倒れ乍ら前を行く馬も亦倒されたの丈認めた、次の瞬間には一大音響が起り、黒烟がパッと立ち昇るのが見え(これは家屋倒壞による土砂)たので、噴火にちがひない、熔岩、熱砂が今にも體を埋める事だらうと觀念してゐると、その事はなくて、今度は路上に横になつてる體が、ゴロ〱ところがされるので、無意識に電車のレールにしがみ付いてゐると、目の前で大地は一尺に開き、二寸にちゞまり、叉尺餘の龜裂となつて、大きな呼吸をやり出したので、凄い中にも、噴火ではない地震だと、斯くハッキリ考へ付いたので、死ぬものなら自家でと思つて、一切何事も夢中で、二度三度倒されながら馳けつけて、火のかゝる迄の一時間半に、何處からどうして道具を出したか、下敷となつた店員を救け出した、店員の片足は半分もげて仕舞つた」

東京の振動に比して何と云ふ激しさでせう。

プラタナの芽、災後半月、私は痛ましい焦都を歩み乍ら、ふと燃えて枯死したとのみ見える街路樹プラタナの根幹に緑の新芽が勢よく吹き出して居るのを見付けました。大東京は正にこの新芽と共に、何も彼も第一の出發點に戻り、十年の堅忍、二十年不撓の勇氣を把持して、靜かに嚴に、復興の途に上らなければならんと思ひます。勞働、政治、婦人、社會、宗教、教育等の諸問題もその混迷に陷つた總ての行懸りを捨てゝ正しきコースに入るべき絶好の機會だと信じます。建築、公園、水利、道路等、帝都復興の具象的事柄に就いては、これを擧げて、權威ある專門家の献身的研究の結

果に信頼し、市民は安心してその指示に服し、大都市市民の一員たるを自覺し、かりにも自己一身の利便の爲めに、その精神を沒却し、形を備へて質を缺く如き擧措に出づべきでない事は勿論で御座いますが、如何に立派に市街建造物が完備しましても、これに當る人心にして、曾つてありし日の如く傲つて省みる事を知らず、何等信念なくして信仰を冷笑し、一朝にして灰と化すべき目前の物質のみを最善最後の盾と心得、その盾が大自然の一撃に一たまりもなく喪失した時、只狼狽と恐怖とのみに陷るが如きであつては、新帝都の再建が成つたとは申されません。で私は帝都の再建はその礎を先づ一新せる人心の上に置くべきであると信じます。將來市街、生業の復興は常に恒に、民心の訓練、信仰養成等靈的事業と並行して行くべきもので、物質文明のみ偏重して發達するは甚だ危い事と存じます。

勿論天災そのものは如何なる信念信仰もこれを如何ともなし得ません、しかし爾後に生じた人心の大動搖、恐怖と、爲めに起つた幾多の悲しむべき事象等に思ひ及びますと、誠に慄然たるものがあります。流言を聞いて直ちに、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、平素の主張も意識も殆ど喪失して、、、、、、、、、、如くに思惟する如きは正に現代國民性の最大缺陷を語つては居りますまいか。、、、、、、、、、、即ち先づ自ら秩序を破つて、他の秩序を亂るものに對して、攻勢的警備をなすと云ふやうな一大矛盾には、ほと〳〵驚ろかされます。

今囘の復興事業は十年二十年更にひるまない堅忍不撓の大精神を絶體に必要とします、この精神にこそ、將來の大東京が孕まれて居ります、一時の昂奮や激越に何の望がかけられませう、二十年の忍苦耐難の途は飽く迄も眞摯に合理的に進まねばなりません。私は此の際新東京復興を象徴する新芽あるプラタナの下に、醉を賣る酒店の多いのを悲しみます、一般禁酒論者の主張以外に、私はこの非常時の非常手段として、當局が大英斷を以つて、酒の上に一大制限を加へられん事を望みます。（一九二三、九、二八、靜思の時なき雜居の室にて）

災後

與謝野晶子

死ぬ人をいかにかすべき東京の燃え立つここはさもあらばあれ

みづからの亂れ心の相をして都のなかば燃え立ちにけり

われの身に劫火の來り及ばぬを知りつる後に心おちゐず

凶器を持つてふここはさしおきて天に比するに足らぬ人間

誰見ても親兄弟のここちすれ地震をさまりて朝に至れば

天變に生くるそらなき日の續きえがたくなりぬ我子らの糧

地震に生き聞くに堪へざる報せのみ聞くべき人となりはてしかな

地にものを語る人のみ過ぐるなり東京の街廢墟となれば

東京の銀座のあとのやけつちのよこにつらなる地平線かな

燒土の中をゆきつつ町の名のをりふし胸にうかぶさびしさ

震災雜感

吉田絃二郎

S兄。

震災遭難について何か書けとのお話ですが、震災最中に家を追はれ、同時に被服廠跡に逃げた老人を發見するために夜を日をつくして探し歩いた疲れもまださめませんし、それに十一日目に發見し得た老人はまだ病院に在りますやうな次第で、とても落ち着いてゐることも出來ませんので何も書けません。

震災について一つ二つ思ひついたことだけを書かしていたゞきます。

東京の地震そのものは私たちが昔から聽いて想像してゐたほどひどいものではありませんでした。しかしその結果はとても人間の想像をゆるさぬほどの殘忍なものでした。

ほんとうにひどく搖れたのは十分か十五分ぐらゐのものでしたらうが、少か十四五分の時間で幾百年の人間の努力といふものが跡形もなく滅びてしまつたことを考へると、妙に寂しい氣になります。

しかし十四五分の地震が破壊したものは都市といふやうな形而下のものばかりではありませんでした。私はあまりに多く赤裸々にされた人間の心を見ました。美しい心をも見ました。同時に淺猿しい人間の心をも見ました。普段は富や社會的地位といふやうなものゝために掩ひかくされてゐたものが、あまりに醜い形をさながらに現はして來たのを見ま

した。

地震はすべての人間の心の裝飾の壁をも搖り落してしまひました。

地震の動搖が止んだら、恐らくその人たちは再び心の上に僞善の壁を塗り立てることでせう。

S兄。

町を歩いてゐるともう白粉を塗つた女や、めかしこんだ男たちが目につきます。第二、第三の震災が襲ひ來て、かれ等自身み燒き盡すまではかれ等は天啓を覺らないのでせうか。

讀者諸姉へ

◇自然は、此度の大震災は、われ〳〵を本當に沈滯と惡夢との底から救つてくれました。われ〳〵の生活を象徴するものは「三越」でした。われ〳〵は「三越」が燒失したのを見たとき、われ〳〵の緩るい生活も葬らるべきであつたと氣附きました。われわれの生活は、餘りに浮つ調子でした。われわれは「三越」の代りに、先づ家政を顧みませう。「御用聞き」の代はりに「公設市場」を利用しませう。そして質實に、簡易に、臺所の「社會化」に向つて歩みを運びませう。

◇「女性改造」はどこまでも續けます。此度の事變が餘りに大きかつたからとて、自然の破壊力が餘りに慘酷に見えたからとて、決してわれ〳〵は、意氣沮喪して挫けるものではありません。從來の婦人雜誌が時代の輕佻な方面を强調しつゝあるときにもわれ〳〵のモツトーとする精神に嚙り附いてゐました。われ〳〵は益々、われ〳〵の生存すべき權利をこそ見出せ、決してこうした大災難で諸姉とお別れして、存在を絕つべき理由を見出しません。

◇電話なく、電燈なく、水道なく、電車のない神田、下谷、本所、深川、芝、本郷、淺草、赤阪、日本橋、京橋の燒跡の夜景はそゞろに涙を催させます。暗くて、さびしくて鬼氣迫まるの思ひがあります。

◇餓死した人、燒死した十萬の人々も可愛想ですが、生き殘つた罹災者が壁もなく、疊もなく、衣物もないバラツク生活は全く此世ながらの地獄です。罹災者でない餘裕のある方々は一椀の食を節してゞも、一枚の衣類を脱いでゞも救助せらるゝことをお願ひします。

◇燒き出された本社は假事務所を東京府上大崎六四五に移轉しました。目下舊本社跡へ建築中ですから來月から引移ることが出來ます。そして混雜の際です　ら小賣店に雜誌がありませんでしたら直接本社に申込んで下さい。そして當分は振替によらずして爲替で御註文して下さることをお願ひします。

女性改造　定價表

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵稅共
十二册	六圓	郵稅共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く（但し支那を除く）
へ見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料（一等百圓
二等七拾圓）

○本社廣告取次所　日本電報通信社
博報堂　弘協舍

大正十二年九月十八日印刷納本
大正十二年十月一日發行

編輯兼發行
印刷者　東京市芝區愛宕下町一ノ一　平田貫一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町　株式會社秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
東京振替　八四〇二

近刊三種

末弘嚴太郎著　農村問題の研究

本庄榮治郎著　日本社會史

大杉　榮著　自叙傳

改造社


三越で例年大高評な
十月の賣出し
九月二十六日から十月九日まで吉例に依り例年大高評なる寄裂賣出しを四階で催はします、そこには實用品を主とし破格な廉價で提供して居ります、即ち銘仙が七圓五十錢より、お召縮緬が十七圓より、帶側が八圓より、裏地が木綿で一圓位、絹物七圓位、その他十月は各種の實用品新流行品を潤澤に取揃へて御覧に供します、
東京
越
三越呉服店


ライオン煉歯磨
清新優雅な其香味と、著しい其效果とは、新しい御婦人方の賞讃の的となつてをります。
智慧と歯は毎日磨け

東京秀英舍印刷

復刻版 女性改造（じょせいかいぞう）〔戦前編〕第2回配本（第4巻～第6巻）

2007年12月10日 発行

揃定価（本体60,000円＋税）

発行者 船橋 治

発行所 不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433

印刷所 三 進 社

製本所 青木製本

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6075-0（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6072-9）